

＜活・動・記・録・日・報＞

(ボランティア活動記録から抜粋)。

平成7年

- ・4/1 避難所訪問 神戸商船大学－仮設住宅が当たらないと朝から中年男性が酒盛りをしている。『ボランティアさんも飲まんか』といわれ飲むが周囲の目が気になる。仕事がなく時間を持て余し気味、この頃からアルコールに関する報道が多くなる。ボランティアとして程々にか、酒害について話せる雰囲気ではない〔潜在的なアルコール依存症の方もいて社会問題化する。ボランティアは社会資源（行政機関）につなぐ役目である〕。

3人の兄弟が体育館の中でしょんぼりしている。新学期を迎え子どもの人数が極端に少なくなる。何回も訪問するがうち解けない。無気力・無表情で表情の変化がない。母親の理解もなく関わりが持てない。親の目を盗みながら関わりを持つが、見つかっては連れ戻される。新学期を機会に無理して殆どの方が、避難所を出ていかれる。大人は生活再建で子どもへの関心が薄れている（子どもの支援が忘れられている）。ボランティア活動に対して迷いが生じる。要援護者の『気持ちに添う』ことの難しさを日々体験する。気持ちに添うこととは、話が聴けることであり、相手の気持ちをくみ取り共有することと理解した。

- ・4/6 活動開始 S地区－仮設住宅。場所が変わると緊張し話の切り出しもできない。冷静さを装うが緊張の連続で、ハイ状態で足が地につかないまま戸別訪問する。

仮設住宅での活動は初めてで、入居者は引っ越しの片付けと急激な環境の変化で、取りつく間もないほど緊張され、訪問に警戒される。ボチボチ気長に活動していきたい。

- ・4/15 神戸－今日からH帰りの定点訪問になる。

二浪の青年と面接談。地震で人生観が変わった。なるようにしかならない。じたばたしたところで自分の思うように行かないのが人生と開き直りである。希望が高かったが、来年は是非とも何処かに合格したいと力強く伝えてくれた。来年の健闘を祈る。

避難所の関心ごとは、仮設住宅の入居である。早く皆さんの転居先が決まればと思う毎日である。

- ・4/29 ヤングママ（離婚）との面接。

退行現象の子ども（3人）と関わり自分の事はすっかり忘れていた。ふと気づいたとき身体の不調に気づき病院へ行くと胃潰瘍と告げられる。長期の避難生活でストレスもピークに達す（身体の不調を訴えられる人が多くなる）。

- ・5/20 活動休暇を取り2週間ぶりに参加する（一回休んでも気後れする）。避難者が次々と仮設住宅へ転居され避難所が閑散となる。取り残された人のイライラがボランティアに降りかかる（ボランティアのストレス解消が問題である）。

- ・5/21 日本テレビが私たちの活動を追いかける。初めての体験で緊張する。気になり活動が出来なかった。良い経験をさせてもらった。インタビューでは、思ったことの半分も話せない。

- ・5/22 東灘区のテント村 初めて行く。どんな人が避難されているのか、不安な気持ちで訪問すると、小さなテントに親子3人生活されている。想像を絶する過酷な環境に呆然とする。

- ・5/25 姫路の仮設住宅－民生委員とチラシ（連絡先）を持って一軒一軒訪問する。老人の一人暮らしが気になる。うつろな目、頻繁な訪問活動が必要である。
- ・5/31 S地区－中年男性が手持ち金が400円しかなく、今日の生活費がないと泣きつかれる。日銭が欲しいといわれたので知り合いの土木業者を紹介する。
- ・6/12 S地区－担当民生委員がパニックで『SOS』、話を聴くがバーンアウト寸前である。一人で何もかも取り込まれ、疲れがピークに達している（残念ながら後日バーンアウトされ委員を辞任される）。立場上秘守義務を頑に守られ一人で関わろうと無理された。もう少し関わりを持って活動を分散出来れば良かったのでは？
- ・6/13 S地区－神戸に帰りたいが交通費がないので2000円用立ててほしいと頼まれ貸す。後日返済してもらったが、返えてくれないと一時でも人を疑ったことが反省。活動中それ以後はお金を貸さないことにしたが……。
- ・6/20 S・T地区－入居者がピークに達する。生活環境の急激な変化で多種多様の相談事が頻繁にある。分からないことは調査し早急に知らせる。
仮設住宅内の雨上がりは、泥濘で歩けない状態で窪地を埋め均す。
- ・6/27 S地区－アルコールを飲んで千鳥足で住宅内を歩いている。訪問するとお酒を買ってきてと頼まれるが断る。いろんな人が、アルコールで寂しさを癒している。今後が気になる。
- ・7/9 姫路『こころのケア』ネットワーク会員が一同に集まり発足式をする。発足会に20名のボランティアが参加する。今後継続的に活動する事を確かめあい、活動方針を決める（当初から残っているメンバーは3名で、現在の会員数は27名で継続活動の難しさを知る）。
T地区－19才の子どもを亡くした母親と面接中、急にフラッシュバックに陥られ、どう対応してよいか分からず、一瞬パニックになる。症状は知っていたが、体験したのは初めてである。（その後度々症状が起きる）。
- ・7/15 活動報告会 大阪－初めてのことで緊張する。（以後東京その他で報告会・ボランティア講座 仮設訪問の現状・災害時における心の心理等々について講演）ボランティア活動の中から知り得たものを皆さんとともに共有し共に考える楽しい一時。
自殺防止センターのチラシ（一人で悩まないで）配付や、棚付けの手伝いをする。
民生委員と協力し自治会設立への下準備に取りかかる（設立後継続的な支援が必要となり支援するが悩みの種になってゆく）。
情報不足解消のため『広報こうべ』の一括申込み手続きを代行する。
- ・7/27 T地区－家の直ぐ前にゴミ集積場があり、風向きと暑さで悪臭が深い辛抱出来ないと悲痛な訴えがある。行政に移動を申し込むが、作ったものは移動できないとの冷たい反応。この暑さで生ゴミの悪臭に悩まされノイローゼ寸前である。仕方なくボランティアと住民でゴミ集積場の変更をする（貧乏しても心まで貧乏していない、何故こんな仕打ちに合わされると涙ながらに訴えられる）。
- ・7/29 夏祭り T地区－ボランティア7グループが協力。（大変な賑わい）
- ・7/30 S地区－入居一週間の男性が亡くなる。自治会活動が軌道に乗っていないのでボランティアが協力してご会葬のお手伝いをする。
- ・7/31 長期の避難所暮らしで身体の不調を訴えられる人が目につき、保健所に巡回健康診断を

願ひする。市内四箇所の仮設住宅で順次実施してくれる。

自治会設立へ奔走する。関心度は低いが、設立への機運を盛り上げたい。

- ・8/4 アルコール依存症患者 T地区-(女性)を保護する。福祉関係者はかかわりを拒否、仕方なく保健所・警察に連絡しながら一時保護していただくが、連絡から問題解決まで12時間もかかりぐったりする(以前民生委員として関わった経験が生かされる)。
- ・8/7 仮設内で活動するボランティア団体のネットワーク化の準備をする。
- ・8/13 S地区-長期間面会でできなかった人と久しぶりに出会い安心する。留守にするときは、近所の人に連絡してから外出してと願ひするが、他人と関わりたくない・話もしたくないと言われる。嫌がられるのであれば無理して訪問する必要はないと思い、以後の活動でその家は飛ばして戸別訪問する(その後、その人が亡くなり27日も発見出来なかった。各仮設住宅で孤独死が起き、マスコミも取り上げ深刻な問題になっていく)。今回の問題を捉え、マスコミはボランティアとしてどう思われますかとインタビューされるが、どう答えていいのかわからない。只残念で自責の念の一言。ボランティアに責任があるのか?
- ・8/21 T地区-入居受け入れの学生ボランティアが撤退し一気に寂しくなる。
- ・8/23 水道水が神戸に比べ美味しくないと言われる。馴染んでいただくまで時間が必要。
- ・8/29 『いどばた会議』 T・S地区-被災者復興支援会議現地開催のコーディネートをする。遠隔地仮設住民の切実な思いを聞き取り行政に反映してほしい。
- ・9/8 仮設住民の一言『好き好んで姫路に来ているのではない、神戸市内に収容場所がないから行政に協力し仕方なく、渋々来ているのだ。友達が烏流しにあったようなものだと言っている。』
- ・9/15 初めてのイベント S地区-国産最高級の牛肉を使い、焼き肉パーティー(100人)を実施する。ボランティア仲間の結束と顔を売り込む意味もある。大成功で住民も喜んでくれる(企画書を作成し、間違いのないようにするが、経験を積み上げていくと次第にアバウトになって行く。結果的にその方がうまくいく)。
- ・9/17 T地区-活動する他グループの一人から電話が入り、戸別訪問で『死にたい』『身寄りがない』『仕事がない』『死ぬことは怖くない』『死んだら瀬戸内海に遺骨をまいて』と言われ落ち込んでいるボランティアがいると聞き、ボランティアのケアをする。(ボランティアの電話相談に乗ることが多くなる)自分自身のケアも必要になりつつある。
- ・9/24 T地区-二回目の焼き肉パーティー後、ボランティア団体間のトラブルに巻き込まれる。活動の縄張りとかあつれきに悩む(活動が安定すれば周囲を見渡し各団体間の中傷が始まる。誰のためのボランティアかフィードバックする必要がある)。
- ・10/2 T地区-精神弱者が隣近所に迷惑をかけていると、社会資源(行政)に連絡が入り強制保護に入るが失敗する(共生の時代といわれるが、こころ傷めている人は受け入れ難い環境で今後が心配だ)。
- ・10/3 実践活動発表 福祉の街づくり大会です。(約800人参加)報告会やマスコミに取り上げられるとプレッシャーがかかるがそれなりにはげみにも。
- ・10/4 始めて神戸の仮設支援連絡会(被災地で活動するNGO団体)に出席する。(情報収集と団体間のネットワークが必要になる。)

- ・10/7 ふれあいセンター開所 市内2ヶ所—今後はふれあいセンターを中心に活動が始まる。運営費の使途によって問題が生じないように、運営協議会にボランティアも参加させるべきだと担当の社会福祉協議会に申し込むが受け入れられず残念（他所で使い込みとか不鮮明な問題が生じる。マスコミで話題になるたびに、市内仮設住宅でもこの事で役員と住民のトラブルがしばしば起きる。ボランティア団体が参加すべきだったと思う。）
- ・10/14～15 子どものふれあいキャンプに参加する（この頃から言語化できない子どもへのケアが問題になる）。
- ・10/18 T地区—隣人の安否確認が取れないと連絡が入り、民生委員と警察官立会いで確認する。（調査の結果、病气入院中であった。住民間でも確認が取れずコミュニティの発達には時間がかかる。この頃から仮設内で孤独死が問題になる。（7～8カ月）も発見出来なかった事例もある。160人を越える孤独死が出ている）
- ・10/25 活動が日常になり疲れが気になる。最大の課題は、援護者と要援護者との距離間の取り方である（この頃から心配りがあったが、ある役員を依存させる結果になる。離脱するのに苦労する。距離感の取り方は各人各様であり、力量の範囲で取ること、言葉で理解できても実践では難しい。深入りすればするほど居心地がよくなり結果的に依存させてしまう。まさに共依存）。
- ・10/27 復興住宅の募集 家賃が高額で応募する人はない。恒久住宅への関心度は低い。
- ・10/28 赤ちゃんの置き去り事件 T地区—夫婦間のストレスが子どもに向かい、捌け口が虐待として現れる（別居か離婚になる）。
部屋の仕切り壁はベニヤ板一枚でプライバシーが確保できず、隣人とのトラブルが絶えない（隣のいびきが聞こえたり、電話の話し声は筒抜けである）。
- ・11/3 T地区—イベントチラシを勝手に部屋にほうりこんだとくってかかれる。（イベント毎に何かが起き、自問するが。その度に活動の原点に戻る）。
- ・11/5 大イベント T地区—神戸のボランティア団体（NGO）と300人分の焚き出しとバザー等する。ネットワークの必要性を再認識する。
住民に、ボランティア仲間の一人にケアが必要だといわれ気づかなかった自分に大ショック（課題を持った人、活動休暇を伝えるが後味の悪いことが暫しある）。
- ・11/8 A新聞社から遊隔地仮設から明るい話題を報道したいと協力依頼があり快く受け入れる。
- ・11/12 ハイキング T地区—被災児童（5人）を連れて行く。何もかも束縛される住宅内から一時でも開放され、自然の中で自由に子どもらしく伸び伸びと遊んでくれる。
- ・11/12 孤独死 S地区—起きる。報道各社がボランティアの立場でどの様に思われますか？今後の展開は……とインタビューを受ける。何故ボランティアにマイクを向けるのか追い詰められる。『残念で仕方がない。先週も2回訪問しているのに。先入観とか固定観念を持って活動してはいけないとつくづく思い知らされる。以前から留守勝ちで長期不在する時は、近隣に一声掛けてと言っていたが、……私には私の生きかたがあるといわれ、戸別訪問から飛ばしていた。こんな結果になり残念、長期間（二十数日）発見できず自責の念です。全ての人を受け入れず、排除していた事を反省し、今回の事を今後の活動に生かしたい』と答える。ボランティアの責任ではないと己に言い聞かす。一番の打撃は活動理解者の家族から、『何のた

めの活動……色々やっているから手薄になっているのとは違う』と言われる。当たっているだけに辛い。

【今後の課題と展開】

- ①一人暮らしの方に緊急時連絡先を書く用紙を配付し見やすい所に張る。
- ②自治会役員会と早急に話し合う。
- ③ボランティア仲間と今後の活動方針を話し合う。
- ④住民同志の一声運動を展開する。
- ⑤カーテンを少し開いて部屋の中を確認出来るようにする。
- ⑥住民集会をして顔馴染になる（出れない人を確認する）。
- ⑦ボランティアを募集して人数を増やし、新鮮な気持ちで活動する。
- ⑧活動をふりかえり、フィードバックする。

『一言コメント』 ①～⑧については、自治会とボランティアで相互に分担する。以後は自治会の結束が図れ新たなコミュニティが誕生する。

- ・ 11/16 T地区—一人暮らしの中年男性が、『隣の子供（5人）が喧しく我慢できない、ゆっくり寝れず頭に来ている、天涯孤独で何をやっても誰にも迷惑掛けない、殺してやる』と血相を変えて飛んでくる。隣は7人家族で10歳を頭に5人の子供がいる。早急に関係機関に連絡し何とかするから今日のところは辛抱してと宥める。大事件になる所で危機一髪で阻止できる。

あうたびに早く神戸に帰りたい、帰りたいと口癖と言われる。環境に馴染めないようだ。

『一言コメント』 5人家族以上は、二部屋もらえることになり先ずは一安心。ベニヤ板壁では視線が遮られるだけで、隣の寝言が聞こえ、プライバシーなどないのが現実である。

- ・ 11/19 S地区—行政不満を機関銃の如く打ち込まれ蜂の巣になる。日常生活に順応出来ずイライラの捌け口を行政に向ける。

市内4ヶ所の仮設住宅をネットワークするため大規模住宅役員と小規模住宅へ行き『一人ひとりの声は小さいが、大きな声に集約し神戸に届けたい』と連携の必要性を伝えるが理解が得られず、大規模団地（2ヶ所）の連携を図る。

T地区でクリスマス会の打ち合わせをする。

- ・ 11/20 バザー T地区—一人暮らし老人を対象に実施する。通常のバザーには参加しにくい人達だ。ゆっくり品定めして、袋一杯に詰め込みニコニコ顔。

リトミック体操を子どもとお年寄りを対象にして童話と音感を利用して実施する。ふれあいセンターの床が抜けるほど走り回る。日常生活で束縛されているので一気に吐き出す。エネルギーの発散場所を提供でき良かった。

S地区でいじめにあっていて老人から留守番電話を通して訴えがある。後日訪問したい。

『一言コメント』 「留守番電話でもいいから自分の事を思ってくれる人なので安心して電話する」と後日老人から聴く。

- ・11/22 ボランティア全体会 活動報告と今後の活動及び自立支援について話し合う。ボランティア自身が自立しているかの問い掛けに始終し困惑する。ボランティアが自立していかなければ、住民にに対して自立、自立とは恥ずかしくて話すことは出来ない。

- ・11/23 住民意向調査 神戸市役所と市民交流会を開くため、全戸対象に実施する。住民の反応が心配。行政補完でなく、生の声をペーパーを通して吸い上げたい。

テレビ局に追いかけれ活動に支障が起き閉口する。睡眠薬を飲み過ぎもうろうとされている女性を発見し、救急車を呼び病院へ運ぶ。点滴を受け元気を取り戻される（常習者）。

T地区の住民から呼び出しがあり訪問する。訪問する度にビールが出てくる。今日もお世話になっていると神戸のお土産をもらう。遠慮するが直ぐ栓を抜かれる。『地震さえなければ貴方に、今以上のもてなしは出来るよ』の気持ちを汲んで食べることにしているがこれも支援につながる？。

- ・11/24 ボランティア講座 YWCA主催仮設住宅の現状と活動上の心構えについて話す。回数を重ねるごとに自分の気持ちは昔える。今回は特に被災状況から活動状況の流れに添ってスライドを利用する。今後も地域ボランティアの掘り起こしをしたい。そうすることが、震災ボランティアから福祉ボランティアへつないでいける。

仮設住宅連絡会に参加する度に、ボランティアホリックに陥っている人の言動・行動を目の当たりにして遠来のボランティアが気になる。バアーンアウトしないで、余力を残し神戸から引き上げてほしい。ボロボロになっては次につながらない。引き上げ後地域ボランティアとして今後も活躍出来る優秀な人材をつぶす事は出来ない。後は地元ボランティアが引き受けるべきで何時までも頼れない。

「燃え尽きないための8箇条」(資料参照 135P)

『一言コメント』ボランティア団体に望むことは、ボランティアの養成・育成と、資向上に努めボランティアの使い捨てはしない。それには直接活動も大切だが、事前学習、活動後のふりかえりも必要であることも知ってほしい。ボランティアの引き際の難しさを知らされる。

- ・11/25 『冬を元気に乗り切るため(学習会)』 S地区-二度と孤独死を出さないために実施する。ほとんどの住民が参加され関心の高さに今更ながら驚く。

孤独死は病気だから危険だと言うのではなく、病院へ行ったことがない方が1/3以上あることを強調する。日頃の住民同志のコミュニケーションが必要であることを伝える。

意向調査アンケートの回収をするが、S地区は協力的だがT地区では、「同じようなことを何回もして」といやみを言われる。

大学院生の継続調査を今後どの様な関わりで進めていくかを考える。

学生初めての活動で、S地区・T地区の余りの違いに驚きを表される。

ふれあいセンターの雰囲気も生活の匂いがする暖かさと殺伐とした冷たさと言われる。

『一言コメント』●池田さんの感想を入れる。

- ・11/26 大阪十八条仮設住宅イベントに参加 先日のお返しと遠隔地仮設の実態調査もある。焼きそばを最後まで手伝うことができた。責任ある立場であれば気疲れするが……今日は楽しみながら活動出来た。新しい人との出会いもあり、ネットワークの素晴らしさを体験する。

『一言コメント』 E地区-リュウマチを患っている女性、開口一番『早く神戸に帰りたい。不安一杯で毎日が恐怖である』強烈なパンチ。リュウマチの辛さ、怖さを初めて知る。

- ・11/28 全国社会福祉協議会の助成金が入り一安心。持ち出しばかりで心配していたが一息入る。

S地区-排水管が詰まり修理する。よろず屋だ。

- ・11/29 ボランティア募集記事 活動に参加したいと数名連絡がある。当初無理して仲間を募ったので弊害が出てきた矢先だけに嬉しい。自分の意思で動ける人が継続できる人と思う。連絡する人の中にはその時の気持ちで連絡され、活動に参加出来ない人もいる。参加促進のコーディネーターの難しさを知る。

防災フォーラムの参加者募集をする。申し込み用紙に書けない人がいる。書くことが大変らしく今後は一人ひとり訪問しながら応募者を募ることにする。

冬布団の無い人がいて差し入れる。

- ・11/30 T地区-自治会長から電話があり、用事があってもなかっても必ず寄ってくれと言われる？。自治会運営に苦慮されている。この時期にも入居者があり、入居実態もつかめず、毎日のように苦情、相談、問い合わせ等々がありパニック。

『一言コメント』 関わりすぎると依存が始まる。当てにされると居心地がいいが、手放すと沈没する。距離感をもちながらつかず離れずでいきたい。自治会支援は難しい。ふれあいセンターの運営費があるだけに難儀である。

- ・12/1 市民ボランティア講座生実践学習 神戸地域型仮設住宅。改めて障害者とお年寄りの多さに驚く。イベントに誘うために一軒一軒呼び込みをする。講座生の手前オロオロした所を見せるわけにいかず緊張した訪問活動だった。訪問中いじめで玄関戸に食用油をかけられていた所があった。真相（深層部分）を理解しないで、事を大きくすることは出来ないのので福祉相談員に連絡する。スイートポテトとぜんざいでもてなす。震災後初めて口にするとたいそう喜んでくれた人もいた。今日参加したボランティアが今後継続的に活動してくれることを願う。

『一言コメント』 日常生活に戻っていないのかまだまだ市民ボランティアは定着しない。被災地内でも温度差が生じている。地域ボランティアの芽生えが見えない。

- ・12/2 市民交流会開催 被災地外仮設住宅住民と神戸市。訴えていた事がやっと実現する。テレビ局や新聞記者が取材に入り、ピーンと張り詰めた空気が漂う。ボランティアとして

コーディネイトする。緊張の連続で、住民の声を十分聞き取りたいが、糾弾会になってはいけ
ないし、神戸市職員も被災者であることを全面に出しながら会を進める。住民の声は、希
望してここに来たのではない。仕方なく来た。おぼ捨て山だ。行政に協力して来てやった。
一度でも訪れたか。見放されている。情報が届かない。義援金が少ない等々の発言がある。
神戸市民でありながら職員の顔が見えない苛立ちを激しく詰め寄る場面もあった。

S地区一高齢者と部屋の中で年金相談を受け出た途端に、隣人が出てきて話の内容に入られ
る。壁越しに会話が筒抜け。両者でトラブり困り果てる。壁一枚ではプライバシーはないに
等しい。

『一言コメント』 交流会を契機に団地毎に担当職員が決まり以後頻繁に訪問活動される。私達ボ
ランティアもこれが縁で顔の見える関係になり色々和相談したり、情報提供を受け内容のある活
動ができる。

- ・12/3 ボランティア募集記事 姫路に仮設住宅があることを知り、活動したいと参加される。
孤独死が近くであったことを知りショックを受け参加される。夫婦で参加できるなんてうら
やましい。無理しないで継続的な活動をお願いします。

いじめにあっている人が、役員が役得で救済物資を事前にあさっている。ボランティア主
催の食事会に行きたいが雰囲気が悪いので参加出来ないと話される。どの様に対応してよい
か迷ってしまう。話を進めていくなかで自分の気持ち、思いで行動すると話される。今後と
も少数意見にも耳を傾けていかなければなるまい。

子どものケアに入る。今回で3回目です。深まりも増してくる。退行現象が出てきたが、ゆっく
りと揺さぶって継続的に関わっていききたい（専門家のアドバイスを受けながら）。

独居老人に友愛訪問をすると、今日はボランティアが3回も訪問してゆっくり寝ることが出
来ないと苦情を言われる。ボランティア間の調整が必要。

『一言コメント』 ふれあいセンターを通さず、人の弱みに付け込む布教活動が目につく。目に余
る布教活動もあり成り行きを見守りたい。

- ・12/4 生活保護相談 借金の取り立てが来て家に上がり込み2～3日帰ってくれないからお金
を貸してといわれる。ボランティアとして貸すことは出来ないし、持ち歩いていないとハッ
キリ伝える。ケースワーカーにつなぐことにする。生活指導までは出来ない。神戸市から週
末に調査と対話に行くと連絡が入る。先日の交流会の成果だ。いのちの電話相談のフリーダ
イヤルが11月末に切れたが、自殺防止センター（大阪）は継続すると連絡がありチラシ配付
を依頼され配付する。

『一言コメント』 フリーダイヤルを知らない人がいる。「電話代は無料です」と一寸した気遣いも
必要。もしもの時にとチラシを大切にタンスの中に保管していると聴かされ感動する。電話一本
で心の支えになる。

- ・12/5 T地区ー自治会運営に不満を抱き役員を罷免したいがどうしたらよいかと相談される。住民本位のコミュニティに第三者が関わるものでないとハッキリ関わりを断る。役員も住民ボランティア。ボランティアがコミュニティに関われる限界は、分かっているけど日増しに深みにはまる傾向。今後の活動に支障がなければと心配する。活動のウエイトが自治会支援に傾いている。毎日追いかけられると精神的に追い込まれる。会長は神経がビリビリしている。傾聴するだけだが会長のことを分かってくれるボランティアがいると思ってもらえばよい。仏教関係の僧侶（20数名）が一周忌追悼をふれあいセンターでしたいと申し入れがあり役員に連絡を取るが、センターをそのような形で貸すことは出来ないといわれ計画は流れる。

『一言コメント』ふれあいセンターでは、宗教活動・政治活動・営利を目的とした活動を禁止している。ケースバイケースと思うが、問題を持ち込まないことも大切。

- ・12/6 神戸の仮設住宅連絡会に出席する。T地区の役員からいくら遅くなっても必ず寄ってくれと連絡が入る。住宅内の出来事を一つ一つ話されながらストレス解消と気持ちの整理をされている。聞き役のボランティアはストレスが溜まるばかり……誰か私のケアをしてと叫びたい日々が続く。燃え尽きそうだSOS、SOS。
- ・12/7 社協ボランティア会議 ボランティアが自治会に何をさせてもらったら良いとか、救援物資を配ってくれと言っているが、ボランティアの責任で配付すべきだ。住民の自立を求める前にボランティアの自立が必要。役員がパニック状態だと伝える。ある政党の医師団が入り健康診断をするから立ち会ってくれと自治会からいわれるが、政治色・宗教色のない草の根ボランティアと言って断る。巻き込まれることが一番怖い。こころの支援は社会運動に馴染まないし、そんな気持ちで活動していない。
- ・12/9 防災フォーラム ポートアイランドで開催され住民と共に出席（38名）。姫路に引っ越し後初めて神戸に行く人が多数いてびっくりする。機会がないのと交通費がいるから行けないと言われる。車中は子どもが遠足に行っている雰囲気。到着後、各区分に復興街巡りバスが出るが、殆ど参加しない。原因は見るに忍びない、あの時を思い出したくない、街並みを見るのは辛い、思いは様々である。まだまだこころの整理は出来ていない。参加することでフラッシュバックが起こる可能性もある。会場内で時間を使ってもらおう。初めての試みで時間通りスムーズに行くか心配したが、事故もなく家路に着く。企画時は楽しいが、当日は神経を使いヘトヘトになる。参加者の一言と笑顔が次に繋がる。フォーラムでは遠隔地仮設の現状を報告する。機会を見つけ発信する。
- ・12/10 戸別訪問 T地区ー初参加のボランティアが多数いたので経験者と二人一組で丁寧に廻る。活動後のふりかえりでは、『人間関係の難しさ、近所付き合いの難しさ・自治会役員と住民のズレの大きさに驚く』と感想が出る。改めて急ごしらえのコミュニティの難しさを知る。バザーをする、来る人は同じ顔ぶれである。エネルギーのある人があさっている姿を見て、見たくない醜態を見る。ぼつぼつ衣料品類は行き渡ったようだ。
子どものケアを実施する、私達が入るのを楽しみにしているので約束は破れない。約束よ

り1時間も前にセンターに来て今か今かと待っている。子どもに関わるボランティアが少なく何時まで続くか……。狭い部屋で萎縮してストレスが溜まっている。何をするにもダメ尽くして子どもらしさが見えない。この時ばかりは思い切り遊べる雰囲気作りをする。

『一言コメント』 大人の支援ばかりで、子どもへの関わりが忘れられている。言語化できない子どもたちに関心を持ってゆかなければならない。3歳の子どもが神戸に行って建設機械の音を聴くだけで身体が硬直するとか、部屋に入る時は部屋中電気をつけないと入れない子どもがいる。

- ・12/13 T地区－担当民生委員から連絡が入り、アルコール依存症の対応について相談を受ける。社会資源との連携を密にすることが一番と伝える。それぞれの立場で活動する事が大切で、取り込まないことである。
- ・12/16 S地区－大河内町ボランティアグループと共同で一俵の餅つきをする。三田つくが初めての試みで何時間掛かるか予定もたてなかったが、一人ひとりの力は小さいが、総勢31人のボランティアが力を合わせることで大きな力になりあっという間につきあげることが出来た。住民はベッタンベッタンの威勢に誘われて、つきてと揉み手に参加し、共に一つのことをやり遂げる楽しさを味わう。

神戸で『冬の健康対策』フォーラムに参加する。学者は理論的な事を話されるが、日々現場を見ているボランティアにはものたらぬ。今は、理論よりも実践だ。

- ・ボランティアと行政の連携について。
- ・アルコール依存症の関わり方について。
- ・社会的弱者とボランティアの関わり方について。

活動上の悩みを訴えるが、的確な答えは返ってこない。ボランティアのあるべき姿が見えず、活動も手さぐり状態だ。発信することで、何かが起きる？

『一言コメント』 毎日現実に取り組んでいる者としては、学問は役に立たないのが実感。傷を受けた人は敏感である。愛されたら、それだけ愛せるようになる。ブランド品で身を固めるよりも、こころのブランドを……。

- ・12/17 野菜バザー 50円均一 T地区－住民もお金を取ってくれるほうが気兼ねなしに買うことができると好評である。活動資金の充足にもなる。

ふれあいセンターでクリスマス会の飾りつけをする。住民が積極的に関わり殺風景なセンターも和やかになり温かい雰囲気になる。

新品の電気敷布と電気ストーブが大量に入り、生活困窮者を対象に配付する。地道な活動が評価され、住宅内の生活実情を一番知っているボランティアにと依頼される。積み重ねた活動から生活保護支給者に手渡す。電気敷布は大変な喜びでこれで寒い冬を過ごすことができると手を握り、感謝を身体一杯で伝える人もいた。神戸に比べ住宅が連帯していないので寒さが身にしみ心まで凍ってしまうと話される。姫路は寒い寒いと言わう。仮設住宅基礎が強固でなく不等沈下が起こり壁面及び天井の隙間が空き、戸締りがしにくい所が出てい

る。急場凌ぎで、ガムテープを配付したり、作業の出来ない人には隙間にテープを貼る。単発ボランティアが床対策でシート張りをする。

朝9時に出て帰宅したのは夕方9時である。今日も忙しい一日でした。ご苦労さんでした。

- ・12/18 震災記録収録 ボランティアから、活動内容をインタビューし神戸大学震災文庫に保存すると協力依頼があり、震災翌日からの思い、悩み、今後の展望等々について話す。被災者復興支援会議が各仮設住宅へ餅券を配付するので市内4ヵ所の配付ボランティアに参加する。

他グループボランティアから戸別訪問活動で行き詰まったと電話が入る。被災者の一人が『夜になると寂しくなり、死ぬことばかり考えている。死んだ後は身寄りがないので瀬戸内海に遺骨を流して欲しい』と言われ、どの様に対応してよいかわからない。慌てて死んだらいけないと言うのでなく、死ななければならない寂しさに添って話を聴き、次回の約束をして繋いでいくようにアドバイスする。要援護者は、それ以後も浮き沈みがあったが、早い機会に退去され仮設から自立された？

『一言コメント』 他グループ訪問ボランティアから色々な電話が入る。支援方法、情報交換、社会資源への繋ぎ方等々について相談を受けたり、相談したりで一人で取り込まず重い荷物を共有できつぶれずに活動できる。積極的な傾聴と時にはクライアントになり話せる仲間がいるから継続が出来る。

- ・12/19 クリスマス会打ち合わせ 若い仲間が積極的に進めて助かる。仲間が育っていくのが楽しくもあり頼もしくもある。

T地区-役員から電話があり、昨日連絡なかったが今日は是非来てくれと強く言われ訪問する。自分の思いで動けず依存されると辛い。依存現象から断ち切るにはどうすればよいか日々悩む。

T地区-夫婦喧嘩の挙げ句主人が鍋を隣の玄関ドアに投げつけガラスを壊した。原因者負担であるが、ない袖は触れないし困っていると相談を受ける。住宅管理まで相談されると頭がパニック。

健康相談チラシを掲示板に掲示してくれとメモを置いて保健所が帰ったと怒りを向けられる。既存自治会組織ではなく被災ボランティアであることを理解してほしい。行政窓口のために組織を構築したのではない。今時点では、互いに心の傷みを分かち合い寄り添うように生きていかれる中で余り負担をかけないことが自治会存続につながる。防火チラシも配付してと持ち込まれたが、これも断り各戸配付をお願いしたと話され、言っていることが、間違っているかと問い掛けられる。私も同意見である。各戸に配付する事でふれあいが生まれ、生活実態が理解できる。

老人性の被害妄想が出て、隣人のポストに手を入れたり、黙って人の家に上がったたり、爆弾が仕掛けられているとか独り言を言って薄気味悪いといわれる。……徘徊もある。ばけているようでもあるが、言っていることはまともである。何とかしてと言われ、社会資源につなぐことにする。

- ・12/20 クリスマス会プレゼント 県立子どもの館へもらいに行く。全国から寄せられた絵

本、文房具、衣料品等々である。沢山もらい、一団体でははききれないので神戸のボランティアへ送りたい。年齢に合ったプレゼントも購入する。

仮設内で駐車中（深夜）傷つけられたと苦情を聞き、被害届けを警察に出すように助言する。

S地区－住民がお酒を飲み泥酔状態で電話をしてくる。救援物資でUSAのジャンパーが欲しかったのにもらえなかった。着ている、何故もらえないのか……お金は持っている……欲しい、欲しいと壊れた蓄音機のように話してくる。深夜でもあり聞くだけでヘトヘトになる。アルコール依存症の対応に苦慮する。訪問すると部屋に上がるように誘われるが、犬を飼って部屋中おしっこして異様な匂いで入ることが出来ない。部屋の中では肌着を着けず、訪問者にそのまま出ていくこともあり、ひんしゅくをかっている。勿論住民からも阻害され独りぼっちで、その辛さ、寂しさ、苦しさを話されるが、関わり方が分からずお手上げ状態である。

交流会（研修会） T地区－地元自治会と仮設住宅役員を実施する。コーディネーターとして司会と実情説明をする。互いに和やかな雰囲気始まり、勉強会も冬対策と自立支援について事例を交えながら説明する。冬対策は、孤独死防止の住民役割と今後の取り組みを提起する。当地区では入居実態が把握できず何時孤独死が起きても不思議でない。倉庫がわりにしている人、月に1～2回しか帰ってこない人等々様々である。

自立支援は言葉では簡単であるが、中身は深く人間とはの問い掛けになる。ボランティア自身が自立できているのか振り返って見なければならない。『何をさせてもらいましょうか』と自治会に尋ねるようでは負担を掛けるだけである。救援物資配付にしても大量に持って入り一括でお願いしますでは、真のふれあいでない。住民間のトラブル原因を作っている。物資を持ち込む人、それを一軒一軒配付するボランティアとそれぞれの持ち場で活動出来たら素晴らしい。しかし現実には厳しくやりっ放しになっている。物さえ持ち込めば喜ぶという気持ちは、被災者を見下げた傲慢で自己満足以外の何ものでもない。交流会に入り、これまでの検証と今後の活動について話し合う。無責任に自治会へ依頼していたことがよくわかった。今後はきめ細かいふれあいと、距離感を持ちながら活動することになる。

『一言コメント』 誰も経験したことのない未知のボランティア活動で、まさに試行錯誤である。結果は歴史が証明してくれる。よかれと思ったことが、結果として裏目に出た場合は、反省材料にして次の展開を考えればよい。

- ・12/21 暖房器具 S地区－必要な方に配付する。ふれあいセンターに立ち寄ると夜回りすると住民が三々五々寄ってくる。他の仮設住宅で火災があり、ダブル被災にあいたくないと行動を起こされる。自治会役員の発案で交代制で大晦日まで計画されている。
- ・12/22 学生が調査のため入ってくる。調査が能率よく効果的にいくようにふれあいセンターを利用して聞き取りする。これから調査の度に心配り、心配りしていかないと住民が受け入れてくれない。平素のつきあいが大切である。今後ともトラブルが生じないように心掛けたい。

保健婦健康相談日 T地区ふれあいセンターで相談者が来るのを待っているが、誰一人と訪問者がいない。センターに来れる人は元気な人で本当に相談の必要な人は出てこれない。来れない・出れない・来たくない人を対象に相談業務を充実して、職務の枠組みから半歩踏み出す気持ちで関わって欲しい。

クリスマス用のプレゼントを準備する。一人ひとりにメッセージを添え、年齢にあった絵本を心を込めて包装する。高校生はセンター内の壁面一杯に模造紙を張り付けおとぎの国だ。クリスマスの雰囲気が高まる。準備が一段落着いた時点でボランティアのミーティングをする。思っていたより集まりがよく27名。最初は、県立子どもの館ボランティアによる人形劇です。指人形に食い入るように見とれながらも、周囲を気にしながら人形に相手にならない子どもがいじらしい。子どもたちの仲間意識がないので周囲が気になる。次は学生によるジャンケンゲーム、スッカリ溶け込んで盛り上がってくる。お兄ちゃんお姉ちゃんにエネルギーを身体一杯に表し投げかけている。住宅内では隣に遠慮して『静かに静かに』の連続で束縛されている。今日ばかりは子どもが主役。クリスマスが国民的な行事になっているが、宗教色を出さないように気をつけながら、私服の神父さんによる『馬小屋』を利用したキリスト誕生の話をする。クレームがつかないかと心配したが取り越し苦労だった。いよいよクライマックスで、照明を落とし、ジャングルベルに乗ってサンタクロースが袋一杯のプレゼントを一人ひとりに手渡ししていく。大事そうに抱え込む子ども、待ちきれずに開けてしまう子ども様々である。最後は、手作りのケーキを参加者全員で食べる。ふれあいセンター開所以来の賑わいで苦労もあったが、楽しい一日だった。皆さんご苦労さんでした。

『一言コメント』 子ども主役のイベントは初めての試みで、子どもらしく伸び伸びとはしゃいでくれた。子ども以上にサンタクロース・天使・ピエロに扮したボランティアが一番楽しかったかもしれない。仲間とのネットワークも出来上がる。

- ・12/23 暖房器具配布 必要な方に必要な物を手渡ししていく活動は手間がかかる。自宅を再建しているのでは是非私も欲しいと追い駆けられる。断ることが出来ず配付するが割り切れない。無難にものごとを進めていく上で仕方がないことか。

聞き取り調査を朝早くから夜遅くまで、一軒一軒訪問しながらする。時間と神経を使いヘトヘトになる。一言一言、言葉を選び、顔色を見ながらしていると神経がすり減ってしまう。継続調査になるので余計に気を使う。深夜寒さで手がしびれてしまい、『何でこんな思いまでして』と思う気持ちと学生に協力してあげなければと思う気持ちが交差する。そんな時S地区の自治会から一年間ご苦労さんでしたとマフラーを頂き、これからはよろしくと丁寧な言葉と心遣いに感謝感激です。日常では味わえない楽しさを味わうことができた。

仲間の中で、以前からグループワークの出来ない人がいて動向が気になっていた。今日も何の連絡もなく活動以外の活動をする。グループとしての活動方針もあり、それを逸脱する人には辞めてもらいたいが、ハッキリ言えない辛さがある。グループとしてハッキリしなければならぬ。自分一人で活動できるからとヤンワリ言えればよいが、今は言えない。足元をしっかりと見つめないとグラツキが生じる。

- ・12/25 バザー用品提供 浜松SVAボランティアから、4トントラック一杯分のの申し入れがあり、午後からバザーをする。日用雑貨が飛ぶように売れ、あっという間になくなってしまふ。手に持てないほど買い込む人、品定めしている間になくなりガッカリする人、これで正月の準備が出来たと喜ぶ人、ガラス製品がなかったが揃えられたと手放しに喜ばれる夫婦等々様々である。これほど大量のバザー品を一品の残もなくさばけるなんて嬉しさというより驚きである。急な申し入れも快く引き受け住民の皆さんの満足そうな笑顔を見て疲れが吹っ飛ぶ。

新聞記者が明るい話題を震災2年目企画としてするので協力してほしいと依頼があり、前向きに生きておられる人が対象であれば協力することにする。活動で知ったことを、発信するにはマスコミ利用が一番である。以前はイベント報道が主だったが、今回は自立が全面に出てくる。記者は深い感性を持つ方で、当日は被災地におられた。同行する中で鋭い聞き取りも必要になり、相手を傷つけないかとハラハラすることもある。活動はひたすら積極的な傾聴で相手が話さないかぎり聞き取りはしない。しかし、問いかけには魂を揺さぶることがあったり、過去の辛い出来事を思い出させることもある。これまで数カ月かかって知ったことを、一瞬の間に聞き取り次につなぐ、余りの鋭さにあっ気にとられる。そこは持ち前の感性と暖かきで相手を傷つけることなく取材される。いい体験をさせていただいている。マスコミによって支えられ、育てられる部分もあることに気づく（納得行くまで取材される）。

- ・12/26 雪 12月には珍しい。仮設の皆さんはどんな思いで白銀の世界を見ておられたか。心が凍りつくような寒さだ。仮設住宅役員と県民局長の対談日。住民代表が日頃の感謝の気持ちを伝えたいと今日の日になる。年末の忙しい中で会っていただき住民も満足される。感謝の気持ちを率直に伝えられた。後に県民局長は、防災監に栄転され震災復興と防災に関わっておられる。

医師会病院でボランティア参加の看護婦に仮設住宅の現状を説明する。何人かが活動に参加してくれる。力強い仲間に今後の活動を期待したい。

- ・12/27 最後の有給休暇 暖房器具（アンカ50個）を各戸配付。

自治会主催の忘年会に出席させていただく。ふれあいセンターで住民と酒を飲み交わすだけで、グット近づく……アルコール問題が社会問題になっているが、やはり宴会にはアルコールが必要である。適度の量で和やかな盛り上がりである。どこに行ってもマイクを持てば離したくない人がいる。新白浜一座の素晴らしい演劇を見せていただき楽しい忘年会になる。

ふれあいセンターに大量のカレンダーと手帳を持ち込む。

T地区-仕事を持っている人が、ふれあいセンターに来て『何か救援物資は残っていないか』と尋ね、『何も残っていない』と役員が答えると、『仕事に行っていたら何も当たらないのか』と管われ立ち去る。役員の人数も少なく公平に配付されているが入居実態がつかめないなかでの自治会活動には限界がある。ボランティアの立場からみても役員が気の毒である。

来年度の役員改選が心配だ。

【一言コメント】 今年の有給休暇は、ボランティア活動に使い切る。

- ・12/28 T地区－役員が年末の挨拶にまわられる。

神戸で活動した仲間が、海外協力隊に参加するのでお別れ会をする。素晴らしい仲間が世界に飛び立っていく、私も海外ボランティアを一度は経験してみたい。2年間の海外勤務が有意義なものであることを願ってやまない。

- ・12/29 戸別訪問 T地区－入居か未入居か確認出来ない所はガスメーターで確認する。お正月を仮設で過ごすかどうか確認しながら安否確認する。90%以上の方が帰る所はない、子どもの所へ行っても気兼ねする。ここが私の居場所と言われる。核家族化の一端をかいま見る。気儘に余生を過ごしたいと言われることも理解出来る。これまで気儘に生活し、食生活も生活スタイルにも違いが有りすぎる。避難所及び仮設住宅で『避難中子どもの所へ行ったが、2日とおれなかった』と話された方がいた。

大阪自殺防止センターのフリーダイヤル相談チラシを配付する。姫路からもフリーダイヤルが効くので利用すればよい。各所に電話相談機関があるが、24時間相談業務をしているのはここだけである。寒さで手が縮かみ何でこんな事をしているのかと自分で葛藤している。丁寧に訪問する中から信頼関係が生まれると分かっているが寒さで心が凍ってしまう。

若いお母さんが、子どもの不登校について相談される。児童相談所に行って相談していたが、勤めに出るようになって時間的な余裕がなく困っている……。集団登校に抵抗があるようだ。時間をかけて関わりを持つことにする。

老人性痴呆者の様子が奇怪しいと連絡が入り聞き取りに行く。新聞紙の燃えかすをポストに投げ込んだとか、朝早くから大声で独り言をいっているのが気味悪いといわれ、保健所の担当者に連絡し対応をお願いする。寒くなってくるので、火事が一番怖い。二次被害はもう御免。

『一言コメント』『フリーダイヤルってなに』と尋ねられる。無料で電話が出来る事と話す。誰にも理解出来る言葉でなければならない。後日何人かが大切にチラシを整理ダンスにしまったと言われる。思い悩んだときにチラシを思い出し相談してくれたらと思う。

- ・12/30 S地区－役員から早朝に電話が入り、隣同志で喧嘩している至急来てほしい。両者から話を聴くと隣同志で喧しいと壁を叩き合ったとか……。警察官まで来て取り調べである。機を静かに閉めても、特に深夜は隣近所に音が響き渡る。男性は深夜に帰宅する。隣の女性は瓦斯を切って隣近所のつき合いはない。以前話した時は、避難所で盗難にあい人間不信になっていると話したことを思い出す。閉じこもり気味で訪問しても対応がなく安否確認も出来ない状態だ。事故が起きても不思議でない。ボランティアの限られた活動では限界である。しかし事故は出たくない。

『一言コメント』仮設住宅担当者をお願いして男性が仮設内移動する。一件落着だが、問題が解決したわけではなく、先送りしただけだ。

- ・12/31 年越しそば T地区－200食分を準備。神戸のボランティアを入れると総勢15名であ

る。住民ボランティアも何人か手伝ってくれる。あっという間に完売である。何時ものことで、大きな鍋を持ってきて持ち帰ろうとする人がいる。出来るだけふれあいを大切にしていってセンター内に案内するがなかなか入ってくれない。イベントに参加出来ない人には出前する。出たくても来れない人も多数いる。激動の一年をそれぞれの思いで送り、来年は少しでも明かりが見えて来るよう互いに手を取り合い頑張っていきたい。遠来の若いボランティアがふれあいセンターで住民と話してくれる。東は埼玉県西は福岡県と正月休みを利用してのボランティアである。遠隔地仮設へ遠来のボランティアに感謝、感謝の一言だ。単発でもいい、若いエネルギーをふりまくことでどれほど元気づけられるか。それと遠くから来てくれたことが、今も忘れずに思っていてくれると言うことの意義もある。

アルコール依存の人が、イベント終了後は是非寄ってくれと言われたので訪問する。正装で出迎え、神戸のカラオケハウスにうっふん暗らしに行っていたと楽しそうに話をする。先日の取材について色々と思いを話される。

- ①ふれあいが大切である。ふれあいは働くことによって求められる。
- ②人間はこころと気持ちが伝わればいい人生が送られる。
- ③記者に本心が言えなかった。何時もメモを取っているから。
- ④本心話をすると新聞に載せられたら困ることがある。不満がある。全て言えない。
- ⑤隠す部分があったのは不満があったからである。言える気持ちになれなかった。
- ⑥本当のことを言えなかった。今度あったら言えるかもしれない。
- ⑦悪いことを書かれるかもしれないから言えなかった。
- ⑧男は働かなければならない。女の人も朝早く起きて仕事に行っている。
- ⑨人と話しながら飲む酒は美味しい。
- ⑩飲めと言われても朝と昼は飲めない。飲まない。

話に辻褄があわない。わかっている出来ない自分に言い聞かせているようだ。何度か帰ろうとしたが、その度に引き止められる。引き止める度に寂しそうな顔をされる。一人暮らしの寂しさと別れた家族への思いが交差している。逢うことの出来ない子どもにお年玉を用意している。下手な慰めは出来ない。ただ話を聞くだけである。

『一言コメント』 震災で始まり、震災ボランティアで終わった一年である。あまりの激動で自分を見つめ直すことすらできなかった。まだまだ非日常生活が続く。『いまこの時が大事』の気持ちで、今後も活動が続けて行きたい。カレンダーが新しくなるだけで、気持ちの切り替えは出来ない。

年越しそばが終わったあと家族と初詣に行く。願い事は、被災者に一日も早い再建を。

平成8年

- 1/3 お正月 三が日は家に居るようにと家族に言われるが、自然に足が仮設に向く。長期入院されている人と出会う。顔色はまだ悪いが、来週から神戸に仕事に行くとの事。働くことの楽しさを語られる。家族がいると言われるが分からない。話さないかぎり、プライバシーに関わることはこちらから一切聴かない。退院したばかりであまり無理しないでと伝える。今年から医療費免除が切れる。免除中にあれこれ直しておきたいと医療機関に頻繁に通う人もいた。中年で仕事の無い人は実費を払わなければならない。通院の必要な人が病院へ行けない状況に追い込まれる。平均年齢が60歳を切る中で他の免除も受けられない人が多い。医療費がないといって生き延びた命を絶つようなことだけはしないで欲しい。ボランティアに医療費のことを相談されてもどうすることも出来ない。長期の仮設生活で栄養のバランスを崩している人がいる。『身体だけは自分持ちですよ。十分に気をつけて』と呼びかけるだけである。非力なボランティアで申し訳ないが、出来ることと出来ないことはハッキリしている。

『一言コメント』『私たちの出来ることは、私たちの出来ることだけ。』

- 1/4 お正月休みでお酒を飲む機会が多くなり飲んだ勢いでふれあいセンターで女性に嘔みついた人がいたと報告を受ける。酒の上の出来事と寛容に受け入れようとする雰囲気があり先行きが心配。仮設内でアルコールが問題になっている。コミュニティが発達し親密度を増すと酒害が出てくる。一人で飲むより多数で飲む酒は美味しくなり量が増える。何でもかんでも物を貰って抵抗が無くなっているのが原因のようだ。一人暮らしなのに鼠が物を引くように幾らでも取り入れる。恥ずかしくないのかと怒鳴ったらしい。言っていることは当然であるが、酒を飲んで言っても誰も取り合ってくれない。活動の中でしばしば遭遇する場面である。

S地区-救援物資を各戸に配付した後、不在者宅の物資を持ちかえる不屈き者がいると話題になる。ボランティアの立場で諭してほしいと頼まれ、話をするが分かってくれない。この人もアルコール依存症である。自治会にも入会せず孤立、孤独な生活を送っている。寂しさをアルコールで紛らわそうとしている。私たちがイベントをすれば参加する。ここを開示して話されるが、要領が得ないことが多々ある。どの様に関わってよいものか何時も悩んでしまう。

今年は心の余裕も出てきたので、生活再建について真剣に考えていきたいと前向きな言葉が帰ってくる人もいる。新しい年を迎え前向きに考えておられる。

『ボランティアさんも新年会に参加して』と誘われ会費を収める。センターで催し物が有るたびに思うことは、何時も同じ顔ぶれである。独占している気配もあると戸別訪問で苦情を言う人もいる。全員参加することは難儀なことだが、出来るだけ参加を促したい。人の輪に入れない人が私たちの訪問を心待ちしている人達。イベント毎に見極めするのも大切なワーク。

社会資源に年末年始の出来事を情報提供する。ボランティアは提供しても相手は守秘義務がありもらえない。分かっているがらつついっただけ聞いてしまうが答えてくれない。ボランティ

アと社会資源の緊密な連携と行政は言っている。連携とは情報提供の依頼と仲良くしましょうと言うことか？。

『一言コメント』 行政とボランティアの連携とよく言われるが、連携の範囲。情報交換について何処までが許されるのか、ボランティアは守秘義務が守れるかの心配もあり、活動で出来上がった信頼関係を同じ仲間であっても共有出来ない人もある。活動後のふりかえりで仲間と共有し、後日他の人が訪問しその事を話して関係が切れてしまった苦い経験もある。信頼関係はその人との関係で、団体との関係ではない。

1/6 入居実態調査戸別訪問 ガス・水道・電気の全てを切っている住民がいる。入居していないと思ったが、週末神戸から帰って生活している。この寒さをどの様に凌いでいるのかと尋ねると『毛布3枚もあれば寒くない』と強がりを行っている50代の女性が気になる。保証人になり地震で債務責任がある。逃げるように姫路に来たが見つかってしまった。少ないパート代から返済しているがなにも残らないと一気に話される。逞しい生活力と根気で頑張れる所まで頑張ると話される。それにしてもローソク一本で明かりを取り寒さを凌いでおられる。並大抵の精神力ではない。ボランティアの力で何も出来ない。ただ温かい声援を送るだけである。

障害者手帳を預かり市営バス無料の手続きをする。住民票を移している人、移していない人との差が出てきている。知るかぎりの情報を提供していく、しかし行政間調整が未だにつかない問題もあり宙ぶらりんになっている。早く窓口を決めないと行政サービスのバランスが崩れる。被害者は社会的弱者である事を知ってほしい。

S地区の新年会に出席する。参加者は37名で、忘年会よりは少ない。カラオケと芸達者な人が多く盛り上がる。福引もあり楽しい一時を過ごさせていただく。私は、電気毛布・足マット・毛布の3点セットが当たる。景品は帰り際に必要な方にプレゼントする。やはり出てこれない人が気になる。

1/7 ショッピング 久しぶりに家族とに行く。活動に余裕が生まれて、活動を理解してくれている家族に感謝の気持ちを伝える意味もある。人に対して感謝の気持ちが生まれる。

T地区-地震一年前に姫路から親元の長田に行き3階建ての店舗兼用の住宅を新築した。順調に喫茶店と靴仲買の商売が軌道に乗った矢先に被害にあい建物は壊れなかったが、地震後の火災で延焼し何もかもなくなってしまった。残ったのは借金だけ。このような悲劇は、マスコミで知っていたが、直接当事者から話を聴くと所も涙も出なく感情が生じなかった。震災後気苦労で主人は肝臓を患い入院される。完治しないまま退院されていたが年末に再入院される。今年から医療費免除が切れ完治しないまま退院される。昨年5月5日に入居した時は、周囲に入居者も少なく街灯もなく、その上、主人が入院していたので本当に寂しく、恐く、熟睡する事も出来なかった。蓄えの有る間はローンの支払いはする。もうすぐ蓄えも底つく……。3人の子どもがいる。6年生の長女は経済状態を知っているのか、無理なことは一切言わない。それが不憫でならない……。『子どもだけには不自由を掛けさせたくないが…』と涙ぐまれる。火の手が迫り取り出したのは、貴重品の入った鞆一つだけ。子どもにはと思

う気持ちで主人が仮設には不似合いな勉強机（一組10万円以上）を3組、所狭しと並んでいる。いの一番に買い与えた、主人の気持ちが痛いほど分かる。地震後子どもとの関わりを大切にしたいと仕事にも行っていない。絵画療法で長女、次女と継続的に関わっている。特に次女は母親との関わりを求めているようだと言ったと母親に話すと、幼少時から希薄だった、これからは特に関わりを持ちたいと話される。長女が4月から中学校に入学するので生活基盤は未だに決めかねているが、長女に帰り将来のことをゆっくり考えたい。所有地は都市計画（区画整理）の網にかかっているが、先ずはプレハブを建て両親と同居しながら周囲を見渡し次の展開を考える。懐かしい土地でも以前の匂いはない。こころの安堵感で次を見つめてほしい。何も残っていない建物・店舗に支払いしなければならない虚しさがひしひしと伝わる。感情さえ押し殺してしまうほど心が凍りつく。久しぶりに重い荷物を背負う。感情を記録に残したいが、問題の大きさに言語化できない。

- 1/8 S地区-両親がなくおばあちゃんに育てられている子どもの行政手当について、社会資源と相談する。諸条件とプライバシーに関わることがあるので、本人が直接相談に行くように伝える。2歳の時両親が離婚し、それ以後、祖母に育てられ、放任主義で殆ど学校に行っていない。教育上の問題は関われる問題ではない。

S地区-昨日電話で身体の調子が悪いので病院へ連れて行ってといわれたお婆さんを訪問する。昨日、私の自動車で行くより救急車を呼んで行きと冷たく言ったので気になり訪問する。物事を自分本位にしか考えられない人で、近所の付き合いもない。引っ越ししてからの出来事を話されるが、話のつじつまがあわず理解できない。自治会役員が役得しているとか、それを役員に言ったら罵声を浴びられたとか。民生委員に長期不在（20日）を説教され、そのあげくよく生きて帰ってきたわえと言われた、何を思っでそんないやみを言われるのか理解に苦しむ。興奮気味なので落ちつかせ思い切り自分の思いを吐き出さす。毎日のように電話が掛かって来る人なので人間関係は出来ている。ゆっくり関わりを持っていくことにする。

S地区-81歳の男性が心不全で亡くなる。この団地で3人目の犠牲者。高齢者で子どもも居たが、最後まで一人暮らしで、社会現状を映し出している。

- 1/9 S地区-隣人にお金を貸したが（50万円位）返してくれない。何回も催促する。あげ句の果ては、借用書を見せろと言われるが隣人だから取っていない。相談を受けてもどうすることも出来ない。生活指導までボランティアは出来ない。しかし弱者からお金を巻き上げるなんて許せない。機会を見つけ正義感で話してみるか？。

深夜に電話相談。いじめられている。どうすれば仲間に受け入れられるのか教えてと……。

- 1/10 後方支援の限界 T地区-自治会役員が2~3日来なかったがどうしていた。運営上の問題を色々相談される。ボランティアの立場で言える事と言えない事とを弁えて伝える。神経がピリピリしている。まだまだ住宅内が落ちついていない。がある。依存されて深みにはまりそうだ。

〔仮設住宅支援会議後の飲み会の一コマ〕

- ・自分を癒すためにボランティア活動している人がいる。
- ・現時点の活動は、被災者として捉えるのではなく、一人の人間として捉える活動である。
- ・ボランティア仲間が今何をすべきか、悩み悩み活動している。自分だけではない。

1/12 仮設住宅支援会議全国キャラバン（東京） 初対面のボランティアもいるし顔馴染の仲間もいる。長田で被災にあい今は仮設住宅から中学校に通学し、活動している学生と同室。明日のシンポジウムが気になり一生懸命に原稿を暗記している。暗記しなくていいよ、自分の気持ちで話すことが相手に入る。体験した事、活動した事を自分の言葉で話すようアドバイスする。緊張感が取れたのか睡魔に見舞われたのか眠りにつく。私も明日の事が心配で不安だが、成り行きに任すしかない。実践している事、仮設の現状を発信出来たらと言いつつ眠りにつく。

1/14 ガレキ（オブジェ）と記録写真を展示 飯田橋ステーションビルー人でも多く鑑賞していただき、今一度震災を思い出して欲しい。被災地でも温度差が出てき、風化されることも仕方のないことだ。機会を捉え震災のことを今一度考え今後に生かしてと来客に伝える。シンポジウムの会場は、東京ボランティアセンターで二部構成。

午前の部は『神戸の状況と今東京で出来ることは』の題材で参加者が小グループに分かれてワークショップをする。被災地でボランティア経験のある人達で熱気に圧倒される。一年経過しているが100人の若者が関心を持って、東京にいて関われる事は何かと真剣に話し合う。単発でも貴方たちの若さを被災地にと訴える。

午後の部も100人以上の参加者だ。さすが東京だ。

参加者がそれぞれの立場で問題提起する。シンポジウムの『キーワードはコミュニティである』・コミュニティは如何に作り上げていくか……。被災地でコミュニティがあったのか、希薄な都市社会で仲間意識が存在していたのか、長田の下町ではあったかもしれないが……。今一度私たちの住んでいる町のコミュニティ成熟度について考えてみる必要がある。

- ・行政とボランティアの連携は、断の見える関係であれば情報が得ることが出来る??。
- ・防災とは沢山の友達を作ることである。人と人との出会いで如何に仲間を作っていくかである。
- ・街には、見えるものと見えないものがある。見えないものを大切にしていける活動も必要である。人が居て街が生まれる。今は復興という名のもとで、人のことを忘れていく。

『被災地の復興は、意欲というところの顔が見えてきた時が復興の第一歩』

「一言コメント」 活動した仲間と再開する。懐かしく話に花が咲く。このシンポジウムを機会に2団体とネットワークが出来た。子どもの衣料を提供してくれる『コアラの会』と『こころのサポート市民の会』である。市民の会は、姫路で現地活動を2回され、住民はことのほか遠来のボランティアを歓迎してくれた。

私たちの事を忘れずにいてくれることが何よりも嬉しく心の支えになると……。

1/15 成人式 世田谷区役所－瓦礫と震災記録写真展。成人式に6千人が集る。一生に一度の華やいだ式典には不似合いである。キャラバン隊に参加している仲間が成人式を迎える。余りにも落差が有りすぎる。参加者の関心は直に伝わってくる。関心のなさを嘆くのではなく、企画の段階で考慮しなければならない。しかし、募金箱には10万円以上の大金が入っていた。

これだけの人が集まって少ないと思うよりは、これほど沢山募金があったと思うべきだ。もし姫路で同じ事をしたら……惨めな結果になるかも……。〈市民の中で仮設住宅が有ることすら知らない人が多数いる現状を捉えて〉遠方で発信するより、身近な所で地道な活動が必要と常々思っている。

ホテルに着くと電話が入っていると伝言を受ける。出張しても連絡先を伝えていなかったが、今回は連絡先を伝えていた。連絡を取ると仮設自治会から電話があり一人暮らしの老人が2～3日留守をして行き先が確認取れず警察も探している。貴方なら親身に関わっているから行き先を知っているのではないかと尋ねられる。二度と孤独死を出さない努力は必要だが、自治会が住民を管理してしまうと窒息してしまう。声を荒らげて伝えるが分かってもらえない。ここまで追いかけられるとボランティアの域を越えている。個人のプライバシーも守ってあげなければならない。柔軟な対応が今こそ必要。

『一言コメント』 式典が始まって式場に入るわけでもなく、ホールとか周辺を集団でたむろする若者。リーダーがいるのかいないのか分からないが、ただ集団を組んで動いている。何の目的で来ているのか、何しに来ているのか分からない。式典が終わって帰ろうとしないので何回も主催者が終了放送をする会場周辺を離れようとしな。追い払うように外にあるテントとかテーブルを片付けにかかるが、帰ろうとしない。今の若者は何を考え行動しているのか理解に苦しむ。しかし、一年前は若者が、被災地に来てボランティア元年を作ってくれた。頭がパニック状態だ。

- 1/16 飯田橋ステーションビルで展示物の説明をする。年配者が殆どで、中には熱心に見学され募金箱に心を入れて立ち去る若者もいる。一人ひとりのところが募金箱に入り重い箱になる。関心のある人に見てもらい、一人ひとりの小さな輪が大きく育つ起爆剤になれば幸いである。夕方から国分寺でシンポジウム、夕方の出にくい時間帯であるが30数名の参加者で、熱気が伝わってくる。参加者が地元に戻り今日の事を発信してくれたら大きくなっていく。

『一言コメント』 被災地外の温度差を感じながら、被災地の現状を発信することの必要性を感じた。貴重な体験に感謝の気持ちである。機会があれば今後も参加し活動の中で知り得たことを伝えて行きたい。そうする事もボランティアの役割である。それと同時に地域で伝える事も忘れてはならないと認識する。

- 1/17 東京のスーパーバイザーにお逢いし、一年の総括をしながら次につなげるエネルギーを頂き帰路に着く。震災一周忌でここ数日マスコミは狂ったように報道している。疑問に思う記事もある。一点を捉えるのではなく、広範囲にとらえ起きている事実を発信してほしい。現状を知らない人は、マスコミだけが情報源。明るい話題もいいが、事実を伝えてほしい。未だに先が見えない人が殆どだ。報道によって国民の理解度が変化する。報道の怖さを今回ほど知らされたことはない。
- 1/18 東京まで連絡があった人に会いに行くが20日まで留守で、行き先が分かっている。孤独死を出したと言って枠組みに入れ管理する事に無理が生じる。それぞれ人には生き方があって

何人といえども束縛する事は出来ない。認めあってこそ共生の社会だと思う。締めつけないで……締めつけないでと自治会役員に伝える。役員の立場で管理することは許されることではない。

- 1/19 県こころのケアセンターに立ち寄る。近況を話しながらアドバイスを受ける。何時も受け入れていただき、スーパーバイズを受ける。自分の時間を大切にすること行政とボランティアの関係についてのアドバイス。ケースを大切にしながら引越し後も電話で継続支援することも必要と教えていただく。行政との関係は情報の提供であり見返りは求めないこと。行政には守秘義務があると何回も聴くことで理解できる。活動情報を知らせる所があるだけで感謝しなければならない。

- 1/20 パニック状態 活動について第三者からとやかく言われたくない。被災者から直接言われる事は受け入れられるが。……外野席が活動に対して、やっかみや興味本位でとやかく言われる。活動を理解してとは言わないが、邪魔だけはしてほしくない。

- 1/21 昨日の件でことばたらずなところもあり十分理解してくれなかった。物事を誰に言ってもいいと思っていたが、理解されない人には言わない方が得策。直ぐ気持ちを伝えてしまうところに誤解が生じる。いい体験をした。これからは人を選んで伝え、自己防衛をする。

T地区-新聞掲載された人を訪問する。プライバシーに関わることも多々あり心配していたが、4人とも喜んでいただく。掲載された日に友達から電話が鳴りっぱなしで、嬉しい悲鳴で久しぶりに友達と話ができたと喜びを伝えられた。

嬉しい事が起きる。広報紙を戸別訪問しながら配付していると一人の住民が協力してくれる。初めての出来事で驚き。自立の現れかもしれない、この気持ちを大切にしてい行き、2~3歩引き腕組みして見届ける時期に来ている。

- 1/22 社会資源に情報提供 (2件)。アルコール依存の人と面接を約束していたが不在である。明日改めて訪問する。年金支給額が少なく生活が苦しい人に生活保護について情報提供する。申請主義なので不足分を補ってもらうように担当課に出向くように伝える。復興新聞を配付する。

- 1/23 T地区-店舗立地について相談を受け、相手方に交渉するが仮設住宅と言うことで断られる。事実を住民に話すのは辛い。辛いことは先送りしたいが交渉結果を伝える。不動産屋は特別扱いしない。当たり前のことで、期待する方が厚かましい。しかし期待する気持ちもわかる。

- 1/24 仮設住宅支援会議 自立支援について寺小屋形式で勉強する。自立支援の難しさを改めて理解する。活動が妨げにならないようにしたい。

- 1/25 S地区-気になる人が今日も留守である。訪問を伝えるため玄関口に名刺を張りつける。

お年寄りのコミュニティーは、買い物に誘ったり誘われたり一緒に行くことでふれあいが生まれる。つかず離れずで小さな仲良しグループが生まれている。家に上がってお茶でもと言っていたら煩わしくなる。プライバシーは確保したい。つき合い上手になれば、ゆとりが出来こころの復興につながる。小さな核でも住民同志のコミュニティーが一つ一つ誕生し互いにラップしていけば大きな核になる。仲間作りの仕掛けに苦慮するが、生まれつつあるグループもある。

グループミーティングが多忙で伸び伸びになっていたが、活動原点にふりかえり今後の活動について協議する。不定期活動であったが、一応の落ち着きも出てきたので活動日を決め定期的に訪問することにする。『会員に活動予定』を月初めに通信することになる。グループ内でグループワーク出来ない人の処遇に苦慮していたが、仲間からハッキリすべきだと言われ思い切って『貴方は一人で活動出来る人なので独立して……』この一言が言えず悩んでいたが、仲間のアドバイスを受け断腸の思いで伝える。最初が肝心。しかし、ふるいに掛けることは出来ず新しい人を仲間を迎えるときはどうあるべきか……今後の課題。

T地区一戸別訪問し上がり込むとビール瓶が転がっている。分からないようにそっと隠された。何を意味するのか……？仕事の後の晩酌は美味しいと言いながら朝から飲んでいる。関わり方がわからなくなる。一時でも寂しさをまぎらわしたらと思う気持ちで訪問するが、関われば関わるほど依存を助長しているようだ。この世からお酒がなくなればよい、さもないければその人が飲む分を全部飲んでしまったら飲むお酒がなくなると、とてつもないことを考えるときがある。

ふれあいセンターに多種多様なファックスが入り対応に苦慮されている。団体名を確認してそれなりの選択が必要とアドバイスする。

『一言コメント』 グループ活動の継続と、ボランティアの質向上を図りながら活動する楽しさと苦しみを交互に味わっている。現場と後方支援の両方が活動になり孤軍奮闘である。オーガナイズすることの難しさも味わう。

1/26 市民ボランティアミーティング 長い間御無沙汰していたので馴れるまで時間がかかる。講座終了後、参加者の継続した活動を期待するが……。それにはリーダーが如何にコーディネートするかにかかっている。ボランティア参加の気持ちがあっても、活動に楽しさがなければ自然に消滅する。こころのケアボランティアは今後数年は継続しなければならない活動、気負わず長期戦に備えたい。それにしても仲間の熱心な取り組みにただただ敬服する。リーダーは少し疲れ気味で、情性で動いている。疲れた時に新聞に掲載されたり、何処かで活動を聞きつけ参加したいと連絡がある。引くに引けない状態、後方支援に回って一歩引きたいが今は出来ない。前線活動は実践でき感動を味わうことができ、オーバーワークになりがち。自覚症状のあるあいだに治療が必要だ。

神戸で戸別訪問活動している仲間を誘われ事例研修に参加する。月例でケースバージョンをしている。少人数で思い切り吐き出しが出来そうな雰囲気である。同種活動の仲間を求めているので願ったり叶ったり。暗中模索の活動で、仲間とあうことで情報交換やふりかえりに繋がる。活動が増えるが、いい出会い。スーパーバイザーの適切なアドバイスも魅力。

『一言コメント』 ボランティア活動の引き際のタイミングがこの頃気になる。特に遠方から参加している若者がバーンアウトせず、楽しい思い出を残し被災地を去ってほしい。彼らが去った後の対応は地域ボランティアが関わらなければならない時期にきている。地元エネルギーがないとはいえない。何時までも甘えておれない。

- 1/27 『突然の死』講演 大阪YWCAで小西先生。交通事故・殺人・事故死・自殺等々に襲われ、こころ悩まされている人がいる。対象喪失者に関わる時の注意を事例の中からくみ取る。電話相談の基本的なことは理解できていると思っていたが……。災害被害者の悲惨・悲劇の奥深さを改めて思い知らされる。下手な慰めとか、激励がどれほど傷つけているか、本人しか知りえぬ物事を他人の無責任さでかき回していると、活動をふりかえる材料をもらった。

『一言コメント』 オーバーワークを仲間に指摘される。疲れが顔に出ているようだ。ボランティアホリックに陥っている。陥りやすい性格である。

- 1/28 S地区－お年寄りが1月6日に亡くなる。隣人が日がたつにつれ気落ちし、食事も喉に通らないと痩せ衰えげっそりした顔である。住宅内つき合いが親密になり、同じ体験者ということで、毎日のように行き来し支え支えられながら生活していた。対象喪失。当事者と対面するとどの様な関わりを持っていいのか迷ってしまう。1ヶ月も立っていないのでそっとしてあげることが一番と思う。しかし落ち込みの酷さで食欲がない。息子もこんな身体（障害手帳一級）だと嘆かれる。何回も訪問しているが、こんな事を母親が言われるのは初めてだ。入居後、リハビリ先とか無料バスの申請とか色々に関わりを持ってきただけに気になる。心の整理ができ自分から話されるまでじっくりと待つより仕方がないか。閉じこもりが気になるが……。

S地区－植木鉢の棚作りをしながら悩み相談。住民同志のつき合いに気を使う。主人（仮設内で病死）が障害者であったので、老人とか障害者に対して何か協力したいが周囲の目が気になる。これでは駄目と思いつつも、しばらくはここに居なければならぬし、トラブルの元を作りたくない。自分の気持ちを抑圧してよいのか何時も迷っている。自分の生きざまに迷うし自宅再建においても子どもと調整がつかず悩む毎日である。これまで同居したことはない、自宅再建すると息子夫婦と同居になり心配である。同居したとき子どもとうまくやっていけるか心配で心配で堪らない。資金繰りは子どもにまかさなければならず、なにも出来ない自分が情けないとせきを切ったように話される。住宅内での生き方と自宅再建に対する様々な障害。周囲を気にしてヒソソリと生活されている。住宅内の現実と自宅再建に向かって問題を一つ一つクリアされていることは、自立の始まり。心優しく周囲を見渡せる人だけに、他者への気遣いが人一倍ある。自宅再建後神戸での再会を楽しみに今後も関わりを持ちたい。

自治会役員で最近よく弱音を吐く人がいる。人の悪口を言う人でないが、一人の役員に何事も平等公平にと批判され気落ちしている。何も特別な事はしていないし、救援物資にしても何時も最後の残り物を貰っていると反撃を私に向ける。彼の家は殺風景で救援物資などない。住民が感情的に言っているだけだ。耐える辛さとイライラをボランティアに向けている。3月末の任期まで頑張るが自分の身体（高血圧）も気になる。ふれあいセンター主催行事にしても事前に連絡もなく一部役員が進めている。いてもいなくてもいい、無視されることが残念だ……うまくいっているように見えたが、自治会運営に難儀されている。周囲が見渡せるようになり住民の不平不満が噴出している。

- 1/29 遊び会 T地区…子ども対象。束縛せず自由に伸び伸びと自己表現出来る場所提供である。3月末まで月2回程度紙芝居・絵本・手遊びを主にふれあいセンターで安心した空間を提供し、遊びの中から母親同志とボランティアのコミュニケーションを築きたい。育児相談まで出来たら最高である。早速母親から子どもが夢を見てうなされている。引きつけを起こしている等々の相談が持ち込まれる。相談に乗ったり、力量以上のものは医療機関を紹介する。幼児(3人)を抱えストレスと身体の不調を訴える母親もいる。戸別訪問中に親が大声で怒鳴りつけている場面に出くわすこともしばしばある。深刻な問題が山積する中で、専門家のアドバイスを受け継続した関わりをしたい。

マスコミに取り上げられ周囲の目が心配。地元以外では評価され温かい激励が届く。しかし地元の反応は冷たい。活動で知りえたものを社会に発進するのもボランティアの使命だ。

職場の反応も気になる。冷たい視線とか、活動に対する外圧が日増しに増してくる。自分の思い過ごしであればよいが……。活動に対する不安が先に立ち、先が見えない。被災者のニーズが有ることは分かっているけども気持ちの整理が出来ず、取り組みに対して暗中模索でエネルギーが切れてしまう。機会がある度に人と出会って行く米を模索している。被災者との問題より外部の圧力でストレスが生じ、辛い毎日が続く。こころの支えは、ボランティア仲間と家族。

- 1/30 編み物教室 S地区…お年寄りが多数集まりお喋り会になる。外出機会が少ないので冬の間、定期的に続ける。

対象喪失の女性も少し元気が見えてきた。明日の食事会を楽しみにされている様子。……時間経過と共に回復されつつある。

元居た所へ帰れば亡くなった子どもを思い出す。姫路市内の公営住宅に入居し、将来のことをゆっくり考えてみたいと退去される。被災後一年が経過しエネルギーの有る方はばちばち生活再建に取りかかっている。

- 1/31 仮設住宅実態調査 行政から依頼される。仲間と相談して個人の資格で協力する。調査費は不足がちな活動費に充当する。プライバーに関わる調査で、今後の活動に生かしたい。

マスコミ関係者と今後の活動について話し合う。

- ①被災後一年が経ち被災者の自立が始まっている。自立を妨げる活動はしない。
- ②手の平に物を載せるイベントは必要なのか。必要なければ資金繰りも楽になるが……効果がなければ撤廃したいが、楽しみにしている人もいる。(これがくせ者で……住民の中でももらい癖がついていると言われる人もいる) 戸別訪問だけであれば何しに来ているといわれる。見えるものがないのでボランティアも疲れる。イベントは被災者とのふれあいとボランティア仲間との仲間作りにつながる。これからは形を変えて、住民主導へ方向転換していきたい。
- ③遠来ボランティアの引き上げ時期を地元ボランティアが促進し、余力を残して勇気有る撤退をしてほしい。
- ④生活指導・生活支援活動が求められる。情報収集と質の向上に務めなければならない。
- ⑤新しいコミュニティが出来上がり、仮設住宅を離れたい人がいる？。仮設はあくまで仮設であって、復興住宅への転居を促進しなければならない。

〔事例〕 高齢者が多く、ボランティア訪問のないところでは、住民間の連帯感が強く、他所より絆が強固。高齢者が、仮設住宅で人生を全うしたいと言われる。気持ちは分かるが？このまま居座り続けると超高齢社会になり、スラム街になる恐れがある。

ボランティアが仮設住宅からの転出フローを作り、住民に説明する活動も必要。行政サイドでは出来ないことだ。（強引な説得は追い出しにつながる）フリーな立場で復興住宅への手助けをしたい。

⑥グループ活動の継続と活性化を計るか日々悩むことがある。仲間が増えれば増えるほど問題がある。

⑦ボランティアも住民も育っていく時期だ。

『一言コメント』 復興住宅への転居促進のため、復興住宅説明会を開き、その後見学会を実施する。

●（資料参照）

2/1 T地区ー退去する人、今も入居する人様々で住宅内の実態が確認できない。少しでも入居実態を把握したいと、肌寒い夜に調査する。何でそこまで思う気持ちであるが、仕事が終わった後、自然に足が向いてしまう。

（10月から本日まで20数世帯が入居している）入居しても生活しているのか荷物だけなのか分からない。

3才の子どもが、言葉が出ないとお母さんから相談がある。児童相談所を紹介するが、以前行ったが嫌な思いをした経験がある。過去の経緯があり行きたくない。ほっておけないので後日知り合いの専門病院へ行くことにする。

2/2 次の活動展開が分からない。日々悩むことが多く、落ち込んでしまう。助けて…!!

2/3 節分イベント T地区ー栄養士会の協力。昨日は雪が舞っていたが、天候も味方して温かい一日。豆まき、豚汁、ご飯を200食分用意する。土曜日と言うことで出てくる人も少ない。半分以上残ってしまい、疲れが一気に出る。残りは、少規模団地に配付したり、各戸に戸別訪問しながら配付する。

ふりかえりでイベント内容について話し合う。寒さで出てこないのか、出てこれないのか分からない。参加人数よりも、出る人が出てき、出てこれない人には戸別訪問しながら配付する事に意義があると言う人もいる。それにしても、参加人数が少ない。人数ではないと分かっていても、落ち込んでいるときに勢いのないイベントをして余計に落ち込む。

2/4 T地区ー子どもの遊び会をする。不用品があるので、必要な方にお渡ししたいと連絡がある。仮設まで持ち込んでくれたらよいが、取りにこいでは仕事が増える。

2/5 T地区ー生活保護者と病院へ行く。事前に連絡なかったといやみを言われる（民生の担当者）社会資源と医療費免除の話し合いが出来ていなかった。

社協主催のボランティアリーダー会議に出席する。自立支援について理解もなく、理解した活動もない。……活動が手段であって目的ではない。活動が目的のように思っているところに問題がある。2～3ヶ月に一度位しか活動しないグループとは、活動にずれが生じる。集

まっって話し合う意味は……

- 2/6 戸別訪問と編み物教室 T地区-自治会役員が車庫証明が取れるか行政と交渉してくれと頼まれる。仮設住宅の募集案内には、駐車場のある仮設がキャッチフレーズであった。交渉に日時が掛かったが、車庫証明を出してもらえることになる。

老人性痴呆か老人性被害妄想か分からないが、道路に人形を置いて独り言を言ったり、朝早くから他人の玄関ドアを叩いたりして気味が悪いと隣人が言われる。保健所に連絡を取り、警察が重点的にパトロールすることになる。顔の見える関係になり、情報交換がスムーズに行くようになる。

S地区-久しぶりに苛めにあっている人と。今電話した所だったとタイミングの良さで再会する。すれ違いばかりで気になっていた。話は他愛もないことで、傾聴にはエネルギーがいる。

退去者や近隣のいやみや愚痴を山ほど吐き出される。これまで涙を見たことがなかったが、涙ながらに話される。周囲の人が受け入れてくれたらと思うが、期待するのが無理か？その役目はボランティア？袋一杯に愚痴を詰め込んで帰ることとする。

- 2/7 T地区-老人性痴呆の人から石を投げられ我慢できないと隣人が言う。直ぐ行政に連絡する。保健所と警察が素早く対応してくれた。以前から情報を伝えていたので動きが早かった。

- 2/8 社会資源から仮設の現状を教えてくれと連絡が入り報告する。ふれあいセンターで月一度健康相談日があるが、訪問者は皆無に近い。待ちの姿勢でなく、攻めの姿勢で活動してほしい。1月から医療費免除が切れこの事に関心がある。病人が病院へ足を運ばない。問題はアルコール依存症と精神的な障害者に対して支援出来る人が必要だ。枠組みの中で行政の継続活動が期待できるか不安であるが、今の状況では県こころのケアセンター職員の訪問をお願いしたい。

- 2/9 『歌の会』 S地区-神戸の短大教授を招いて。キーボードを持ち込むと言ったので、皆さん流行歌と勘違いされていた。童謡と唱歌を腹の底から歌う。皆さん歌詞をみながら童心に帰り、一時でも悲しみを忘れ歌えたと話される。目頭がうるんでいた人もいたと先生から聞き感動する。寒さで家に閉じこもり何日も話し相手がなく声を出せなかったと言われる人もいた。思い切り大声で歌えるなんて楽しく嬉しかったと参加者の声もある。地域に打ち解けない人が初めてふれあいセンターに入り落ち着きもなくかき回すが、一言二言話すと聞いてくれる。要は構ってほしいと言うことで、参加されたことに意義がある。

- 2/10 シンポジウム こころ豊かな人づくり運動の『500人委員会』で『震災を考える・人のつながり・地域のつながり』にパネラーとして出席。

震災ボランティアから地域ボランティアにつないで行く時期がきている。震災ボランティアとして活動した仲間と新しい出会いを大切にしたい。活動は聴き役なので、思いを言える場所を与えられるとついつい熱が入る。発進する機会に感謝。

質問事項『職場の中でどの様に思われますか？』

週末とか有給休暇を利用しての活動だが、冷たい目で見られる。これがいちばん辛い。ある時也有給休暇を取って活動しているのに労務管理者（人事課）へ勤務中にボランティア活動していると通報され、後日呼び出しを受けた。『活動していることは新聞紙上で知っている。

こんな事があっては相殺されてしまう』何を思って言ったのか、別に人事評価を上げるために活動しているのではない。活動する場所があるから活動している。公務員で有る前に一市民。見返りを求めて活動など出来ない。自然な気持ちで見守ってほしい。諸外国のボランティア活動を見れば必要か否か分かりきったことだ。

- 2/11 調査用紙回収作業 プライバシーに関わるので慎重になり調査に手間取る。回収率を上げるように、協力依頼をするが、いやみを言われムカッとする場面もある。調査ばかりして何になると言われる。多種多様な調査が入りうんざりされる気持ちは分かる。面と向かっていやみをタツブリ言われると気分のいいものではない。

Aさん宅に調査訪問に行く。何しに来た、泥棒が入って表の鍵が掛からなくなっている。泥棒に間違えられる。分かった後は、鍵を修理してくれ修理代は出す。色々話しているうちに急に逆上して、私を売ったのは……誰だと口走った後、私たちが保護しにきていると思ったのか、小さな鉄の先をグッと腹に突きつける。一瞬しまったと後ろに下がる。怖さと恐怖で身震いする。どの様に対応してよいか分からずその場を後にする。以前から関わっていた老人性痴呆症の人である。

今日も色々な人と出会い罵声を浴びたり、感謝されたり気持ちが揺れ動く。

『一言コメント』 後日Kさんの事を社会資源に連絡する。その時すぐ警察に連絡しなかったのかと言われる。

ボランティアの立場で老人を保護するような事は出来なかった。冷静に考えると、何回も問題を起こしている人だ。自分さえ良かったらいいのではない、事故が起きてからでは遅すぎる。自分が遭遇して他人の気持ちが理解できた。

- 2/12 自治会役員が活動支援に対して気を使われ、今後の接し方に迷う。訪問すると最大限の持てなしをされ、断れば機嫌が悪い。共依存に陥らないことだ。

- 2/13 T地区ー戸別訪問。ふれあいセンターの顔ぶれは相変わらず同じ顔である。

県の実態調査説明会に出席する。難しく説明されるが整理すると難しくない。10人体制で一斉に入ることにする。調査期間中気苦労が耐えないだろう。ここ最近疲れ気味だが調査費がもらえることはありがたい。

- 2/14 『声の郵便局』 仮設住宅支援会議に届いた名古屋市立植田南小学校の手紙を30通預かり、各仮設住宅のお年寄りに配る。今後の展開が楽しみだ。橋渡し役として育てていきたい。

『一言コメント』 文通から3回にも及ぶ訪問交流が実現した。当初は考えられなかった事だった。『ふれあい姫路』で世代間交流ができ、独り暮らし老人に喜びと希望を与えてくれた。

- 2/16 寝不足で一日中身体がだるく頭も石のように重い。何も手につかない状態だが、仕事が終わった後、自然と仮設に足が向く。ボランティアホリックに陥っている。自覚症状があるうちにはいいが……？

実態調査で初対面の人が、せきを切ったように話される。奥さんが震災後、うつ病になり

病院に入院している。長田でケミカルシューズの商売をしていた。地震2日目の押し寄せる火の手で家屋は全焼した。家内の里が姫路なので当地で民間住宅を借り生活していた。仮設ができ入居したが明日の希望が持てず、朝起きて座った状態で、一日中一点を見つめ感情の変化がない。病気にならないのが不思議だ。自分の土地でありながら区画整理で今は家を建てることできない。この一年なにをしたかと言うと、貴方に言っているように『ぼやき』『ぼやき』の連続である。これでは沈み放しで生きる望みもおきない。分かっているが毎日がぼやきである。大の大人が大粒の涙を流しながら話される。手拭いで涙を拭いながら話される。何もできないが傾聴するだけである。まだまだ吐き出しのできていない人がいる。重い重い荷物を背負う。

- 2/17 大阪YWCA市民ボランティア講座 仮設住宅の現状報告と活動上の注意事項を話す。大阪でハウステンボスの担当者とチューリップ配布の最終打ち合わせをする。

- 2/18 『震災ボランティアから学ぶもの』 地元公民館で教養講座講演。機会に恵まれ地元で話せたことに感謝。行政の網の目からもれている人が多くいて、こころの癒しはまだまで時間がかかると発信する。活動参加を促すが、一人として参加者はなかった。何はともあれ現状を伝え認識してもらうことだ。

T地区-他グループと共同で餅つき。沢山のボランティアと仲良く活動でき久しぶりに活気に満ちた一日だった。

- 2/19 チューリップ500鉢 ハウステンボスから一足早く春の訪れが届く。センター前でオランダの民俗衣装をまとったフラワーキンによる贈呈式。仮設に外国人が訪問すると伝えていたら、数日前から待ち遠しくされ、大変な喜びよう。戸別訪問で、部屋の大きさや暖房はどの様になっているのか、生活に不便は有りませんか、地震の様子はと矢継ぎ早に質問され、被災者ところの交流をする。私達もお土産に民芸品の『姫路ゴマ』を渡す。置物にもなるし、廻すことも出来ると体験してもらう。こんな素晴らしいプレゼントを頂き早速に一軒一軒手渡ししていきたい。

- 2/20 S地区- に行くと最近T地区ばかり行ってこちらに来てくれないと厭味を言われる。確かに以前はS地区によく入っていたが、自治会運営と住民のコミュニティが軌道に乗っているので活動拠点をT地区に移している。時間をさいてS地区も訪問することにする。2ヶ所をバランス間隔を持って訪問することは難しい。

- 2/21 S地区-暖房器具を配付したが、いらないとと言われる方から連絡が入る。一寸した言葉で相手を傷つけたようだ。話して理解されたが、気をつけなければ『善意の押し売り』になりかねない。

役員からふれあいセンターの運営費に余裕が生じたので3月末までに使い切りたいと相談を受ける。社会福祉協議会と相談して、手伝う事があれば人的なお手伝いはさせてもらおうと伝える。毎月バランスよく運営されていたらこのような事にならないが、役員は暗中模索で一人歩きできないから、社会福祉協議会の指導と深い関わりを期待したい。

『一言コメント』 ふれあいセンター運営については、住民、行政、地域自治会、ボランティア等々の関わりが必要であると開所当時提案したが、社会福祉協議会が取り上げてくれなかった。今になって思えばもう少し強引に申し入れればよかった。

2/22 T地区－Aさんの関わりの方について仲間と相談する。周朗が受け入れるだけの余裕がない。従前地域ならば受け入れられることである。老人性の被害妄想が出て行動が奇抜で薄気味が悪いこともあるが、周囲の人が本気で口論したり、行政が保護に入ったが、中途半端な結果で保護できず最悪状態だ。ボランティアであっても脅迫を受けることがあれば、堪えることなく直ぐ社会資源に連絡し保護の依頼をするようにとアドバイスを受けるが……？

2/23 東京の保健婦さん 東灘区で活動していた方が引き上げ前に一度姫路の仮設住宅を訪問したいと言われ案内する。T・S地区の感想を求めたが、笑顔が帰ってくるだけで本心は聴けなかった。

住宅内の環境整備に予算がつき通路の舗装工事が始まる。これで『じゃり道』から開放され、雨がふれば水たまり、自転車に乗ればハンドルを取られて怪我をすることがなくなる。防犯灯も設置されるので夜間も安心して外出できる。

『声の郵便局』の反応が早くも出てくる。子どもの手紙に感動して直ぐ返事を書いたとか、リハビリと思って不自由になった手で返事を書いた。返信用封書に切手まで張っており、この心配りにただただ感激する。

会長緊急入院 T地区－自治会運営に日夜ご苦労され、心労がピークに達していた。大事に至らなかったが、今後の運営が心配である。神戸商船大学体育館の避難所からの知り合いで引き受け手のない役員を無理やり引き受けてもらった経緯もあり心配だ。

子どもたちに『雛人形』のプレゼントをする。大人中心の行事が多く子どもたちに向いていなかった。子どもより母親の喜びはたとえようなない喜びであった。入居後子どもを出産した家族もいる。

訪問しながら声掛けしていくが、声だけ聴いて私だと分かってくれだし、地道な活動が目に見えだした。

2/24 大阪の十八条仮設（淀川）イベント 仲間二人と参加する。ボランティアの中で臨床心理士の肩書で自分が考案したセルフカウンセリングだと文書化したものを完り込む人がいる。これまで団体として積み上げたものが一気に崩れそう。今日は、イベントだしグループとして専門性を出さないことを活動基本にしている。震災当時活動出来なかった事が罪悪感として表れている。全く閉口し参ってしまう。ボランティアにボランティアがいるとはこのような事か。西の遠隔地（姫路）から東の遠隔地仮設に活動と調査に寄せてもらった。ここは、県外被災者と言うことと住民が阪神間の市民と言うことでまさにアメリカ合衆国並みで行政対応がバラバラで住民間の連帯が希薄だ。

各仮設にはそれぞれの課題が山積していることを視覚で確認でき有意義な一日であった。

2/25 今日の参加者は15名で圧倒されそう。仲間のなかには血圧計持参で一人ひとり測定しながら戸別訪問してくれる看護婦もいる。初対面であっても血圧計という媒体で入りやすい。子ども同伴の場合も子どもが媒体で話が弾む。それぞれ得意な分野で難なくローラ作戦ができた。処理できないケースまで掘り起こしそう。各人が自己治療力でこころの傷口にかさぶたをつけている時期に、ボランティアが能力以上の活動で、かさぶたをめくるようなことはしたくない。

活動の中から知り得たものは、外部に発信する事も必要だが……。

2/26 深夜の調査訪問 仲間の一人が仕事が忙しく調査が出来ないとSOSの発信。引き受けたものは期限までに完了しなければならず、今になって調査が負担になる。資金稼ぎと飛びついたが……。調査費には魅力がある。プライバシーに関わることなので時間がかかる。身震いする寒さに震いながら何故こんな事と泣き言をいいながら……。調査結果が復興計画に反映されるならと言いつつも聞かせながら……。まだまだ続く。

2/28 仮設住宅支援会議 魅力に欠ける会議が何回か続いている。何が問題かつき止めていかないと連絡会の存続に危機感を覚える。一部の人の発言と事務連絡に時間を費やしてしまう。以前の活気が嘘のようだ。参加する意味と意義を自問自答しながらの出席が続く。行かなければ行かないで、物忘れしているようで、情報収集も出来ない。消化不良のまま参加することに抵抗感を感じながらの参加。

『一言コメント』 理想的な話についていけない。日々活動して、今現場で起きている事にどう対応すべきか、現実問題を如何に解決するかが大事。こころの支援は、物心両面の活動であり社会運動に馴染まない。

2/29 全国社会福祉協議会の活動助成金申請事務に取りかかる。思った以上に手間がかかる。

日中は寝不足で身体がだるい。夕方になると頭が冴えてくる。まるでコマーシャルの5時から男だ。年度末で仕事も忙しく、ボランティアの事務処理も多くお手上げ状態。風邪も引かずよく頑張っていると自分を褒めてやりたい。

3/3 雛祭り T地区-播磨栄養士会と共同でを実施。イベント内容は海老、穴子入りちらし寿司、おはぎ、はまぐり入りすまし汁、おかず等々でこれまでで一番の豪華版である。バザーとハーモニカ演奏と盛り沢山の出し物で子どもも大人も楽しい一日だった。一番喜んだのはほかならぬボランティア。余りの美味しさに何回も持ち帰りされる方がいた(過食症の疑い)。ふれあいが大切だと毎回言っているが、大きな鍋を持参して持ちかえる人が多い。今回は数量的に余裕があったので、食べ終わった後の持ち帰りは大目に見たが毎回抵抗がある。厚かましいのか、もらい癖がついたのか、本当に困っておられるのか……分からない。もう少し理性と周囲への思いやりを期待するのは私だけではない。住民のなかにもそう思っている人もいる。

ハーモニカの先生は、初めての仮設訪問で、演奏しながら皆さんの顔を見てびっくりした。無表情・無関心で黙々と食べるだけで演奏を続けるエネルギーがわからず途中で切り上げた。申し訳ないことをした。ボランティアの皆さんのご苦勞がよく分かったと逆に激励を受ける。初参加の人の捉え方は、新鮮で情性に流れている私達に素晴らしいプレゼントを置いて帰ってくれる。感謝、感謝です。

3/4 S地区-Tさんと面接する。隣人の動向が気になると……いましばらく様子を見たい。

パンジーの鉢植えを200鉢以上持ちこみ配布する。

ボラセン会議に出席するが、回を重ねる毎に魅力がなくなる。当初は情報交換の場所であったが、今は自治会運営に批判したり、評価したり果ては個人的な中傷まで及んでくると何のための会議か疑問に思う。住宅内の自治を無視する発言とか、それだけの関わりを持って

いるのかと問いかけたくなる。ボランティアが関われる範囲を知り、自立の妨げは厳に慎まなければならない。住民による住民自治を最大限尊重し、その上の支援であればよい。ボランティアがたまに気ままに活動し表層部分だけをみ、一部の話を聞き、それを全体意向として捉えることに問題がある。魅力がなければ出席しなければよいが、自治会支援は、諸問題を抱え日々難儀する事がありすぎる。

住宅実態調査の最終日、回収率も上がり概ね100%に近い。住民から罵声を浴び、深夜の訪問に不審者に間違われたり、厳しい寒さに耐えよく頑張った。皆良くやった。各人が調査から知りえた情報は、各人のコンピューターに記憶させ、今後も密度の高い活動を展開したい。

- 3/5 イベント続き 仲間からイベントばかりして本来の戸別訪問がお留守になっていないかとクレームがつく。しかし、イベントをする事で、エネルギーの有る方と無い方を見分けられ、出てこれない方を重点的に戸別訪問する。それとボランティアの顔を知ってもらうことも必要。通常活動日にふれあいセンターへ活動挨拶に行くと今日は何をしてくれると、尋ねる住民もいていまだに手の上に物を乗せるのが、ボランティアと思う人もいる。そんな事もありイベントにウエートをおいていたが、今後は本来の活動に戻りたい。

活動後のふりかえりをふれあいセンター内でしているが、住民がいて深まりのある話し合いが出来ない。空き部屋を調達しふりかえりの場所にしたい。

- 3/6 『災害とこころ』シンポジウム 精神病院協会主催。基調講演で震災後の『こころのケア』ボランティアの素人集団に何が出来るかと最初は冷やかな目で見られていたが、ようやく市民権を得たようであると報告される。素人は素人のよさで、話を聞いてあげる事の大切さを何回もミーティングで教えられ、活動後のふりかえりで仲間の活動を評価し、重い荷物を分担し仲間での苦しみを分かち合う事の大切さを再認識する。今後は素人のよさを最大限に生かして、物心両面の支援して行きたい。

【一言コメント】 ボランティア活動の基本は、言われたらしない。言われないからする。これが自立につながる。後ろに手をやって見守る。住宅内で起きている諸問題は、地震で起きた内容は少なくなっている。いま起きている問題は以前からの問題であり、社会構造上、超高齢化社会で起きる出来事を体験しているのがボランティアである。

- 3/7 この頃ファックスが大量に入り、ファックスに振り回される事がしばしばで、機械的に動かされてしまう。活動を選択しなければ無理の上に無理がたたって身体もこころも燃え尽きてしまう。予定がなければ情報を得るために動く。動くから出会いがある。あるから動く。悪循環である。

T地区の役員から悩みや行事について相談を受ける。何をする訳でもないがただただ話を聞くだけだ。指示も探索も推測もしない。誰にもはなし出来ず耐えられている姿を見て辛い立場を理解する。私たちボランティアは常にふれあいセンターを支えている役員の黒子的支援者。

市内の小規模団地でふれあいセンターの無い2ヶ所の仮設住宅空き部屋が利用できるように

なる。やっとの思いで交渉が成立する。これからは住民の憩いの場所として利用してもらいたい。後は、運営費の捻出方法が問題。

3/8 ワークショップ 精神衛生支援団体参加者と活動内容に大幅な違いがある。参加するにはしたが、逆にストレスがたまってしまう。この時期になると活動の為に参加するのではなく、知識を得るために参加される方がいて違和感を感じる場所もある。つぶれてしまいそうだ。

3/9 イベントでこころと身体をほぐす『ぽかぽか体操』を二ヶ所の仮設住宅です。指導者は、素晴らしいキャラクターの持ち主で、自然自然の内に身体を動かし汗をかき、消々しいこころと身体に再生してくれた。

3/11 S地区－自治会長が以前から体調の不調（ストレス）を訴えられていたがピークに達する。身体を壊しながら自治会運営され、忍び難い思いをしていたが、自分の判断で高砂の公営住宅へ転居されることになる。役員をされていなかったら、もう少し仮設におられる人であった（二次被害者）。この場所から退去したい一心で引っ越しされるようだ。

『一言コメント』 公営住宅の空き部屋に入居された。復興住宅は同じ体験をした者同志で、入居も同じ時期でコミュニティの構築も築きやすいが？空き部屋に入居された方はSOSを発信する。仲間に入りにくい・入れない・よそ者と差別される。月一度程度の頻度で電話をするとこんな言葉が返ってくる。空き部屋募集には問題があるよと皆さんに伝えたい。

3/12 ホームヘルパーの派遣要請がある。住民に行政サービスの情報が届くようになった証拠だと思う。

3/13 最後まで残っていた住宅で舗装工事が始まる。年度末工事でやっと環境整備が整う。

姫路駅前に19戸の仮設が建っているが、都心の谷間でもないが周囲の人達で知らない方がいる。利便性の良い場所で、応募者が多く39倍の申込みの中から入られた方。それでも辞退された方もいて、後日再募集で入居された方もいる。近くでありながら戸数も少なく忘れられた存在。ここだけでなく市内4ヶ所に仮設住宅があることを知らない市民が多数いる。市民の無関心しさを嘆く前に、何か知らせ方法はないか考えなければならない。

3/14 朝日新聞『復興ネットワーク』欄に記載するとインタビューを受けるが、有名な人ばかりで気後れする。記者は感性の優れた方で、すっかり載せられてしまう。『今この時』の気持ちを率直に伝えるが、載った後の反応が心配。

すたーと長田ボランティアから情報誌配付依頼があり快く引き受ける。月二回の発行で戸別訪問しながら手渡しする。手渡しする事で密度の濃い活動が出来ると思う。

『一言コメント』 姫路には長田区出身者が30%以上入居されている。お年寄りにも分かりやすいように字体が大きく毎回喜んでいただく。当初は長田区出身者だけだったが、何故配付してくれないのかと嬉しいクレームが付き、全戸配付に切り換える。何回か姫路の現状を発信させて頂いたこともある。

3/16 T地区の子どもを連れて病院へ行く。やっとの思いで今日の日になる。親が心配しているのかしてないのか理解に苦しむが、医者に見てもらうことが先決。関わり方は、専門家の指導を仰ぎながら関わればよい。

FM放送の電話インタビューを受ける。初めてのことで緊張してしまう。

3/17 南京玉すだれ 大阪からボランティアを招いてS・T地区の二ヶ所でイベントをする。大阪近郊のグループといっても堺・和歌山からの参加ボランティアも居る。西の遠隔地へ足を運んで頂き仮設住民に一時の楽しさを与えてもらった。

3/18 活動が情熱なのか、住民ニーズの把握が出来ないのか、物事を冷静に受け取れるようになったのか、距離を取れるのか、何が原因なのか燃えるものがない。活動に冷たくなったのか、撤退時期が近いのか、迷う事がしばしばある。冷静に受け止め活動進路を見極めたい。

自治会運営が順調にしていると思っていたS地区も表面上だけで内部は問題を抱えている。関わっていない人が、生活に余裕が生じると、有り余るエネルギーを運営に対しての不満不満をボランティアに投げかける。積極的に参加出来ないが、何か言いたい人だ。肯定も否定も出来ないのがボランティアの辛さ。一方の味方をすればバランスが崩れ、つぎの展開に支障が生じる。その事実を聞くことで不平不満の捌け口になればよい。

ふれあい喫茶開店準備 S地区-自治会がセンター内で取りかかる。センター運営に対する積極的な展開がスタートする。自立の妨げにならないように手を後ろに組んで見ることにする。相談されたときは相談に応じ、一步引いた支援が必要だ。

住民票が姫路市にないと障害者に対する支給支援の方法が取れない制度があり、早く行政間の調整をお願いしたい。

『一言コメント』 全盲者で杖が欲しいが、姫路市に住民票がないので支給出来ないと冷たい回答。買ったら4~5千円で済むが、金銭で片づく問題でない。強引に申込み協会から支援していただく。

3/20 T地区-役員から自治会主催の健康ランドに誘われる。団体に対しての支援要請であれば喜んで仲間に呼びかけ参加者を募るが、個人的な誘いなので断る。グループ活動と個人活動の違いをハッキリしておく。アルコール好きな方と個人面接をする。センターにビール瓶を持参してぐちぐちと周囲のこと、自分のことを話される。周囲に溶け込みたいが、溶け込めない自分に苛立ち、捌け口をボランティアに求めている。

T地区で年度末になり退去が急速に進んでいるので入居調査をする。この時期でも入居する人がある。入退居が交差する中で、築き上げたコミュニティが下り坂を加速をつけて崩壊していく。

『ふれあい文通』をしているBさん、子どもの文通が楽しくて楽しくて堪らないと話される。まだ見ぬUさんの想像画とか自分の顔を描いて送ってくれたり、歌のテープを送ってくれたりして返事を書いたり、便りの来るのが待ち遠しい。恋文を見せるように見せてくれる。『愛のキュービット役』と言ってしっかりと手を握られる。独り暮らしで子どもがいない、初めて孫ができ本当に嬉しい。明日に気持ちがつなげ、生活にメリハリがついたと言われる。『声の

郵便局』がこのような形で評価され、とてもうれしい。

S地区—主人がアルコールとシンナーによる後遺症が出ているのか、飼犬を叩きつけたり、鼻に煙草の火をつけたりして普通では考えられない行動がある。幻覚症状も出てきている。病院に行きたいが、医療費がないと相談を受ける。社会資源につなぎ相談に出席する。

- 3/23 こころのケアワークショップ 活動仲間ということで身内感覚でリラックスできた。色々なワークショップに参加した経験があるが、今日のワークは忘れられない。楽しさの中からエネルギーが湧いてくる。

【一言コメント】基調講演は『心のケアとボランティア』冊子として朝日新聞厚生文化事業団から出ている。

- 3/24 ボランティアが自主的に活動して、育っていくのが日増しに見えてくる。言われてからするのでなく積極的な発言と行動が見えてくる。

活動中に携帯電話がなり耳を傾けると、以前から訪問していた人で近々に市内の公営住宅へ転居するので一言挨拶したいので立ち寄ってと言われる。東灘区で被災され、最愛の末子を亡くされ、今も両親共身体の不調を訴えられている。自宅再建し東灘に帰ったら子どもの事を思い出すから姫路に残る。退去できることを報告したかった。支援に感謝したいと丁寧な言葉を頂き恐縮する。活動意義を感じる一時だ。いつの日か心の傷が癒され神戸に帰ってほしい。帰られたときが真のこころの復興か？。出来るだけ今後も市内に定住された方には電話でもいいからつながりを持って行きたい。ボランティアとして、引っ越しが進むとなんとはいえない気持ちに陥る。別れ上手にならないといけない。

T地区で役員改選があり投票者はたったの10数名だった。再選されたが住民の無関心さが目につく。自治会支援には限界がある。

【一言コメント】退去後の支援について考慮する時期に差しかかっている。

- 3/26 県こころのケアセンター 休暇を取って大阪の仲間と訪問する。何時も活動にいき詰まったら相談できるK先生（精神科医）にアドバイスを受ける。面接を受けるだけで問題解決できる、抱擁力と不思議な魅力がある。過去に何回も電話相談にも応じて頂いている。ここまで活動できたのは当センターの支援のお蔭だ。ボランティア仲間のあつれきについて相談に乗っていただく。行くときは俯き加減、帰りは胸を張って暗々と帰れる。

青年会議所で『震災ボランティアから学んでいること・地域に根づくボランティア』と題して講演する。風化とか、温度差という以前の問題が浮き彫りになる。城下町特有の保守的な思想……村単位では活動できるが個人レベルでは動けない体質が見えてくる。地道な奉仕活動が展開出来るか……？

【一言コメント】後方支援の多さが、団体の活力につながる。悩んだとき・苦しんだとき・迷ったときは仲間に発信し相談しながら自分の力で解決していく。電話が掛かってくることもあり、思いを共有する。たらいまわししている間に、問題が自然に解決するようだ。ネットワークの素晴らしさを味わう。

3/29 全国YWCA関係の中・高等学校のボランティア部顧問の視察団に、被災地の現状と地域型仮設住宅を案内する。起きている問題と課題を発信する。

3/30 ボランティア親睦会 常時活動している仲間（14名）が集い活動の悩み、思い、家族のこと、自分のこと等々を時間を忘れて話し込む。気がつくと、3時間も経過していた。一年前は何の繋がりもない者が、新しい出会いでここまで活動出来たことに感謝したい。

3/31 ふれあい訪問 植田南小学校の子どもたちが、春休みを利用した訪問である。大阪・神戸・姫路と一日でふれあいするのは時間的に無理が生じるが、そこは子どもで元気にこなしていく。車と食事の手配をして市内3ヶ所の仮設住宅を案内する。一ヶ所当たり20分前後では、ゆっくり話し込むところまではいかなかったが、互いに文通相手の顔合わせができ初回としては上々である。新6年生で今後は卒業までの深まりあるふれあいを期待するとともに出来る限りの協力をする。その中から何かを見つけてほしい。人によって昔くことが負担な人もいる。ボランティアは黒子に徹した支援で、あくまで主体は被災者で脇役は子どもたちだ。一年の歩みを温かく見守っていきたい。何時かは、ゆっくりとふれあいセンターで一泊してふれあいが出ることを願う。

活動仲間が4月から青年海外協力隊に参加するので大阪で送別会をする。赴任地はマレーシアで長年の念願が叶っての参加であり成果を期待したい。

S地区～Cさんが、ボランティアが無視して訪問せずに、素通りすると涙ながらに言われる。限られた人数と時間内で活動するには、自ずと限界がある。自立している人は訪問を飛ばす場合がある。活動の限界を知らされる。ボランティアが住民全員に網に掛けるだけの力もなくふるいにかけて必要な方に必要な活動をしていた。エネルギーな方から言われると本当に迷ってしまう。力の限界を感じさせられる。住宅内の金世帯をカバーする事は物理的に不可能。

一人暮らしのお年寄りが、引っ越し準備をしている。一人で暮らしたいが、元気な間に子どもと一緒に住もうと言うので息子の所へ行く事になった。気乗りしない。息子夫婦と同居した経験がなく色々考えると眠れない。トラブルと思うが互いに一歩引いて生活する事にする。自分に言い聞かせながら辛い胸のうちは明かされる。今の世情だと一言で片づけられない要因がある。

「一言コメント」引っ越しされたが一週間もたなかった。引っ越し日に嫁が顔もあわさない内に実家に帰り滞在中は、帰ってこないと言う。自分の事で夫婦仲を割くことになると思い、仮設にUターンする。仮設を返却していなかったのが不幸中の幸い。

4/1 T地区ーヘルパー派遣要請が日増しに増える。長期の仮設生活でもう限界とボランティアにSOSを発信している。日常活動は無理なので社会資源に派遣依頼する。迅速に事務処理してくれる。

またまたヘルパーの派遣要請。社会資源の有効利用か、お年寄りの張り詰めた気持が限界に達し自立出来ないとSOSの発信か。S地区ー一人暮らし老人が12世帯で重点的な訪問が必要だ。

自治会運営のふれあい喫茶がオープンし順調な滑り出しである。住民意思で開店に結び付けたことに意義がある。グループとして心ばかりの盛り花をする。元気な人はセンターに寄って食べればよし、エネルギーのない方は、ボランティアが戸別訪問でカバーすればよし。自治会が一人歩き始めた事が一番嬉しいことである。オープンする事に対して、色々と言う人も少なくない。この辺が心配材料であると共に活動場所である。

T地区の住民に家庭料理を御馳走になる。活動に対するささやかな感謝の気持ちと言われるとむげに断ることが出来ない。……これもボランティアか？

事務局経費節減のため、電話とFAXを同一回線にする。少し混乱するかもしれない。最近FAXが大量に入り情報過剰になる。選択肢を沢山頂くのは嬉しいが、選択出来にくい案件もある苦慮する。

4/2 イベント計画 仲間から積極的に持ち込まれる。仲間が企画したものは全面的に引き受ける。事務局案のイベントを常に快く引き受け協力してくれる。出てくる企画がワンパターンになり硬直している。仲間を集まろうと呼びかけると任すとと言われる。一方的な企画案が多くなっていたが、仲間から出てくる企画が一番うれしい。

新聞社の取材を何回も受ける。記者自身が納得できないと熱心にアプローチしてくる。閉口するやら感心するやら複雑な気持ちだ。

T地区-役員さんが、役員会で決定したことを文章化してほしいと依頼され協力する。役員人数が少なくなり、役員会の機能を果たしていない。住民集会に切り換えると20数名集まり積極的な発言があった。自治会を解散したことに不平不満が噴出する。責任者は対外的な顔として会長職に留まり、活動はふれあいセンター運営のみとする。生活上の問題は各人で問題解決に務める。会議結果がどんな形になろうとボランティアがとやかく言える立場ではない。自立運営されるかぎり黒子に徹して支えていくことが基本。

翻訳家の若い夫婦と話し込む。個性豊かな二人で引きつけられる魅力がある。昨年センターで開いたクリスマス会で積極的に準備を手伝ってくれ強く印象に残っている。六甲の自宅マンションは全壊。賃貸マンションならば自然環境が良く空気の美味しい姫路に住みたい。しかし、マンションの修復計画が軌道に乗ったので帰ることにする。色々ボランティアさんにしていただき本当に有り難かった。姫路への距離感を当初感じていたが、実際は40分で三ノ宮に行ける距離で便利な所だ。姫路は通過点としか考えていなかった。京都まではよく行ったが、考えてみると京都のほうが姫路より遠い事に気づいた……神戸市民の生活圏、経済圏は東である。神戸から姫路を見た時、こころの距離感は余りにも遠く感じられ、何か考えさせられる要因だ。

役員の奥さんが最近イライラして直ぐカッとなる。仕事の見通しもなく精神的に参っておられる。自治会の世話を焼いて夫婦仲まで壊れてしまうのか？最近特に落ち着きがない。人の世話はしたくなかったと切実な訴え。住民とのトラブルで我慢も限界に達している様子だ。

T地区-住民がセンターに入るなり気分がすぐれないとテーブルに当たり散らす。蹴ったり叩いたり突然の行動に住民が怯えてしまう。何が気に触ったのか、ストレスの解消方を考えてほしい。それとも病気かもしれない。

『一言コメント』 灘区の地域型仮設住宅へ活動に行った時、引っ越しされた翻訳家を訪問する。すっかり日常生活に戻り生活再建が始まっている。歓迎を受け楽しい一時を過ごす。ボランティア冥利に尽きる。

- 4/3 T地区－酒を飲んで喧嘩の耐えない夫婦が今日も喧嘩の末、玄関ガラスを壊してしまう。修理代もなく住宅管理している部署へ無理を言っ直してもらふ。アルコールが入ると夫婦とも見境がつかず近所も受け入れず孤立している。これまで何回もパトカーが入り問題処理している。ボランティアの関わりも限界がある。しかし、見捨てることなく関わりを持って行きたいが……？奥さんは、顔とか首筋に湿疹が出ている。肝臓に障害があり病院を進めるが、にきびだと言って一笑ですまされる。

会員通信に今仮設内で起きている『老人性痴呆とアルコール依存症』についてのパンフレットを配付する。問題が深刻化する中で、専門性を問われる時期に入ってきた。パンフレットを送ったからといって皆さんが理解出来る訳ではないが一度目を通してもらい、機会を作り勉強会をしたい。

- 4/5 花祭りに参加 長田ボランティアグループの招待。ポスター掲示とチラシ配付でエネルギーを費やす。市内仮設には長田区出身者が30数%いるからすぐ大型バスが一杯になると、たかをくくっていたが、参加者が少なくバスを用意してくれるボランティアに申し訳なく思い参加を呼びかける。前日にやっと一杯になる。引き受け時は、参加者の顔を浮かばせながら頑張るが、思うように行かないのが常でイライラする。如何なるイベントも自治会には負担をかけないように心掛けている。

- 4/6 天気はまずまずで、寒さもほころび絶好の行楽日和である。参加者も42名で満員。仮設内行事には一度も参加したことない人、神戸に一度も帰ったことがない人、菅原市場の復興状況を一度見たいと参加された方、街の復興を確かめたいと参加された方、それぞれの思いで参加された。神戸に近づくとも私たちに長田の街を自慢げに説明。避難所での出来事も過去の出来事と言われる人もいる。時間経過と共に徐々に癒されていくのだろうか。障害手帳1級の人を手を引き、美味しい所があると強引な食事にお誘い。焼け野原になっている住み慣れた街の自慢話。住み慣れた街に一步踏み入れると、人が変わったように動かれる。こんなに素晴らしい笑顔を見たことがない！苦勞して参加者を募ったがその苦勞も吹っ飛ぶ。招待してくれた兵庫商会の社長に感謝すると共に被災者の一日も早い恒久住宅への入居を願う。

水軍太鼓を聞き『志気が高揚した！』明日の望みも湧くと感想を伝えてくれる住民もいらした。

ボランティアの残留組は戸別訪問する。訪問しても何時も義理で5分程相手していた人が、今日は『一寸上がって明日お花見に着ていく洋服を見て』と手を引っ張るようにして部屋の中に入れてくれた。時間を忘れ写真を見せてくれたり、息子さん娘さんの話を始めてしてくれたと仲間からFAXが入る。戸別訪問を待ってくれる人で、一週間ぶりに話が出来たと嬉しく話される。テレビと独り言を話す事がある。貴方たちの訪問が待ち遠しいと言今日は添えてもらい、行ってよかったとコメントが入る。

4/7 入居調査 T・S地区－退去者か、長期不在者か、物置代わりに使っているのか、ガスメーター・電気メーター・水道メーター等で確認する。入居者でも光熱費が支払い出来ず停止されている世帯もあり、調査しても正確な数字ではない。入居調査は、孤独死を出さない為の基本的な調査であり、地道な調査の中から悲劇が起きないようにしたい。

Tさんが、年金が入るまでお金を貸して欲しいと言ってくる。お金を持ち合わせていないと伝えるが、今夜食べる物がないと泣きつかれ1000円だけ貸す。小額でないと互いに気まづくなるし、仲間に金銭の貸借は厳禁しているので貸すことには抵抗がある。危機介入と言いつつ聞かせ貸す。久しぶりだ。

昨日「花祭り」に参加した人が、感謝の気持ちを伝えたいと食事に誘われる。快く食堂に行く。食事しながら今は障害手帳1級の身だが、昔は情報新聞を発行していた。その関係で県庁にもよく出入りしていた。当時の出来事を鮮明に話される。何時も人を尊敬し、人をけなすような事はけしてしなかった。話しながら元気な時と今をラップさせ、無口な人が目頭を抑え抑えながら、こみ上げてくる感情を抑え切れず自分の過去を話される。一気に信頼関係が出来上がる。気疲れしたイベントだったが、早速このような形で評価してくれ感激。

4/8 T地区－役員から相談したいことがあると電話が入る。昨日4時頃Aさんがセンター内に入ってくるなり何故自治会を潰したと罵声を浴びせた。怒鳴り返したが、気分がすぐれずムシクシクする。話を聞いてくれと連絡が入り、昼食を取りながら話を聞く。思い切り喋り、スッキリしたと言って帰っていかれる。心を込めて傾聴する事はエネルギーがいる。

イベントの度に写真を取ってプレゼントする。仮設生活の思い出になればと思う気持ちである。今日もお雛祭りの写真を渡すと大事そうに抱えて感謝される。

芦屋市で仮設住宅の撤去作業が始まる。ニュースを見た人が動揺している。住宅問題は敏感に反応される。

遠隔地ボランティア（大阪）から電話が入る。活動上の相談である。自治会とボランティアとの関わり方で、会長にいちいち挨拶が必要なのかどうか尋ねられる。了解を取らなくても活動できるが、できるだけ穏便に、出来ることなら挨拶くらいはすべきだと伝える。この頃各仮設住宅でボランティアと自治会のトラブルが生じている。援護者と要援護者の立場の違いを理解して、活動しているのか首を傾げたくなる団体もある。受入れ側の自治会も震災・避難所当時の活動をいまだに期待している所もある。被災者心理も変化し住民ニーズも刻々と変化している。この事を捉えてないとボランティアがビエロになる。

『一言コメント』 自治会運営に難儀しているが何も手伝い出来ない。主流派・反主流派とハッキリ区別され修復の出来ない状態に追い込まれている。このままでもよいから一年持ちこたえて。極論だが、ふれあいセンター開所からコミュニティの崩壊が進んだ。ふれあいでなく一部の独占センターになってしまった。

4/10 T地区－仮設住宅内に小さな虫が異常発生している、確認してほしいと連絡がある。神戸では見かけない虫（ウンカ）だ。自然環境の違いで神戸の街中では見られない動物・植物がいる。当初はカエルの鳴き声で寝れないと言われていた人も、今は心地よい音色だと言われて

いる。一年も立つと自然環境に慣れられる。

復興ネットワークに活動記事が掲載される。余りの反響にびっくりする。活動の励みになると同時に課題も投げかけられた。

早速研修会の依頼があったり、姫路へ訪問したいと数団体からアプローチされる。たいした事をしていないのに、このように掲載されると戸惑ってしまう。後は自分の責任で活動するしかない。

4/12 研修会 大阪YWCAで県こころのケアセンターの加藤先生が講師。

研修会の内容は下記の通りである。

- ①関わりの濃淡の取り方。
- ②何処までがボランティア活動なのか。
- ③活動後のふりかえりの持ち方。
- ④ボランティアの守秘義務について。
- ⑤全体ミーティングの取り方について。
- ⑥研修会について。
- ⑦ボランティアと自治会との関わり方。

等々活動している中で出てくる問題点は山ほど出てくる。どれを取っても回答出来るものはない。各人がそれぞれの思いで解決策を捜してほしい。仮設での生活が一年過ぎ問題が深刻化している。

生活困窮者からSOSが出て社会資源に繋ぐ、支給決定を受けたとお礼の電話が入る。つなぎをかけたただけなのに……。

4/13 M地区-久しぶりなので『元気』と言われてしまう。継続活動しているが、抜けている所がありこのような言葉が帰ってくる。一軒一軒丁寧な訪問が必要、訪問先の方から復興住宅の事を毎日考えていると、成り行きに任すより仕方がないと分かっているけども深刻に考えてしまう。仮設に取り残されないか、この身体（リュウマチ）で入居出来る所があるかと考えれば考えるほど追い込まれてしまうと訴えられる。出来る範囲で訪問して行きたい。

以前から気になっていた人（70才女性）と会うなり機関銃のように話しがはじまる。話していることが理解できない。支離滅裂で何を言っているのか分からない。寝付きはよいが夜半に目を覚ますと寝つけない。地震後何も旨く行かない。何かに取りつかれている。心が締めつけられる。家族とか近所の話をされるが要領がえない。近所の人に聞くと徘徊が始まり痴呆症ではないかと言われる。ボランティアでは関われない問題ではないので、家族につなぐ。

4/14 『手品と紙芝居・歌の会』イベント T地区-食べるイベントからこころをほぐすイベントに方向転換する時期に差しかかっている。今回の参加者は35名で通常より少ない。援護者と要援護者が一体になったイベントで満足感を味わう。声を出すことでストレスの発散ができ、童謡を歌うことで過去の楽しさを思い出し、笑うことで楽しみを思い出す。楽しいイベントでした。

4/15 サラ金 年金生活者がお金を借りどうにも生活出来ないと言われる。利息が法定利息か確認するが、法定以下でどうにもならない。元本は増えないが、減ることもない。年金額は二十万円/2ヶ月で借金返済額は十五万円で残りの五万円で2ヶ月生活している。生活出来ない

から、元本が増えない範囲でまた借りる。この繰り返しで一向に生活が楽にならない。地震時やけっぱちになり思い切り借金した。今日まで生きておれるのならあんな事すべきでなかったと話される。チョコチョコ生活に困った時に二〜三千円貸してと言われていた。つなぎと思って貸す事にする。律儀な方で期日には返してくれる。六十四才だが十才以上老けてみえる。苦勞が絶えないようだ。年金を担保にお金を貸すことは出来ないが貸している人がいる。

退去後、入居権利を又貸しして家賃を取っている人がいるから、神戸市に確認してくれと頼まれ実態調査するがその事実は無かった。しかしそれらしい人が入っている。いろんな事が起きてくる。

S地区――一人暮らし老人が、一ヵ月ぶりに退院される。地震後ヘルスメーカーを入れた人で、仮設住宅で倒れ、隣人が異常音を聞きつけ緊急入院した人である。平素から肉親以上の付き合いでまさに危機介入であった。若しコミュニティーがなく無関心な人であれば大事に至っていた。隣のいびきが聞こえプライバシーがないと不平不満を言われる人もいるが、こんなプラス面もある。

子どもの所へ引っ越し予定だが、引っ越し日が近づくに連れ憂鬱になる。今まで気楽に暮らしていたので、同居する事が心配で心配で寝ることも出来ない。落ち込みが激しい。食事の味付け、生活のテンポ、生活環境等々の違いを思うとストレスが溜まり不眠症になると涙ながらに話される。同居がこれほど大変とは……。孫と一緒に恒久住宅で生活できる楽しさより、悲慘な方がおおいとは……。

- 4/16 S地区～女性。家の解体に立ち会ったが、隣と境界が決まらずつついっつい大声を出し、疲れてしまった。解体作業がこの時期まで残っているとはまだまだ復旧が続いている。更地になり復興が始まるのは何時の日か？

Bさん真面目に仕事に行っている。名古屋の子どもたちの訪問時に撮った写真を送ってくれたと顔をくしゃくしゃにして喜びを伝えてくれる。新しい出会いを作ってくれて有り難いと、涙を出しながら話される。離婚して別れた子どもと文通相手とオーバーラップしている。再会出来ないと分かっているとお正月にはポチ袋を用意すると寂しく話される。訪問すると何時も一時間ほど滞在する。切り上げようとするとは何時も寂しいから、もう少し居てと手を引かれ別れづらい。

- 4/17 医療費免除切れ 加療通院の必要な人が、治療費が払えないと病院にいけない。病魔に見舞われ日増しに悪化している。ボランティアの非力を嘆きながら、マスコミに訴えていたら今日の朝刊一面に記載されていた。甘いのが赤髭先生の出現を待つ。活動で知りえたものを発信していくのもボランティアの務めと壊れた審音機のように訴えていたことが形となって表れる。記事になっただけではどうにもならないが……。

公的支援とか公的補償について諸団体から問い合わせがある。私たちの活動は社会運動に馴染まないし、そんなエネルギーもない。巻き込まれないようにしたい。いろんな所からFAXが入り、集会等の誘いがある。初心を忘れず地道に活動していきたい。

大阪で聞かれる連続講座『人間関係・人間理解について』に毎週一回出ていくことにする。当たり前のことが当たり前に出来ない世の中で、ボランティアとして今、何が出来るかふり

かえりをしたい。自分への気づきが出来れば他者に対する気づきも自然に生まれて来ると思う。半年間仕事が終わったあとに行くことは並大抵の事ではないが、好きなことは頑張れると思う。

4/20 T地区・思いで作りの写真を戸別訪問しながら写して行く。辛い仮設生活で何か一つでも思い出を記録として残し写真をプレゼントしてきた。イベントに出れない人には出向いて撮ることにする。被害の大小に関わらず思い出の写真は残っていない。レンズの中から見える一人ひとりの素晴らしい笑顔を見つめながらシャッターを押していく。何時出来上がると矢の催促をされる人もいる。写真一枚で繋がりが生まれてくる。

ポートアイランド第6仮設リサーチ ポートライナーを下り防潮堤の間を抜けると仮設住宅が建っていた。足を踏み入れるなりガーンと頭を打たれる思いだ。神戸市内の仮設住宅は環境整備もいき届き何不自由なしの生活と思っていた。この環境では姫路の方がいい。通路は未舗装で、頭ぐらいの石ころがごろごろ転んでいる。部屋から出るには落差があり、数段の階段が必要である。冬になれば吹きさらしの風が吹き、埃が舞い上がる。厳しい環境で言語化出来ない。さいの河原に住宅が建っていると私には思えた。砂漠の中の街でなく、街の中の砂漠である。自然環境も厳しく寒暖は身に沁みる。姫路の遠隔地を忘れないでと発信し続けてきたが、これまでの発信は何だったのかと頭が真っ白になる。ポーアイと六甲アイランド仮設に空き部屋があったが、姫路に来たと書いた人の気持ちがやっと理解できた。都心に出ていくにも便利な場所で、何で人気のない仮設なのか分かった。今日の調査を今後に生かしたい。

1Kの仮設住宅を見る、やはり狭い。一人暮らしでないと生活出来ない。

生田体育館の避難所で関わっていた人が入居しているので訪問する。引っ越し後御主人が亡くなり、落ち込まれていたが今はすっかり立ち直り、一日いちにち元気で過ごせることに感謝している、と前向きな話が聴ける。久しぶりの再会で話に花が咲く。転居先まで訪問して関わりを持てればいいが、活動には自ずと限界がある。個人支援になって行くので特別な事情がないかぎり関わりを持たない。

自転車事故 C地区の住民が自転車で買い物に行く途中にお年寄りと接触して転倒させてしまった。対応方法が分からないから相談に乗ってと連絡が入る。事実関係を確かめた後、相手方に詫言を入れたいが何も分からない所で一人で行けない、代理で行ってほしいと頼まれ出向く。少しの打撲で大変に至っていなかった。心配りが嬉しい気にしないでと相手から言われ一安心する。仮設住宅にいと肩身の狭い思いをして相手先に出向いていく気持ちになれず申し訳なかったと感謝される。仮設で主人を亡くされ、落ち込みが激しかったがやっと立ち直りの気配がある。その中での事故で対応が分からなかった。何でもない様なことでも、物事を敏感に受け取り追い込まれて行く。相手の立場に立って『もの』作業をして行きたい。『賢方との出会いがないと今日まで生きてこれなかった』と最大限の言葉を頂く。仮設内の生活が以前と比較して、しにくい。各人の生活がそれなりに安定し、余裕が出来ると周囲が見渡せるようになり、人の噂と悪口が住宅内を走り回る。挙げ句の果ては苛めが始まる。前向きな話が見えず辛いと話される。

『一言コメント』 生ゴミを他人の洗濯機の上に置いたりする嫌がらせがある。被害を受ける方にも問題があるが……。警察署名で警告書を掲示する。

4/21 ボランティアの真価を問われる時期 T地区の男性が仕事もなくぶらぶらしている。もうすぐ失業保険が切れ食べていけないので警備会社に行くと言ってくる。ぶらぶらしていた時とは人違いするほど顔だちが変わっている。引き締まった顔、自信に満ちた顔、素敵な笑顔、仕事につける様になると人まで変わる。仕事に行き少しく貯金し引っ越しに備えたい。こんな素敵な顔を見たことがなかった。

大柄な男性が、部屋を開けっ放し、テレビ、ステレオをボリューム一杯に上げるさくされる。それと深夜に酒を飲んで壁を叩いたり、しこを踏むと苦情が出ている。普通に歩いても体重があるので、仮設では音がして周囲に迷惑をかける。四六時中騒音を出し周囲の者が迷惑し、これが原因で引っ越しされた人もいる。社会適応のない人で、経済的にも緊迫し、内臓疾患もある。他者は大きな身体をしてぶらぶらしている怠け者と言っているがそれなりの原因がある。体調が回復するまで社会資源につなぎ、身体が回復したら仕事に就くと言われている。温かく見守っていききたい。部屋に入ると飲みたい酒も辛抱して瓶に目盛りをつけセーブしている。自分の生活はしっかり見つめている。

それ以後もトラブルが絶えず、体調も回復し神戸に仕事を求め出て行かれる。馴染めない人、受け入れられない人様々である。共生の時代とは……わからない。

早く神戸に帰りたいと言われる人が、ボランティアに対して不満を話される。……ボランティアが、自治会の足を引っ張るような事を言っている、上から見下ろしている。同じ目線で活動していない。物さえ与えたら喜んでいと錯覚しているボランティアがいる。恵んでやっていると思われ態度に閉口する。言われて見ると心当たりのグループもある。活動内容は住民ニーズに対応して変化する必要があり、同じパターンの繰り返しでは成長が望めない。私たちグループにも言い聞かせながら反省材料にしたい。仮設の変化に対応し、活動内容を変化させることはエネルギーがいる。

80才のお祖父さんが、貴方たちの活動に常々感謝している。どんな気持ちで活動されているのか引っ越しする前に、一度話を聞きたかったと引き止められる。誰の為にもしていない、自分の為で活動している。地震を体験していない私たちに出来ることは是くらいしかない。自然に身体が動いてくる。是が基本的な姿勢ですと伝える。理解できない、理解しにくいと言われながらも、仮設でお世話になったことは一生忘れることはない。思い出を何時までも持ち続けたいと……感謝を忘れませんと丁寧な言葉をいただき恐縮する。

T地区・Dさん(女性)と話することが出来た。定期的に訪問していたが、やっと水面下から声がかかってきた。やっと報われた、やっと声を覚えてくれたと飛び跳ねたいぐらい嬉しい。(こころ閉ざされた人) 玄関先の立ち話であるが……紅茶まで入れてくれた。閉ざされた気持ちが急転直下これほどまでこころを開かれるとは、……永い間水面下でもがいておられたが、頭を上げてこられた(嬉しい一瞬である)。親から「人に迷惑かけるような生活をするな」と言われて生きてきたが……こんなに私のことを心配してくれ有り難い。人と避けて生活していた。ここを退去したときは、私もボランティアをしてお返ししたいと話される。

ふれあいセンターで拾った一言 これまで神戸に帰りたい、帰りたいと思って月一回は帰っていたが、今は帰ることが苦痛である。帰れる見込みがないと思うと帰りたくない。意外なことばである。月日の経過と共に気持ちの変化が生じ大きなうねりが生じている。慌てず

ユックリ見守りたい。

隣人が掃除する時、筒先を何回も壁に当て嫌がらせをする。隣の人をその手で追い出した。私は出て行く所がない。半抱するにも限界がある。一度怒鳴りに行った後は、暫くのあいだ静かにしてくれていた。相手は神経質そうな女性で戸別訪問した時かまってくれるなぁと言われたことが一度ある（トラブルに巻き込まれたくないが、双方の話を聞き、何とかしたい）

今日は色々な事があった。元気づけられたり、解決出来ないこともあった。問題解決するのではなく、自分たちが出来ること、自分たちの出来ることだけと思えば肩の荷が軽くなり、気持ちも楽だ。

4/22 火販のスタッフ会議に出席する。専門家に話すだけで気持ちのもやもやが吹っ飛んでしまう。不思議な包容力である。仕事が終わった後、出向いていく魅力はそんなところかなあ…それだけに無理をしがちになるので健康管理には気をつけなければならない。

4/23 『震災後のPTSDとボランティア活動について』 県こころのケアセンターの加藤先生を招き勉強会をする。活動も一年経過し、それぞれがそれぞれの課題を持って活動しているが、今一度立ち止まって活動を見直す必要があり今日の日になる。各人の悩み・今後の活動について真剣に話し合う。結論的には、自分に過信せず、自分の出来る範囲で気長にボチボチやっていくことだと落ちつく。燃え尽きないようにしたい。

S地区ー以前近所の人が食べるものがないとお金を借りに来た。断ろうとしたが怖かったので貸した。返してくれないと思っていたが、先日返してくれた。一時でも人を疑い悪いことをしたと電話が入る。いじめられていると頻繁に電話を掛けて来る人であるが何か変化が生じている（これ以後苛められていると嘆きの電話は掛かってこなくなる）

4/24 『自立について』 継続調査を住民にお願いする。対象者が40軒であったが、数軒引越えされている。

水俣病の公害に携わった谷洋一さんの勉強会に出席。

これを機会に活動をふりかえる。

①自分がつぶれない活動をする。自分を大切にする。

②被災者との距離をどの様にとっていくか、つかず離れず親密感を取っていく。

距離感の取り方は各人の力量で様々。

③親密になりすぎると自立を妨げる。

いるのかいないのか分からない様な存在でいい（空気の様な存在）

④そこに居ると言うことだけでよい。

存在感が強すぎると自立を妨げる。

自立支援とは難しい。活動の中から、各人のスタイルを見つけ出さなければならない。活動にはマニュアルがない。ないところに不思議な魅力が存在する。継続調査を住民にお願いする。

4/26 事例研修会 ボランティアシンポジウムの事例を参加者に練ってもらう。プライバシーに関わることなので慎重に取り扱う事にする。

活動報告の中で、在宅で老人性痴呆に関わっている人への関わり方についての報告が心に残る。その人に関わるのではなく、家族の苦勞を聞かせていただき、看病疲れの辛さ、誰に

も言えない悩みを聞かせていただくと言うことではないかと話された。活動の中から出てきた言葉には重みがある。若い人の中で活動にのめりこんでしまう人がいる。僕が一生このおばあちゃんの面倒を見ると言っている若者がいる。情熱は買うが……彼の将来はどうなるのか……。グループワークの中で、のめり込まないように訪問メンバーを変える事でもある。被災者との距離感を持つことも大切……。活動を見極めるコーディネーターが必要で質を問われる。色々と考えさせられる問題が出てくる。活動を引き上げる勇気も必要だ。活動するときよりも撤退するときが大切なんだろう。

関学A教授が、姫路ロータリーに活動助成をお願いしたらバックアップしてやるの口車に乗って、時間を割いて企画書を提出した。しかし、なしのつぶしで大ショック。自分たちで苦労して開拓しないかぎり道は開かない。活動助成金申請には相手を決めてないと骨折り損になる。

4/27 世間は連休に入り浮かれているが、仮設住宅内は別世界。仕事も休めず行楽に行く人も少数。

4/28 筑波大学院生調査 一人暮らしの寂しさからか話に花が咲いて開放させてくれない。一人で食事すると美味しくない、是非一緒に誘われ訪問する人ごとに時間を費やし思ったように調査が進まない。

室内楽コンサート S地区-童謡・唱歌を声を出して歌う。久しぶりに声を出して歌えた。昔を思い出し涙が出た。35名も参加して大成功。アマチュアバンドの皆さんも何かしたいと思いつきながら機会に恵まれなかった。こんな素晴らしい機会を作ってくれ感謝するとボランティアの皆さんからも有り難い言葉を頂く。活動場所のないボランティアを掘り起こす事も素敵な活動。神戸のA団体からT地区で百匹の鯉を泳がせないと誘われる。素晴らしい事だが時間的に無理があり断る。2ヶ所のふれあいセンターには竿を建てて泳がすことにする。設置していたらどなたかが手伝ってくれる。後から聞くと県民局長だった。ありがとうございました。

4/30 大学院生調査表回収と戸別訪問聞き取り調査 自治会活動に対する不満がくすぶっている。表面上はうまく行っているように見えるが、それぞれの思いをボランティアに吐いてくる。はけ口を求め、ストレスが解消されるのであれば聞き役に回る。

調査のお伴も4日間となれば疲労もピーク。こちらの思いで動くことは出来ず、朝早くから夜遅くまで付き合うと身体も心も芯から疲れてしまう。……肩が凝ったのか歯茎が腫れ上がり、2~3日歯が痛い。家内もストレスがたまっている。

朝方の雨と鯉のぼりの重みで竿が折れる。ボールの準備が出来次第再度泳がすことにする。元気よく大空高く泳ぐことで住民のこころが少しでも和らいだらと再度準備に取りかかる。

5/1 電話相談も多種多様 S地区-住民から住民間のトラブルに巻き込まれると電話が入る。昨日神戸へ出掛けようと表に出ると皆さんが、草引きされていた。出ていくことが出来ず取り止めて草引きをする（早く知らしてほしい、連絡してほしい）草引きした跡、我が家の前に花を植えるが、これも気にいらないとわれ引き抜いてしまった。大人げない事をしたが、感情的に動いてしまった。この事が尾を引かなければよいが心配され相談される。積極的に傾聴する。自宅再建されているので今しばらくの辛抱。辛抱する事と自我を出来るだけ出

きないように自分に言い聞かせると電話を切られる。

- 5/3 連休 家にゴロゴロして身を持て余している人が目につく。休みで行き場所がないと、アルコール依存症の人が、ビールをラッパ飲みしている。警備会社に行っているが、こんな状態では使うにも限界だと会社の責任者が言っている。何とかしたいが、同じ事の繰り返し。住宅内の飲み友達を誘い大量に飲酒、生活状態は加速をつけて下り坂を下っている。ボランティアの関わりも限界。フル回転で活動したので疲れがピーク、疲れているが身体が自然に仮設に向いてしまう。疲れた顔で活動している間はいいが、疲れているのに作った笑顔で出向くことは相手に失礼先番と思い、疲れた時は早々に引き上げることにした。訪問家庭の軒先でビールをもらい、から元気が出る。アルコールで身体をコントロールしている節もある。仲間はアルコール依存症と冗談を言ってからかう。それほどビールを手にする事が多い。仲間の温かい忠告か。肝に銘じて活動をセーブしたい。

- 5/4 ボランティアとイベント 自治会主催のイベント費を頼まれ、一時立替えたがなかなか払ってくれない。後日厭味を言われながら払ってもらう。今後は一切立て替えはしないと同時に自治会主催のイベントには関わりたくない。うまく行っている時はいいが、行かなくなった時の反動が余りにも大きい。

他ボランティアグループと自治会間のトラブルに巻き込まれそうになる。準備を自治会任せでイベント計画し、その下準備を自治会から依頼されたので、協力出来ないと言えたと感情むき出しで罵声を浴びせられる。ボランティアは出来ないことは計画しない。背伸びせずできる範囲の活動が原点である。私たちグループは何でもこなせると便利屋のように依頼されるが、どんなイベントでも自主運営で十分な準備のもとで実施する。ボランティアの自立が必要だ。

神戸のボランティア団体へ講演に行く。対象は高校生から30歳までの年齢層で、連休を利用して神戸にきた人である。話に引き込もうとゲーム感覚で何枚かカードを用意し、引き抜いたカードを題材で話を進める。カードは、・孤独死・燃え尽き症候群・ボランティア間のトラブル・夫婦の絆・対象喪失・アルコール依存症と女性・自治会とボランティア・赤ちゃん返り・住民が求めているものは？・自立支援・老人の痴呆等々のカードを引く。今被災地で起きている課題と問題で皆さんと共に話し合っていく。どれ一つとして解決策はない。ボランティアが行き詰まっている問題もある。

- 5/5 パトカーが出動 T地区一隣人同志がトラぶる。以前もあり今回で2度目だ。体内時計が昼と夜が逆転して、一寸したことも許せない程極限に追い込まれお互いが敏感になっている。制服を着た警察官が頭ごなしにガンガン権力を振りまいても何ら解決しない。あげくの果ては、ボランティアにお願いすると押しつけられる。ボランティアは行政の補完をしているのではない。頼まれたらしない。頼まれないから活動する。この考え方間違っている。

- 5/7 ふれあい交番 情報収集の為にボランティアに近寄ってくるが、断ったと仲間から連絡が入る。早急な情報収集には無理が生じる。自分の足と目で確かめて欲しい。仲間内でも活動の中から知り得た情報は、個人情報で基本的には共有しない。戸別訪問に同伴したり、ふりかえりに参加したいとボランティア部屋まで押しかけられ迷惑千万だ。『連携』とは情報の交換ではない、仲良く活動する事。

社協のボランティアネットワーク会議 相変わらず自治会役員批判が話題になる。情報交換ならばよいが、中傷的な話は聴きたくない、したくない。前向きな事であれば協議の輪に入っていけるが、役員の個人攻撃はしたくない。共同話題も薄く、会議内容は四カ所ある内の一ヶ所（T地区）だけが対象で、これではネットワークにならない。参加する魅力も意義もなくなっている。

S地区ー『ふれあい喫茶』をしていたグループが4月一杯で引き上げる。ご苦労さんでした。引き際のタイミングの良さに敬服する。初期の目的を達し勇気ある撤退。私達の活動は最後尾を走るボランティアと思いつつ引き際のタイミングを念頭におき活動したい。

T地区ーで役員慰労と引越し者のお別れもかね、食事会をする。激動の一年で言葉に言い表すことのできない辛さ（住民は、地獄のT地区と呼んでいる）を体験された。役員も住民ボランティアで同じ仲間。組織が軌道に乗ってくると、行政が窓口として自治会を利用する。ここに問題があり、情報が加重になり、役員しているから仕事につけない人もいる。何か変だ。

- 5/8 体調が思わしくない。バーンアウトかもしれない。連休中フル回転で朝早くから夜遅くまで調査活動したことが、今になって出てきている。

仮設住宅入居者実態調査の結果が発表される。遠隔地仮設と全体では大きな違いがある。これまでの調査を整理し比較したい。

日常的に活動していると退職後のライフワークですかと尋ねられる。仕事後活動することは特異なケースなのか。被災当時を思うと自然に身体が動く。

ふれあいセンター横にイベント用の洗い場設置をお願いしている。何時やってくれるのかと矢の催促をされる。つなぎ役なのに……担当部署に連絡し早急な対応を再度お願いする。

戸別訪問家庭で赤ちゃんの鳴き声が嫌だと言われる。おんぶして活動しているお母さんに訪問を変更するように伝える。彼女は結婚歴はあるが、子供が出来ず離婚されている。鳴き声を聞くと血圧が急上昇すると言われたので中止する。

病院帰りのSさん（89歳）と玄関口で会う。神戸に月2回程度行っていたが、交通費が嵩むので月1回に変え、薬を一ヵ月分貰うようにした。歳を取るとかかりつけの病院でないと安心して診てもらえない。交通費が嵩むので、近くの医者に変わったと言われるが、ホームドクターを今更変える事はできない。長年築き上げた信頼関係を簡単に変えることは出来ない。

『一言コメント』 それ以後、身体も気力も衰えやむにやまれず病院を変えられる。

- 5/11 ボランティアシンポジウム 鷹取中学校ー『こころのケア』ブースを準備する。参加人数を心配していたが、想像以上の参加者（34名）があり大成功。

事例研修形式でフリートークする。

ボランティアが関われる範囲・できる範囲について話し合う。

- ①問題を自分で取り込まないで相談できる仲間を作る。（ふりかえりの無いボランティア団体もある）

ボランティアが問題を取り込まない。そのために活動をふりかえり、活動を評価する。活

動には個人差があり、その人の良さを引き出す。

②専門家にアドバイスを受けたい。(スーパーバイズを希望される)

ボランティアが専門家にはなれない。だから専門家がボランティアのレベルまで下がってもらう。現に専門家がボランティアの立場でアドバイスをしているグループがある。

③素人は素人の良さで活動すること。

④ボランティアと社会資源との繋ぎ方・関わり方。

社会資源と連携を取る。情報を伝達する。しかし、結果は求めない(行政には守秘義務がある)

活動の中から顔の見える関係が出来上がる。

活動の検証と今後の課題が渦のように出てきた。各グループとも手さぐりの活動で、課題の多さに改めて驚く。月一回の勉強会に誘い、緩やかなネットワークに育って行けば今日の目的は達成される。

5/12 丁地区-男性(20才)「イベントを見て何時も思う。乞食でないし哀れな思いまでして参加しない。住民も何時まで甘えているのか、食べたあと有り難うと一言も言えない人もいる。食べたらずきで後片付けもしないで帰ってしまう。当然の様に思っている。以前は下町で過ごし水回りは共同、洗濯物さえ干す場所がない人が、何が仮設の環境が悪い。感謝しなければ罰が当たる。あんたらもいい加減にしろよ」とストレートに話される。実態はその通り。今後の活動に一石を投げ込まれる。自立支援について再度考えてみたい。

5/13 身体の不調を訴え生活保護申請をしている。指定の病院へ行ったが結果がまだ出ていない。体格がよく周囲の人は外観だけを見て判断してしまう。気持ちも追い込まれ、貯金も底づいた。飲みたいお酒も、瓶に目盛りをして飲んでいる。目盛り以上飲めないと自分に言い聞かせながら飲む酒は美味しくない。一度思い切り飲んでみたいと涙ながらに話される。周囲と付き合いがないが私達にはこころを開いて何でも相談してくる。早く結果が出て身体が良くなれば仕事に付ける人なので、その時まで生保で繋いでほしい。

震災後姫路の社宅に居た方が、契約が一年で切れたので仮設に入居される人がいる。最近も入居されやっと落ちついた生活が出来だした。主人も通勤(神戸)で疲れるが、休日には貴方たちからもらった花を見て綺麗だと言ってくれた。余裕がなければ、当たり前なのが当たり前と言えない・見えない、やっと外に出て水もやってくれるようになったここへ来てよかったと女性(50歳)談。

「一言コメント」 肝臓障害があり数カ月間通院した後、体調が回復し仕事(神戸)に就かれる。人は外観だけで判断すべきでない。先入観・固定観念を持たない活動が必要である。

5/14 生活保護受給者増加傾向 仮設全体で45世帯ある。就労機会もなく、経済的にも緊迫しつつある。今後も戸別訪問の中から二次被害だけは出たくない。

ふれあい交番から人を介して連絡があり、是非会ってほしい人がいるので会ってほしいとのこと。

結果は振り回される用件であった。

- 5/15 社会資源と情報交換。活動を認められたのか、利用されているのか。情報収集が主だったので利用されていることになる。知り得たものを発信することは活動の一環で、快く引き受ける。

S地区ー担当民生・児童委員が一身上の都合で辞職される。活動当初から連携を取った人で、こんな形で辞められるとは……、仮設と自宅の距離が近く公私混同状態になってしまった事も原因の一つだと思う。人の民生・児童委員を支えることも出来ず、何が出来るかと自問自答する。猛反省すべきことがたまたある。仮設住民も個人的な中傷はしてほしくなかった。

- 5/16 神戸市に障害者対応の『手すり』設置をお願いする。事務手続きが行き届きにくい。

ケースワーカーが仮設担当者会議があると情報収集される。仮設で起きている事実を率直に伝える。行政も各仮設住宅で何が起きているのか躍起になっている。今は、ボランティアが行政の補完的役割をしている状態。

マスコミ関係者がT地区で起きた事件について情報を教えてと電話がかかる。意地悪・嫌がらせ等々について色々掴んでいるが、ボランティアの口から言えない。明るい話題は提供できると言葉を濁す。

- 5/17 他ボランティアのミーティング 有給休暇を取ってに出席する。

定期的にミーティングを開くグループであるが、期間があき各ボランティアのストレスが爆発する。活動後のふりかえりも最近はしないで流れ解散になっている。ストレスが溜まり発言内容も過激で、場が白けてしまう場面もある。「……団体の活動理念』『活動の範囲』について有耶無耶にせずハッキリしてほしいと発言される人もいる。長期の関わりで、情性になりマイナス面が出ている所もある。団体として拘束したり、活動の基準はない。あるとすればボランティアの活動場所の提供と活動に相応した活動費（交通費）・スーパーバイザーの確保と研修会の提供と思う。グループワークの中で各人が責任を持つ自由な活動である。しかし自由には責任が伴う事を忘れないで欲しい。

継続活動が出来る団体であり、スタッフにも恵まれた団体と思う。活動が落ちつくと、いろんな思いの人が活動に参加し秩序を乱す行動もある。しかしそれが組織の活性化にもつながる。活動に対して「何を求める訳でもない、返ってくる評価を求める訳でもない、活動していることに意義を求める。あえていえば自分自身の成長への喜びかと思う」これは結果であって過程ではないと参加者に話す。

グループの存続は、優れたコーディネーターが必要で、後方支援のみになると現場の声が見えなくなる可能性がある。意思の疎通を図るためには、常に交流が必要。組織だった団体であっても今回の被災者支援活動は未知の世界で活動自体の存続を問われる時期に来ている。

帰宅後、ボランティアから電話相談がある。熱心さ故本音の話し合いが出来たようだ。後は互いに受け入れ、ゆるし合う事だと思う。

- 5/18 S地区ーふれあい喫茶運営方法について不平不満をボランティアに向けられる。運営費とかコーヒーの出し方が前後するとか、女性の役員は直ぐ感情を出すとか、訪問を待ち構えて堰を切ったように話される。気持ちに添って聞かせていただいただけしか出来ない。

女性のAさん、あの時（引っ越した去年の6月頃）は皆支えあっていた。お互いを認めながら……。今は強いものが支配する。助け合いの気持ちが見えない。生活が落ちついてく

ると周囲が見渡せ自我が出てくるのも仕方ない。分かっている相手にはそれが言えない。

- 5/19 T地区-未入居住宅に今も入居者がある。遅く入った方は、コミュニティに入れないのが現実で、そのような人を重点的に戸別訪問する。橋渡しが少しでも出来ればと思うが早急なお誘いは出来ない。時間をかけてゆっくり解きほぐしたい。訪問戸数より内容。ボランティアが全住民に網を掛ける事は所詮無理なことで、この時期になってやっとその事が分かってきた。

各戸にぶら下がっているポスト数個が何者かによって、はぎ取られ横の溝川に投げ捨てられる。住民は彼が……と疑いの目で見ている。奇妙な事件（自転車の連続パンク・基礎部分のナット取り外し・スプレー吹きつけ散乱等々）が起きている。住民は蜂の巣を叩いたような状態だ。警察にお願いし重点パトロールをお願いするしか方法はない。住宅外部の嫌がらせであれば重大問題。

『一言コメント』 『人は助けを求めるために問題行動を起こす』疑われている男性は言語障害があるが、被害状況から彼の仕業ではない。

- 5/20 ボランティア講座の準備 6月末開講予定がやっと整う。講師の交渉、会場の手配、募集チラシ等初めてのことで気苦労したが、こぎつけた充実感と満足感で一杯だ。後は講座に何人参加するかである。人数でないと分かっている気になる。継続活動の必要な中で福祉ボランティアを被災地の中で掘り起こし、育てていくことが急務。講座開催もその辺のところを考慮している。

行政の担当者が、県で仮設担当職員の連絡会があるので実態を教えてほしいと連絡がある。入退去がある中で、ボランティアの活動にも限界がある。問題が深刻化しつつある中で社会資源とボランティアとは連携とれない部分もあり、上からのぞかれ心閉ざしてしまっている人もいと現状を伝える。

調査票の回収が続く。各仮設住宅にも一〜二カ所気の休まる場所がやっと出来る。活動で疲れたとき、情報収集など本音で話ができる場所でもある。張り詰めた気持ちを長時間継続することは出来ないで、フットヒールと息入れる場所である。

リュウマチを患っている女性が、今から冬の暖房に心配している。この身体では灯油の買い出しが出来ないと眠れない日が続くと言われる。名刺を差し出し何時でも電話して、何時でも飛んでくるからと伝える。その時はお願いねと大事そうに持ち込まれる。物事を一つ一つ敏感に受け取られる。出来るだけ沢山の選択肢を提供するのがボランティアである。

- 5/21 T地区-またまたポストのはぎ取り事件が起きる。今回は9ヵ所。一週間に2〜3回しか帰ってこない人もいる。ポストの中には重要な書類も入っている。連続して続けば自営パトロールが必要だ。若しポストの中に火の気のある物を入れると大惨事になる。戸別訪問で伝えていきたい。

Fさんが、昨日10万円無くなったと警察に届ける。何時も鍵を掛けていない状態で心配していた。本人と3人の飲み友達が飲酒している時に無くなったと……飲み友達をよくトラブルを起こしている人達だ。嫌なことが起きたものだ。訪問時に疑われないようにしなければと

思ってしまう。

警備会社に行っていたEさん。真面目に行っていると本人から聞いていたが、実は辞めていると近所の人から聞く。警備会社の人に無理を言ってお願いしていたのに……休憩時間に作業員と共にビールを飲んだり、朝から飲んで仕事に行くようでは、使用者も安心しておれない。本人に直接確かめず本人の口から言うまで待つことにする。これまで関わったことが水の泡だ。お酒を手にしなければならないことが病気である。分かっているけど苛立ちを感じる。

T地区…元気な人に取り囲まれ罵声を浴びる。言っていることは何故自治会を潰した。お願いするときはお願いしますと言っておきながら、潰すときに何故連絡しなかった。自治会設立には協力し、それなりの支援もしてきたが、本質的な事は何ら関わりを持っていないし、持てるものではない。自治会に対する腹いせをボランティアに向けられ参ってしまう。我慢することで自治会運営がうまく行くのであればと口答えせず聞き流す。大声で責められたるが、一人として助け船がない。孤軍奮闘。言語化出来ない辛さを味わう。ただ一言思っただけは伝える。入居当時の混乱の中で仲間作りが必要と思ひ頑張ったが、震災後一年が経過し住民同志のコミュニティが求められている。そんな中で、ボランティアが自治会運営に対して一切口出しはしないし、していない、とハッキリ伝える。

何でこれほどまで言われたいといけないのか、腹立たしくなる。活動内容についてとやかく言われるのは仕方ないとしても、自治会運営について何ら関わりもないのに、罵声を浴びるとは辛い。

巻き込まれない事が一番……引き込まれないことも大切だ。

- 5/22 地元NGO連絡会 一時ほどの熱気が伝わってこない。マンネリ・惰性で動いている。その辺の気づきを発言する。聞き入れていただき、次回の全体会（寺小屋）は、ボランティアの今抱えている課題、問題を話し合い互いにスーパーバイザーになって聞くことになる。先日シンポジウムの中でも大きな荷物を背負って、誰にも相談できず悩んでいる人の多さに驚いた。活動後のふりかえりも出来てないグループもあり、継続活動に障害が出ている。

ボランティアの使い捨てと、燃え尽きをさしてはならない。

5/24 筑波大院生調査

他グループで活動後のふりかえりができずグループ内がギクシャクしていると電話相談を受ける。アドバイスを求められても『各人がそれぞれの思いで動けることは、ボランティアが自立していること』と角度を変えて見ることは出来る。継続活動から自我がでてくるのは自然のなりゆきだ。仲間で徹底的に話し合い、傷口が大きくなならないうちに修復する事だ。いろんな問題が飛び込んでくる。

- 5/25 ボランティア講座 大阪YWCAの金さんを招き『人間関係と問題解決』についてのボランティアの資が問われている時で good timing！

S地区…3月末に空き家募集で恒久住宅へ退去した人が、ふれあいセンターに遊びに来られ、2ヵ月たつがいまだに近所の人と話さない。仮設は楽しかった、声かけもしてくれた。寂しくて落ち込んでしまう。何人被災者が入居しているか分からず横の連絡も取れない。気がおかしくなる。早く仮設を出るのでなかったと弱々しく話される。何か手伝う事が有れば動きた

い。段々と手を広げるような結果になるが、聴いた限りは動かないと……。空き家募集には問題がある。人選が必要だ。駒合わせでは駄目。馴染める人・エネルギーのある人等々斡旋する側も慎重になってほしい。

5/26 精神弱者と面接 T地区-部屋に足を踏み入るとゴミが散乱し、踏み入れる所もない。入居後一度もゴミを捨てていない。捨てられない。ガス・水道は閉栓して自炊した形跡もない。部屋の中でもヘルメットを被っている。関わりの持てる人ではないが、見過ごすことはできない。社会資源と連携を取りながら出来る範囲で関わりを持つ。社会資源が立ち入れない部分をボランティアがカバーしたい。

Dさんは酒害で身体もこころもボロボロ。自治会役員が病院へ無理やり連れて行くが、継続した通院が出来ない。ドクターもこのままの状態では危ないと告げられる。「危機介入」だ。以前から関わりを持っていたので気長に説得するしか方法はない。身体の不調は末期状態だ。入院すると二度と出てこれないと不安が先立ちテコでも動かない。もう一つ心配なのは医療費の問題。生活保護を進めるが、応じようとししない。頑固な中年は程々手を焼き策が浮かばない。首に縄でもつけて病院と市役所へ連れて行かなければならない。

Cさんも病院へ行かない。以前大手術で身体の中にバイパス管を入れている。最近外れていると平然と話され、危機感がない。危機感がないというよりは、生きている喜びがないと投げやりの言葉。日めくりを一枚一枚捲っているだけで、その日その日が過ぎればよいと言われる。その後入院されたが、手遅れだった。

5/27 老夫婦 子どもの文通を楽しみにしている。ご主人は緑内障で弱視・奥さんは脳溢血で下半身不随である。以前は不自由な手を使って書くことなどしなかった。今は温かい励ましの手紙を見ると自然に筆を持つ、握っても最初は動かす事が出来なかった。返事を書きたい一身体、筆を持って書くとか見れる字になり返事を書く。葉書一枚と言われるが、書き上げた後の満足感を伝えられる。当初は苦痛だったが、今は楽しみ。少女の様な素敵な顔で『声の郵便局』有り難うと言ってもらえた。形になって返ってくると疲れが吹っ飛ぶ。今後もしハビリをかねて文通して下さいね。

Bさんは、文通相手の可愛い写真が届いたと、額に入れて見せてくれる。一度に沢山の孫ができこんなに嬉しいことはない。夏休みに行くと便りに書いてあった、その日を楽しみに生きていたいと、涙を流しながら話され、もらい泣きする。一つ一つの積み重ねが継続につながる。

家族とは？ S地区-Eさん息子のマンションへ転居したが、入居した日に嫁が里に帰ってしまう。悩んだ挙げ句子どもの家庭を壊すことは出来ない。息子はお母さんの為に買ったと言ってくれるが居たたまれず仮設にUターンし一晩中泣いた。辛かった。仮設住宅を直ぐ返却しないでよかった。戻るところがなかったらと思うと背筋が寒くなる。地震さえなかったら肉親の醜いところを見なくてよかったのに……。地震後は県外に避難していた（娘の嫁ぎ先に身を寄せていた）。娘婿がお酒を飲んだ勢いで何時までいるのかと詰め寄られ、無理を承知で重病人の主人を連れてこの仮設にきた。無理が祟って一週間目に亡くなった。ことあるごとに近所からけちをつけられ本当に辛かった。辛かった。と涙を流しながら話される。こんな時何時も貴方にSOSを発信して申し訳ない。何時も聴いてくれて有り難い。もし出会

いかなかったらどうなっているか……と絶句される。神戸に百坪の土地があるがどうにもならない……。何時も一生懸命と言われるが、貴方のボランティアはボチボチと言ってくれるのでほっとできる。前向きな性格で思い込みもあるが、沈んだ時に電話を掛けてくる。依存心はないが、話し相手が欲しいと伝わってくる。

- 5/28 年金額が少額で生活が苦しいと言われ福祉につなぐ。年金額が保護費より低額であれば上積みが出る。きめ細かい行政サービスが受けれるように情報提供していかなければ、生活が困窮化しつつある。知っている情報をお伝えして、分からないものは情報を得るようにしたい。

取材を受け車に乗ろうとするとドアが大きく凹んでいる。駐車中に当て逃げされた。以前であれば頭カリカリであるが、今日は平静。こころの貧しい人だと片づけられる。馬鹿なのか、ボランティアしたおかげで人間が成長したのか。仕方のないこととして諦められた。家に帰り話すると同じ思いで、家族共々成長しているのかな？

- 5/30 自治会役員が『善意の日』の行事で行政から人が来るので謝辞を伝えたいのでと、挨拶文を考えてと依頼がある。早速簡単に書いてファックスで送る。依頼されると受けざるを得ないが、なんでも受け入れることで自立を妨げているかもしれないと考える。

- 6/1 仲間が久しぶりに息子を連れて戸別訪問される。活動後の感想は、環境が良くなり路地には舗装と防犯灯がついている。ふれあいセンターは活気があり温かい雰囲気。皆さん落ちついた顔で穏やか、日々活動していると些細な変化が見えてこない。息子さんは、教員採用試験の為にボランティアのボランティア。最初に面接試験対応と言われると厭味に取れない。面接でボランティアの事を聴かれた時の対応を聞かれた。一日で深層部分は見えない。継続的に参加して欲しい。

6/2 『住民の一言』 T地区

- ・ベンベン草がはえているような所で生活したくない。早く帰りたい。
- ・神戸に帰っても閉じこもり（かたつむり）だが帰りたい。
- ・早く帰りたい。復興住宅を早く大量に建ててほしい。
- ・神戸の病院へ行くのに交通費がかかる（経済的に負担大）。
- ・ボランティアの訪問が嬉しい。一声掛けてもらうことが嬉しい。
- ・お元気ですかの言葉が嬉しい。
- ・今は落ちついているが、隣の人が被害妄想で夜中中独り言を言っている。
冬が一番怖かった。火の始末をしているか心配である。二度と被害には会いたくない。
- ・人間関係で悩んでしまう。
- ・関わりを持たないのが一番。

一年経過すると『住めば都』で姫路でも良いと言われる。しかし大多数の人は一日も早く元居た所へ帰りたいと口ぐちに言われる。

- 6/4 地元の支援が欲しい 神戸の……ボランティアリーダーから『こころのケア』とは、どんな団体？と電話が入る。被災者の気持ちが分かる？精神的弱者の訪問はどの様になっている？色々聴かれる。何を言ってるのか要領がいま一つくみ取れない。この人自身に支援が必要か？四十分程電話でやり取りするが不完全燃焼で消化不良に陥る。取り調べられるようで、嫌

な電話だ。

神奈川県の実言宗のお寺から、檀家から集めた石饅を送りたいとFAXが入る。思いもつかない所からの救援に驚く。

S地区－ふれあいセンター運営について、センター内での遊戯（マージャン）と飲酒について不満をボランティアに話される。ボランティアが関われる問題でないし、問題が波及しない範囲で聞かせていただく。以後何回も同じ事を話されるが、時間経過と共に薄くなり、胸をなぜ下ろす。一時は巻き込まれないか心配した。

T地区－掲示板に特報が掲示される。先日来から起きているポストのはぎ取り事件について。住民か外部の人か、住宅内の精神的弱者に疑いの目が向いているが、……弱者に責任をなすりつける気配がありこの事が気になる。

6/6 交流会 被災者復興支援会議の委員と住民。

恒久住宅関係の質問が主であった。

- ・どこに・どれ程の規模で・家賃は・いつごろ建築されるのか現実的な質問がでる。（元の場所には物理的に帰れないことを理解してほしいと委員から話される。）
- ・義援金について額が少ないと感情的に話された人もいた。
- ・アンケート・聞き取りが良く有るが、何も返ってこない。
- ・医療費補助をお願いしたい。
- ・遠隔地には交通費及び引っ越し代の補助をお願いしたい。
- ・神戸の仮設に引っ越したい。空き部屋があれば早急をお願いしたい。

諦めているのか・今の生活に満足しているのか熱気がない。どの様に分析してよいのか迷ってしまう。早く神戸に帰りたい人と諦めて今の生活に満足している人（仮設が仮設で無くなりつつある）時間経過と共に恒久住宅への移転は難しくなる要因を考える。

6/7 ベゴニヤ160株 S・T地区－環境整備と心がなごめばと機会あるごとに配付する。最初は物珍しきで各人が取りにきていたが、今は好きな人だけである。

仕事を紹介したEさん。警備会社の責任者からもう我慢できない。採用当初から酒の匂いはするし、休憩時間には飲むし、あげくの果ては、現場でひっくり返り救急車を2回も呼んでいる。行く現場行く現場で問題を起こしもう限界だと話される。これ以上の無理は言えない。仕事に行ける状態でなく、二次災害を起こすかもしれない。生活基盤が無いので今後の生活が心配だが仕方ない……。

6/8 S地区－復興住宅へ転居された人から電話があり訪問する。周囲の人と溶け込めず寂しい、情報が入りにくい、住宅と言っても器があるだけで、生活するには四十～五十万円かかる。台所用品・風呂・カーテン・引っ越し費用等々出費が重なった。復興住宅への入居が済めば復興が終わったように言われるがこれからが本当の問題。何とかしてほしい、運動を起こしてほしいと頼まれる。電話相談と情報発信は出来るがそれ以上の事は出来ない。しかし、ほっておけない。

NGOの若者を招待してバーベキューをする。余りの食欲に腰を抜かす。食べるものも十分食わず、感張ってくれる若者に感謝、感謝である。

6/10 T地区－他グループのお茶会とジョイントしてコンサートする。集まりが今一つだが、各

人の動きが活発になった結果で喜ばなければならない。自立を妨げないイベントを企画したい。

- 6/11 オルセー美術館展鑑賞としあわせの村温泉旅行 T・S地区一行くまでに色々問題があったが、定員一杯で出発出来た。美術鑑賞は興味のないお年寄りにはどうかと思っていたが、集合時間を忘れるほど熱心に鑑賞された。報道各社がカメラを持って待ち構え少々戸惑ってしまう。仮設からカメラを廻すテレビ局も有る。皆さんカメラ慣れしているのか抵抗なくインタビューに応じている。

しあわせの村では東（りんくうタウン）西遠隔地住民の思いを話し合う交流会もする。病院の通院費用、復興住宅の見通し等住民間で食事をしながら和やかな雰囲気の中で時が進み話が弾む。お風呂の方も久しぶりに身体を伸ばしてユックリ入れたと一時間後に出てこられる。余りユックリされるので心配する程であった。皆さんこんなにお風呂が好きとは……。仮設の湯船はくつろげない、ダルマのように手足が出ない・出せない。『アーマーゆっくりできた心も身体もスッキリした』と湯気出しながら言われる。風呂好きの人に喜んでもらい、交流会では劇的な再会もあり楽しい一日でした。

- 6/15 T地区-Cさんに、保証人になってと迫りかけられる。ボランティアの域を越えているのでハッキリ断るが、しつように言われる。気まずい関係になっても仕方のないことと言い聞かせるが、スッキリしない話だ。自己防衛出来なくなったときは引上げ時だ。

大学生が仲間に加わり戸別訪問するが活動以前の問題があり、本人にケアが必要。最初が肝心で冷たいが、活動を断ろう。リスクを抱えたくない。

- 6/16 活動は聴くことから始まる T地区-Cさんが新聞広告で不動産物件を見て取引したいと話を積み上げ、いざ契約の段になって所有者が仮設の人とは契約出来ないと言われた。これは差別だと怒りを私に向けてくる。姫路市民はそんな人かと問い詰められる。解決出来る問題ではない。面と向かって仮設の人と言っていないと思うが……今後もこの種の問題は出てくると思う。就職においても差別は出てきている。矛先を向けられ辛い、誰かに言いたいのだ。しっかり受け止めたい。

仮設の人が無賃乗車したと駅前派出所に突き出され、保護しているから引き取りに来てと警察から会長に連絡が入る。偶然居合わせ、何故自分の所にこんな連絡が入るのか。既存の自治会にもそんなことを連絡するのかと偉い剣幕である。仮設は管理されているのか。法治国家ではないのかと怒りを向けられる。よくとぼっちを受け……考えさせられる。それにしても心痛む事件が続く。

- 6/18 暴風警報 住宅保護の為アンカーを取る。アンカー穴が詰まり中々取れない。これでは急を要する時は問題だ。取り付けの前に避難しなければならない。付けっぱなししておけばよいが、それでは通路が狭くなり歩く事すら出来ない。困ったものだ。風圧30M迄はもつがそれ以上になればアンカーを取らないと危険だ。

- 6/18 市内の県営住宅へ引っ越した人を訪問する。主人は引っ越し後交通事故で入院。奥さんの話は、進んでいくと地震の話になってしまう。時間経過と共に薄らいでいくようだが、まだまだ時間が必要。立ち直りには時間がかかる。生活基盤が安定した後の復興は、こころの復興。空き部屋入居で周囲の人とは馴染めないし、かまってくれない。寂しさと孤独を感じる。

如何に引っ越し先のコミュニティに溶け込めるか、甘え（被災者）があれば入ることが出来ない。保守的な土地柄で中々他所者は仲間に入りにくいが頑張ってほしい。

- 6/21 復興住宅 新聞紙上に住宅の建設場所と家賃設定等々が報道され、被災者がそれを見て見通しが立つ、これで神戸に帰れると笑顔で話される。自分は高齢（89才）なのでそれまで生きておられるかどうか……と先の見通しのたたない不安と希望を話される。復興住宅が現実になりこんな素敵な顔を見たことがない。将来の見通しが見えてだと心の意欲が生まれる。この素晴らしい笑顔は忘れたくない。

- 6/23 県営住宅に当たっているが、保証人がないと相談される。入居途ままだまだ期間があるのでユックリ作戦を練ることとする。

まだまだ十分な活動が出来ていない。大きな顔になってはいけなと自分に言い聞かせながら班別に別けて地道な活動に入る。

T地区-G女性からの訴え。一寸した音で脅えたり、些細なことも気になる。仮設住宅の土台（根台）のひび割れとか、板の欠けている所を見ると大丈夫なのかと気になり眠れない。全壊で生き埋め状態で救出され人で、まだまだ癒されていない。ユックリ時間をかけて関わりを持っていきたい。

活動支援者とお会いする。被災者に喜んで頂けるなら……と活動している。『今この時』の気持ちで毎日毎日を大切に感謝と欲を出さず生活する。当たり前のことであるが、当たり前出来ない世の中になっている。物の豊かさと反比例してところが貧しくなっている。この事をしっかりと見つめながら活動するとお伝える。支援者は心の支えである。

- 6/24 小規模住宅（2ヵ所）住民をボランティア団体に登録申請する。空き部屋をふれあいセンターに利用しているが、運営費捻出の皮肉の策である。50戸以下で運営費がなく苦慮していた。住民が互いに助け合っていることは正に住民ボランティアである。知恵も湧いてくる。

- 6/29 市民交流会 被災地外の西部仮設住宅住民を対象に神戸市職員を招いてを加古川で実施。被災者復興支援会議委員の品田先生の肝入りで実現。気安く司会を引き受けたが、神戸市のそうそうたるメンバー（20人）とテレビ局（2局）各新聞社が集まれば緊張の連続である。

今回の会を振り返り行政関係者と膝を交えて話し合う事で、顔の見える関係が生まれ次につながる。

- 6/30 T地区-介護の出来ないボランティアなんか意味がないと言われ落ち込む仲間がいた。団体には団体の活動方針がある。出来る範囲で出来ることをするだけである。しかし、仲間と話し合い活動出来る事であれば活動に取り入れたい。

ふれあいセンターに入れば人の噂だけで、センターは嫌だ。毎週一度の戸別訪問を楽しみにしている。一人でいると何日も、誰とも話さないこともある。花をもらって手入れをしながら隣近所とその事について話す。同じ話題で話すことは嬉しい。花を媒体にしてこんな波及があるとは、花の配給とか戸別訪問は必要。返ってくる反響にエネルギーが湧いてくる。

東京のボランティアグループから子どものいる家庭と古着を通して交流出来ないかと、便りを受け一家庭を紹介する。子どもの顔が見えるように写真を撮って送る。出会いは1月の東京での講演会。こんな形で橋渡ししできたことに、人と人との出会いの素晴らしさを感じる。

7/2 K県民局から『こころ豊かな人作り』県民運動を展開したいから知恵を貸してくれと連絡が入る。仮設住宅で県民運動として何か取り組みたいが、どうしてよいか分からない。一過性の運動は、イベント屋になってしまう。これも時と場所によっては必要。日常的な活動では、何を求めているのか、その時その時のニーズに応じる活動が必要。今は恒久住宅に関する事が一番の関心事であるとお答えする。何をどの様にしているのか分からない時は動かないこと。変な電話??

T地区一瞬間湯沸器の電気コード切断事件(5ヵ所)が起きる。もし外部の人であれば……差別だ。何時になっても困ったことだ。先日からポストのはぎ取り、ナットの取り外し等々の事件が起きている。これ以上エスカレートしなければよいが心配である。夏が近づきイライラが募っているのか?

豊中から電話相談。子どもが不登校で進学を間近に控え地獄だ。市外で電話代も馬鹿にならないので、一旦切ってこちらからかけることにする。仮住まいで話をする人が周囲にいない毎日が地獄だと言われる。何処で電話番号を知ったのか分からないが、これも出会いと思い一期一会で聴かせていただく。深夜に一時間以上聴かせていただくと疲れがドッと出てくる。

Eさんから嬉しい連絡が入る。いよいよ自宅再建が軌道に乗った。2階建てにして借家も作る。ゼネコンが家賃保証もしてくれるので安心して任せられると弾んだ声だ。お世話になった貴方に一番に報告したかった……嬉しさ・楽しさを共有できボランティア冥利! 受話器から嬉しい笑顔が飛び出てきそうだ。

長岡県のボランティア仲間から活動依頼があり快く引き受ける。

7/4 SOSを発信していた人をケースワーカーにつなぐ。強がり言っているが、役所に来るにも一人で来れず友達と同伴。以前一度面接が会った人で、書類が残っていた。仕事に付きたくても身体はボロボロ。蓄えも底付き光熱費もストップ寸前で、食事は入居後自炊した形跡がない。食べるものは近所の差し入れで賄っている。中年のブライドでここまでこれたが、今からが心配。神戸の新聞記者が遠隔地でいま何が起きているのか一言で言ったらどんな事かと尋ねられる。一言では言い尽くせない。神戸市に住んでいないイライラと見捨てられている思いかもしれない。神戸市の方が頻繁に訪問されているが、顔が見えない寂しさと住所が神戸市でないことが大きい。

7/5 復興住宅説明会 T地区一センターに一度も来たことがない人、顔さえ分からない方等々センター始まって以来の賑わいで関心度の高さを感じる。一通りの説明後、質問を受ける。千差万別で、答えられない事項は後日神戸市に確認し戸別にお答えすることにする。

- ・保証人がいない。神戸市民でないといけないのか……。
- ・所得制限以上の住宅は申し込めるか……逆に以内の住宅申し込めるか……。
- ・離婚して罹災証明がないが応募資格があるか……。
- ・一部損壊でも応募資格があるか……。
- ・生活保護を受けていないが、敷金が払えない場合は……。
- ・60才以上でなければシルバー型に入れないのか……。
- ・中年で一人でも入れるのか……。

- ・福祉貸付金の保証人は……。
- ・部屋の間取りは標準スタイルか……。
- ・シルバー住宅に父親が入居後入りたいが……。
- ・最後まで当たらなかったらどうなるのか……。
- ・仮設の統廃合はあるのか……。
- ・県と市の応募条件が違うが……。
- ・引っ越し費用は出るのか……。
- ・兄弟でも入ることが出来るのか（高校生・21才の姉）……。
- ・ペットと一緒に入りたい、入れるか……。

『一言コメント』後日神戸市にFAXを流し丁寧にお答えしていただき、各戸にお伝えした。他所仮設住宅（3ヵ所）と雇用促進住宅でも説明会をする。ボランティアの説明会が起爆剤になり何かが起こればそれでいい。後に神戸市は各仮設住宅で説明会をされる。

7/6 市民ボランティア実践講座 神戸-30名募集で10名の参加者だ。まだまだ被災地では活動するゆとりがないのか、無関心なのか今一度考えたい。被災地内でも温度差は出ている。

仲間から電話が入り、仮設解消後は地域福祉ボランティアとして頑張ろうと先を見つめた話をされ、素晴らしい仲間に恵まれたことに感謝し、前向きに先を見つめたい。

長期の関わりになれば活動を率直に受け入れられない人も出てくる。草の根活動で純粋な気持ちを持つ仲間である。外圧で心痛むことが起き、先が心配。ボランティア活動に対する理解が今一つ薄い土地柄を感じる。

7/7 先日住民から申し入れがあった、介護ボランティアを引き受けるかどうか2~3週間話し合った結果、引き受ける事にする。双方ともこころの扉に風穴が開いたようだ。出来る範囲しか出来ないが、何か大きな前進があった。

仮設の中で孤立している・苛められている・センター内で無視されると強烈に話される女性がいる。エネルギーの有る方だから、排除される要素に気づかれたら・・・と思うがボランティアがトラブルに巻き込まれないようにする事が先決だ。

訪問過程で若い男性の部屋の中を覗くと山のようにゴミが散乱している。悪臭も風によって鼻をつく。夏を迎えて今後が心配。捨てることの出来ない人が余りにも多い。

7/9 住宅内でアリが異常発生していると連絡がある。田植え後、虫が飛んでくると悲鳴も上がる。都会と田舎の違いで、自然環境に馴染めない人もいらっしゃる。

サンテレビの収録を受ける。ボランティア活動と遠隔地仮設の現状を視聴者の方に発信したいと言われ協力する。いつも思うことであるが、ボランティアは脇役であって主役でない。

T地区-自治会役員が生活保護のつなぎをした件で報告がなかったと怒る。個人情報と言えないと、言葉を荒らげて少し感情的に話す。何でも知っときたい気持ちが伝わってくる。

7/10 仮設支援NGO全体会 総会議長を引き受ける。総会後ビックニュースが飛び込む。各団体とも活動資金の調達に四苦八苦し、活動資金が底付き気味。ある所から高額の助成金が入ると知らされる。息切れしそうな団体がこれでひと息入れられる。私達の団体もその部類。

先ずは信頼していただける活動が先決。毎回情報収集に出掛けていてよかった。

東京のボランティアから子ども用衣料品が、一品一品クリーニングして送ってこられ、ダンボールを開くと真心が飛び出てきたと報告を受ける。早速3人の子どもが品定めをして着替え遊びに興じる。こんな弾んだ声を聞いた事はない。無口な方だが、感謝の気持ちを全身で伝えて来られた。

7/12 神戸市灘区の地域型仮設住宅に訪問 一般仮設型と比較して余りの違いに頭がパニック状態になる。社会的弱者の収容所のような。人権無視・事を起こせば強制入院で失禁・徘徊……様々な出来事が起きている。月一度程度で何が分かるかと言われるが、月一度であるからこそわかる事も有ると思う。

7/14 日本赤十字本社で仮設住宅で起きている実情を発信 被災者精神支援団体の依頼で。素晴らしい場所をいただき感激。被災地でも温度差が出ている今、東京で理解ある人が関心を持ってもらう事に意味がある。昨日も子ども服を送る会の皆さんとお会いする。夕方は、震災当時共に活動した仲間（東京こころのサポート市民の会）と親交を深める。一度仮設訪問したいと言われ快く引き受けると伝える。現場を見て、接して、聴いて、何かを掴んでもらいたい。

仮設住宅全戸に復興住宅の説明概要版を手渡す。恒久住宅への促進を願いつつ。

7/15 東京生活者ネットワーク視察団 大阪YWCAでのに震災後の『こころのケア』ボランティア活動について説明する。地域防災計画策定に取り掛かっているメンバーだ。活動は今からが正念場であることを強調する。

国民健康保険料が高くて支払いが出来ない人を窓口ににつなぐ。払わないと言っているのではない。払えるまで猶予してほしい。もう一件は、離婚して生活が困窮している。何とかしてと言われケースワーカーにつなぐ。色々な事が起きて来る。行政情報を理解し的確に知らしめていきたい。

筑波大院生調査票を配付 皆さん協力的であるが、言動には気を使う。平素の活動で顔の見える関係だが、細心の注意を払い気を使い神経がすり減る思いだ。

神戸市に先日来の復興住宅説明会の質問事項を送っていたら回答が届く。再確認のために電話もいただき感激。早速住民に回答を持っていく。

7/20 ふれあいセンターに置きっぱなしの情報書類を各戸に配付する。センター役員が配布したらよいが、……気づいた者が行動起こせばよい。配付しないと大量の情報がごみ箱行き。

梅雨明けするなり夏本番。夏日が続く仮設の暑さは中途半端でない。二度目の夏で栄養状態が悪くなっている。それと食中毒と脱水等々にも気をつけて訪問活動したい。

7/22 神戸の共同作業所でボランティア活動している青年から連絡があり、姫路で情報交換する。震災後神奈川県から活動に入り今も活動を続けている。それぞれの思いを話しながら活動の意義を再確認する。

7/23 自立したいと店舗物件を探されていた人が、やっと希望通りの物件があったと弾んだ声で連絡が入る。その後がいけなかった。保証人は姫路市民でないと……と言われ絶句する。ボランティア活動の域を越えていることは協力出来ない。本人も言わないが、それだけに心痛む。保証人がないと契約できない。明日が怖い。

戸別訪問するなり、死にたい死にたいと言われるので、死んだらいけないと受け答えしてしまう。言うてはいけないことを言ってしまった。その人の気持ちに添いながら死にたい気持ちが聴けなかった。日常的な受け答えをしてしまう。活動が情性になることが心配。

- 7/24 復興住宅説明 地元NGO全体会で県職員を招く。役所スタイルでペーパーを読み上げるだけで内容がない。もう少しわかりやすく説明できないものか、難しく説明するのが得意なのか……。こちらの方が分かりやすく説明できるぞとってしまう。

昨日の不動産契約の保証人、やむにやまれず友達の酒屋にお願いする。ギブアンドテイクでこちらも儲けさせてもらおうと快く引き受けてくれやっとな長い一日が終わる。それにしても持つべきは友達。

- 7/25 関学千刈セミナーハウスで講演 回数を重ねる毎に上手く行く。地域型仮設で何かが起きていると話すと、近くに住む人がいて、小学校の先生が怖い所だから近寄らないようにと子どもに言っていると話される。何が怖い所なのか……。周囲で差別が起きている。周囲の子どもが訪問したり、遊びに行くと活気が生まれるのに。地域の学校が逃げないで取り組んで欲しい。体感学習の恰好の場所と思うが、震災が時とともに風化して行くのが辛い。

- 7/26 サマーボランティア 県社会福祉協議会の依頼で2名を引き受ける。S地区を拠点に5日間の活動予定だ。養護先生と単位目的の高校生。レクチャー後、計画表を作成し先ずは雰囲気馴染んでもらう。ボランティアの発案で手の届かない所の掃除作業をしながら話の糸口を見つける事にする。単発のボランティア5人も参加する。

- 7/31 今日でサマーボランティア活動が終了する。積極的に関わってくれた人。見えなければ油を売る人、人様々である。参加動機に問題があったと思うが、最後まで単位習得の為の思いを通した学生と話し合ったが、理解し合えなかった事は残念。

- 8/1 名古屋植田南小学校の『ふれあい姫路』 短時間で3ヵ所訪問には無理がある。移動を考えていると一か所15分程度で所詮無理であるが子どもの事なので強行工程を難なくこなす。案内する立場から言えば余裕を持った訪問をしてほしい。次は最後になるかもしれないのでこちらの希望も伝えたい。ふれあいセンターで一泊して余裕のあるふれあいを企画したい。

姫路から神戸市灘区の高羽住宅・西神中央・西多聞と仮設訪問が続く。暑さで子どももグロッキー気味。

- 8/2 神戸の事例研修会でアルコール依存症から立ち直った人に体験談を話してもらう。体験者の話には中身があり今後の活動に生かしたい。

先日の子ども訪問が負担になったとある人と言われる。お茶・メロンの用意が負担。嬉しかったと言われる人、人様々である。考えさせられる。

- 8/6 T地区被災者の声 ボランティア支援を当たり前のように捉えている人がいる。人間感謝の気持ちを忘れたらいけない。当たり前・当然と思っているとお互にギクシャクする。貧乏はしているが……『心のまで貧乏していない』と言われる。ボランティア側にも責任が有るようだ。考えさせられる言葉だ。

- 8/7 仮設支援NGO 会議後の二次会で会運営について本音が出る。

①全国キャラバン隊のあり方について。(会の意向が反映されていない。)

②NGOに集まる救援物資の配付方法について。

③フェリシモ助成金の配布方法の不鮮明さ。二次会の意見が全体会で出てきたらよいが……組織運営上の問題も出てくる。言えば責任が伴うし、言わなければ消化不良になるし痛し痒しである。二次会でも本音で話し合いが持ててよかった。

上記の件で8/14有志が神戸に集まり打開策を協議する。

①キャラバン隊の公開。(派遣講師は仲間から募る。一つのグループが受託するのでなく複数にする。出来たらNGOの目玉であるので事務局で専従スタッフを置く。)

②報告を公開する。

③報告書のマニュアルを作る。事務局の温かい支援。共同プロジェクトの公開(協力体制の確立)。助成金額を公開する。

その他(全体会の運営について)会議が慢性化している。情報交換の時間が少なくなっている。リラックスしていない(助成金の関係で顔色を見ている)。横並びから上下関係が生まれている。一部団体のNGOでないことを再認識する。

結論的には、参加するボランティアリーダーが他人事としないで会を盛り立てる事が大切。

8/9 2泊3日キャンプ T地区-高校生と小田原に行く。新幹線に初めて乗ると聞きびっくりする。

●〔感想文 P200〕

8/11 コンサート O157の猛威で食べ物イベントは出来ないが、猛暑をぶっ飛ばそうと生ビール祭りをする。

仮設内でのアルコールが社会問題になっているが、真夏の生ビールぐらいと軽い気持ちで計画したが、結果は散々であった。暑さでビールのピッチが上がりトラブルが起きる。一人の男性は、隣の溝川に投げ込まれる。一人当たり2~3杯と決めていたので生ビールが引き金になったとは思いたくない。しかし、事件は起きた。原因は根深いものがありそうだ。

長崎県のボランティアグループとの協力で表舞台は大成功だったが、裏では深夜まで事件の後始末に追われる。

イベント内容について猛反省すべき要因を考える。酒害を訴えているのにこんな結果になってしまった。今後はグループとして、アルコールを準備しないこととする。

〔問題点〕

①暑さでイライラがたまっている。

②明日の希望が見えない。

③お互いが分かってきた中で、辛抱が出来なくなっている。

④日常のうっぶんを発散した。

⑤日常は仲良くしているが、本心からではない。

⑥復興住宅の申し込みが20日にせまり、希望が所が少なくイライラしている。

⑦感謝の気持ちが薄らいでいる。

⑧大虎・女性虎がこれほど潜んでいたとは、寝ていた虎を起こしてしまった。

⑨何とかなるとボランティアに甘えている。

〔反省点〕

- ①イベント企画内容に問題があった。
- ②住民意識の高揚を引き出す関わりを求められている。
- ③住民の自立を促すには如何にすべきかをしっかり考える。
- ④イベントに参加する人、しない人がハッキリしてきた中でイベントの内容変更が必要。
- ⑤住民間のトラブルの原因をボランティアが作ってはいけない。

- ・長崎ボランティアの皆さんご苦労さんでした。若者集団だけに上手く輪投げも綿菓子も出来ました。子どもだった人も多数参加でき大成功。
- ・コンサートも最初の盛り上がりには効果抜群。

8/12 昨日の後始末に入る。当事者同志で問題解決していた。取り越し苦労で済めばよいが……。

T地区一息子の暴力で唇は何針も縫い、顔は腫れ上がり紫色、足は骨折。肉親と言うことで警察対応にならない。父親がこれで縁を切るといって手切れ金を渡し、ほうり出したと聞く。いろんな問題が起きている。ボランティアの限界を改めて知る。

A新聞記者が戸別訪問に同伴する。現実の厳しさを目の当たりにして心痛み落ち込まれる。現実をペーパーにする事はプライバシーに触れるので触れない範囲で何かを発信してほしい。明るい話題は少ない。

8/15 夏ばて防止のチラシとボカリ（2本）セットを各戸に配布する。直接効果を期待するのではなく、これを媒体にして人間関係を築き上げることと、健康に気をつけてとの意味を込めて。

雇用促進事業団住宅で復興住宅説明会 ボランティアが活動していないところで。説明会は行政がするとの先入観から神戸市職員と間違ひ、最初は糾弾会の様相。県外被災者の悲惨さをマスコミが取り組んでいるが、仮設住宅外の県内被災者も取り残されている。これから情報を提供したい。

8/16 S地区ー43才の女性が、夏バテと県営住宅の保証人が見つからないと落ち込み（精神的なストレス）熟睡出来ず、全身にジンマシンを出し救急車で緊急入院する。大事に至らなかったが、なにが起きるか分からない。保証人は、最終的にボランティアが責任を持つと伝え安心感を持たせる。県に免除をお願いするしかない。

8/17 アルコール依存症（女性）と隣人夫婦がこと有る事にトラブル。壁に防音材を張るが問題解決につながらない。これ以上放置できず、神戸市に連絡し仮設内移動の準備をする。原因者が部屋替えるのが原則であるが、当事者とは以前から関わりを持っていたので、事訳を話すと快く了解される。部屋替えはボランティアが協力することにする。前例を作り今後が心配。この件については、上手くいったが……。

『一言コメント』 無理して問題解決にこぎつけたが、一ヵ月後に隣人が関東方面へ引っ越しされた。急に引っ越しになったと聞くがスッキリしない。

8/18 『あつまろう姫路』 JC主催の催しで団体活動を市民に発信する。NGOの全国キャラバンも協力してくれる。震災写真、がれき展示、バザー、メインステージで被災地の現状を報告する。炎天下に25名の仲間が集まり、各人の持ち場で頑張ってくれた。フリーマーケットで頑張ったK氏は、終了後脱水状態で倒れるが事なきをえる。フリーマーケットも大盛況で、

日用品は飛ぶように売れる。1年7ヶ月経過し震災地から40キロ離れた姫路も風化が進んでいる。

住宅内駐車場に止めていた自家用車の前にお年寄りが帰りを待っている。3～4日間お金がなくなにも食べていない。お米を買うお金を貸してくれと頼るように言われ小額貸す。

8/20 県こころのケアセンターに久しぶりに立ち寄り姫路の近況を報告する。何時も丁寧に聴いていただき、ストレスの発散が出来る。

阪神コミュニティ基金事務局に立ち寄り活動助成金について確認する。遠隔地では広域的な活動が出来ず対象となる物件が見当たらない。採択してくれると資金的に楽になるが。いま一度仲間と相談してみる。申請は簡単と聴いていたが難しそうだ。

被災者復興支援会議事務局にも立ち寄る。何時も温かく迎えてくれる。ここでも姫路の現状を報告する。特に復興住宅転居後の課題、旧市民と新住民との融合、共生が今後問題になってくる。今から長期の展望にたって活動を考えていると伝える。

夕方神戸の仲間と灘区の地域型仮設訪問をする。リサーチと戸別訪問をする。問題が山積している。福祉生活資金貸付がはじまり、関係者に用紙配付する。記入事項が多く大変。これでは希望者が限られる。

M地区－高齢男性（90才）が、復興住宅申し込みと同時に引っ越し準備に取りかかる。話を聴くと私が当選しなかったら誰が当たると高齢者は絶対当選すると、引っ越し用のダンボール手配を依頼される。……落選時を思うと今から頭が痛い。準備には協力するが、高齢者優先枠はない。倍率は3.3倍で抽選結果を神に祈るだけだ。

雇用促進事業団住宅へ義援金申し込み用紙と放置自転車を持っていく。

同じ人から再度の借金申し込みがある。一度はよいが二度となれば考えさせられる。生活が困窮しているならばと、生活保護の話をするが（年金額の上積み）理解されず、今度だけと再度貸す。

8/23 昼休みにソファで仮眠する。目を覚ますと天井がくるくる回る。時間をおくが落ちつかない。心配になり保健室で血圧を測ると98～148で下が少し高い。気になっていたが、やはり下が高い。ストレスと睡眠不足が原因といわれるが……活動してしまう。自分のことは自分で管理しなければ誰も管理してくれない。やりながら活動することとする。

T地区－電動あんま機を先日持ち込むが、早くもトラブルが発生する。一人の人が長時間独占している。何とかならないかと……一人当たり20分使用と張り紙を張るが、守らない人もいます。自分たちで運営する気持ちが見えない。数人の不心得者が問題を起こしている。善良な住民が気の毒。ボランティアも気の毒。

8/27 第二次一元化募集に応募しなかった人のコメント。

- ①引っ越し代が心配である（福祉生活資金を借りても返済しなければならない）
- ②病人がいて今は動けない。
- ③思ったところがない。慌てることはない。そのうち市街地に住宅が建つ。
- ④今の生活が安定している。
- ⑤最後まで残る。
- ⑥姫路に永住したい。

⑦引っ越しするエネルギーがない。意欲が湧かない。

各人各様の思いがある。私達は一日も早い生活基盤の確立が必要と思い、今後とも恒久住宅転居の手助けをしたい。

- 8/29 S地区の元気な役員さんの一言 買い物している時に、この品物は家にあると思い、買わずに帰る。あると思った物は、震災前の家にあった物で、気持ちの切り替えが出来てない。元気印の人も頭の中は以前の記憶だけが鮮明で、忘れられず切り替えが出来ない。改めてこちらの傷の深さを知る。

藤森先生（聖マリアンナ医学研究所カウンセリング部長）から電話が入る。話の中で今一番困っていることはと尋ねられ、活動資金と正座に伝え、活動への援助をお願いする。

- 8/30 筑波院生調査 夏場なので遅くまで活動できるが、それだけオーバーワークになる。生活保護受給者が、歯医者に行ったら生保者は診察しないと言われ落ち込んでいる。診察前に市役所から医療券をもらい、該当する医者でなければ診てくれない。説明すると分かってくれた。それにしても束縛される要素がありすぎる。

- 8/31 元気印のJさんの落ち込み 何の心配もない人が何故と恐る恐る話を聴いているうちに原因が分かる。主人の年収が高額で復興住宅の入居条件にあわない。自分だけ応募出来ず取り残され、追い詰められている。情報不足で公団募集を知っていない。高額所得者用の物件を紹介する。それにしても落ち込みが心配だ。

T地区ー仮設から仮設への移動が多い。早く帰りたい人はエネルギーの有る人で前向きな人だ。通勤だけの問題ではない。想像する以上の望郷の念から。

一人、二人と転居して住宅内は虫食い状態が進む。取り残される人への支援がますます必要になってくる。

- 9/1 医者に行きたいが、様子が分からないので教えてほしいといわれ、近所の医者を紹介する。文化住宅へ引っ越しする人から、手伝いを依頼される。

T地区ー役員が、自立されお食事処を開店、お祝いに駆けつける。ボランティアが多数駆けつけ大変な賑わいだ。気になることは、仮設住民の冷たい目。喜びを共有出来ない……。今後の動きを見守っていききたい。奥さんが入退院の繰り返しで身体が心配だ。最後の力を振り絞って開店にこぎつけたように映るが？

子どもに関わりたいと数人のボランティアが参加する。十字架が大きく見えるので外してもらう。自立した宗教活動は住民の反感を招く。継続的な関わりをお願いするが、今後続くかどうか、浮ついた気持ちでは活動できない。

『一言コメント』文化住宅へ転居する人の本心。復興住宅が当たるまでいたかった。周囲と上手くいかなかった。いやみを毎日のように言われ仕方なく文化住宅へ行く。いじめの犠牲者だ。

- 9/2 風当たりのきつい棟の屋根が、捲り上がっているので修理を関係機関に依頼する。

- 9/4 前途多難な自立 T地区ー自立され寿司屋を営まれているお店に行く。お客さんが絶え間なく来て繁盛である。主人も感じのいい人で好感が持てる。久しぶりに楽しい思いをする。立派に自立され仮設住民を雇い入れ、姫路に根づいておられる。

首筋と後頭部が重い。血圧が気になり保健室に行くと104～137で下が高い。思えば思うほど気になる。落ち込みが激しい。プラス思考がモットーであるが、持ち味が出せない。休みなしに走り続けたが、神さんが少し休めとメッセージを送っているのかも知れない。

神戸の仲間からジャムのお裾分けがある。有り難い。神戸には色々と救援物資が届くが、遠隔地の姫路には届かない。距離感と共に遠隔地は忘れられているのか……。

お食事処を開店され順調な滑り出しであったが、奥さんが再入院される。無理して開店準備に携わっておられたが、こんなに早く入院されるとは、病気（癌）も末期に近づいている。主人が厨房に入れるとは思われないし……思うようにいかないと何時でも店を閉めると言われる。使用人が指示したり勝手な振る舞いをするとうちでも閉める。過去にも閉開店（22店）を繰り返した。時には自分を殺し馬鹿になることも必要と話す、聴く耳を持ってくれない。話しをしていても気疲れする。奥さんが病気を押して開店までこぎつけた気持ちを大切に、商売人になってほしい。

小規模団地の遊戯施設購入の事務手続きを代行する。雇用促進事業団住宅に自転車6台搬入する。

- 9/6 事例研修会 行政が仮設住宅担当に『ふれあい交番』『フェニックス推進員』『民生・児童委員』最近では『生活支援アドバイザー』等々の制度を作る。各委員とも活動がバラバラで連携がない。各人の立場で守秘義務を守りながら仲良くすることが必要だと思う。職務上知り得た個人情報を自治会役員と共有し、トラブルの元を作っていることもある。今後は心配と問題提起する。今後問題がより複雑化する中で、支援者がトラブルメーカーにならないことである。器（型）ができて所詮人である。行政支援者は被災者心理とか傾聴・守秘義務等々の研修後に現場支援に出てほしい。ボランティアの切なる願いだ。ボランティアが行政支援者の後始末をするようなことは避けてほしい。

スーパーバイザーから今後姫路の仮設が無くなってもボランティア活動は辞めないでしょう。やめることは出来ない。今後ライフワークとして息長く継続的に関わってゆきたいと思っている。今はバーンアウトしないように距離感を置き無理しないことと激励される。

- 9/8 『仮設住宅におけるボランティア活動』講演 市内の民生、児童委員の団体（第三民協）総会で民生、児童委員としての活動実績が、仮設支援活動につながったことと実践場所を頂いていることを発信する。各人の立場で一歩前進した活動をお願いすると共に、姫路にも仮設住宅があることを忘れないでほしい。（仲間内に話すのは緊張する）
- 9/10 ブラジルの研修生を仮設住宅に案内する。思っていたより環境が良く明るく楽しく生活されているとのコメント。引率のH君はT・S地区を比較して『人の和』と『人の温かさ』の違いを直観的に感じられたようだ。
- 9/12 ボランティアの疲れ おこがましい言葉かもしれないが、被災者が一次被災者とすればボランティアは二次被害者だ。SOSを出している神戸の仲間も多数いる。どうすればこの現実を知ってもらえるのだろうか？消滅しつつあるエネルギーの再構築が今後の課題。ボランティアに対するボランティアが必要だと強く思う。
- 9/15 バザー T地区で桜ライオンズと共同で。大変な賑わいで収拾がつかない出来事も起きる。日常雑貨品が飛ぶようになくなっていく。お金儲けが目的ではないが、支払いせずにも

って帰る人、時間前に手をつける人・・・etc様々な人がバザーとなれば参加される。

活動後のふりかえりで、最近参加した仲間の顔を見ることができた。活動前と活動後のミーティングが疲れを癒し問題提起ができ次につながる。初参加の大学生は、指示を待っていたら終わってしまった。自分から率先して参加出来なかった。今日のイベントも無事終了。

藤森先生からFAXと心温まる贈り物が届く。心優しさに感激する。元気回復の何よりの妙薬です。温かいコメントで疲れが癒される。

楽しい一日だった。神に感謝、仲間に感謝、家族に感謝。

9/16 大阪より戸別訪問に参加 姫路と大阪との違いを話し合う。

グループ内の悩み、自治会との関わり方等々について話し合う。ボランティアが自治会中心の動きをして、主体性がなくなっていく活動にイライラを募らせている。今後はソーシャルワーク的な活動が主体になるが、これに対しても理解がない。活動後のふりかえりに自治会役員も参加しているが、何もかも話すのでプライバシーがなくなっている。お互いの課題を話し合った。

【T地区の住民の一声】

- ・入居時に、畑の野菜泥棒がいたが周囲の人は今どの様に思われているか？
- ・自販機でアルコールを買い、立ち飲みしながら空き缶・ビンを田んぼに捨てる人がいる。
- ・弁当を道路で食べゴミを周辺に散らかしている。
- ・草むらで不純行為をしている。

姫路で神戸の恥をさらすことはない。一部の心ない人の行動が仮設の人は……と思われることが辛い。仮設周辺の自治会役員に聞き取り調査をする。今のところ問題は無いといわれたが……。

9/17 社会福祉協議会にT地区の住民の連絡事項を報告する。ふれあいセンターの運営については、少数の関わりでなく、S地区のように定期的な運営会議の開催をお願いする。住民がセンター運営に対して不平不満を募らせている。

役員間の不協和音が目につく。色々と相談を受けるが、センター役員の自立が必要である。

9/19 健康ランド招待 朝日新聞厚生文化事業団の助成事業として2ヵ所の小規模団地住民を招く。平素はユニットバスで足を伸ばすことが出来ずシャワーのみと言われる人もいる。今日はゆっくり湯船に浸かり、身体もこころもリラックス。感激したことは最高齢者（90歳）と人工透析を受けている人の参加である。大食堂で食事を取りながら前向きな雑談に花が咲く。90才のSさんはナスビの煮つけ方、カボチャの炊き方、味噌汁の作り方の手ほどきを受けている。色々と聴きながらチャレンジされることに、頭の下がる思いと自分に置き換え何が出来かなと問いかける。住民と楽しく過ごすことができた。

『一言コメント』『対人援助に携わる者として』疲れが溜まっている時『作り笑顔で活動すると、それ以上に疲れが溜まる』『疲れた時に、疲れた顔を見せるのはまだよいが作り笑顔で接すると相手に失礼である』

9/20 久しぶりに入居確認する。概ね確認できた。

- 9/21 **ボランティア事前学習** 上郡高校－仮設の現状と活動の基本的な注意事項を伝える。学生の熱気に圧倒される。単発でも若さという武器がある。今後の活動に関わりを持ちたい。ボランティアが不足気味な時期に、貴重な存在であると同時に育てていく楽しさも味わえる。
- T地区－役員から何回も呼び出しを受ける。延ばし延ばしにしているとストレスが溜まる。依存心が強いので、今は距離を置くことに徹している。依存させてしまったことを反省する。
- 携帯電話の呼び出し音で血圧が上昇する。連続して3回罵声を浴びる。住民のイライラした気持ちは分かるが、何でボランティアにそこまで依存し罵声まで浴びせるか？依存させてしまったボランティアにも責任があるが、けたたましい音に怯える。罵声が耳元から離れない。携帯電話を一時手放し何とか急場を凌ぐ。
- 9/22 **復興住宅抽選結果** 午後から戸別訪問。そっと仮当選の通知書を見せてくれる住民もいる。当選しても隣人に気兼ねして率直に喜べない。
- ふりかえりで3ヶ月ぶりにHさんと心の通いができ、これまでおむつ替えを拒否されていたが、本人からきしょく悪いから取り替えてと言われ取り替えることが出来た。……『やったー』と言う気持ちだ。大きな壁が一気に壊れ距離が近づく。諦めず訪問したものだ。仲間の成長はグループの成長で仲間一同喜びに浸る。
- 9/23 **雇用促進事業団住宅へ健康器具を持って行く。**少しでもお裾分けが出来ればよい。
- 9/25 **仮設支援NGO会議** 運営が行政的になっている。深まりがなく上滑り。建設的な発言があってもピシヤリと機械的に冷たくいなされる。いま一番望まれることはボランティアの資の向上とボランティアに対するケアである。会議後の気の合った仲間とお酒を飲みながら議論する時が、一番楽しく充実した時である。本音で話し合いができる。この雰囲気は本会議に持ち込まなければならない。全体責任として会を盛り上げなければ自然消滅だ。
- 9/26 **活動資金見通し** 藤森先生の紹介でハートネットワークセンターの委員長と出会う。活動説明と今後の支援をお願いする。
- 小規模団地に支援者から届いた季節物の梨を届ける。
- 9/28 T地区－ちびくろ救援グループの応援を得て引っ越しをする。毎回お願いしているが、何時も快く引き受けてくれる。ありがとう！
- 9/29 **芋掘り** S地区－マイクロバス一台で竜野へ行く。こころ豊かな人づくり運動の仲間の協力を得て企画する。殆どの方が、初めての体験で童心に返って芋づるを引き上げる。何箇所も連ねて掘り上げては大笑いである。土に親しむ楽しさを味わう。お土産も頂く。ネットワークがここでも生かされる。
- 9/30 **復興住宅抽選結果** M地区の90才のお爺さんは落選だ。高齢者優先でかすかな希望を持っていたが？申し込みと同時に引っ越し準備、結果的には36倍の倍率でだめでした。落胆を見せず、逆にボランティアを激励される。次の募集まで元気でいてほしい。それにしても市内4箇所の当選者は10名そこそこである。これでは先の希望が持てない。仮設から仮設の当選者は20名弱である。仮設間移動の当選者は引っ越しされるかどうか分からない。神戸に帰りたいとくちぐせに言っている人の希望を一日も早くかなえてほしい。神戸の地で人生の終末を迎えたいと悲鳴が聞こえる。
- 10/2 **不在者投票** 衆議院の選挙が近々にあるが住民票を姫路に移動している人は少ない。声を

出すためには棄権はしないと高齢者の声。権利を行使しないで行政にものを言うことは出来ない。脱帽。

姫路でもが、ふれあいセンターで出来ることになる。

10/3 会議で神戸に出向き、神戸駅を降り立ったとき女性から『疲れた人に幸福と幸せを送る話をしたい』と寄ってこられる。疲労で影が薄くなっているのか……元氣張っても隠すことは出来ない。

10/6 焼き肉パーティー T地区-100人ほど参加される。初めて参加した高校生の感想。皆さん落ち込んで暗いと思っていたが、明るく屈託なく生活されている。監獄みたいに暗いところと思っていたが、仮設住宅は明るい環境で良かったと『百聞は一見にしかず』。

10/10 S地区-自治会長の一言『ふれあいセンターの運営が上手く行けば行くほど、面白くない人が出てくる。生活に馴れてくると周囲のことが気になり、辛抱が出来なくなる。それなりの生活安定が生じると周囲が見えてくるのも自然な成り行きだが、中傷が始まり今後が心配』冷静に住民心理をつかんでおられる。活動から気づいていたが、役員さんから聴かされるとは……。コミュニティがこれから雪崩現象で崩壊していきだろうが、巻き込まれないことだ。

10/10 藤森先生のご好意で現地訪問とワークショップを受ける。

T・S地区共ふれあいセンターで一般的な説明を受けた後、数件戸別訪問をしていただく。

アルコール依存症、精神病、老人性被害妄想、ゴミを捨てることのできない人、閉じこもりの人、社会適応のない人等々深刻なケースが山積する中で、行政が本腰を入れて取り組む時期が来ている。ボランティアの活動範囲は限りがあるし限界がある。生活指導までは関わるゆとりがなく、今のところ社会資源にアプローチするしか手がない。

グループワークから出てきた課題（参加者：姫路、神戸、大阪の仲間）。

①ボランティアと住民の距離感の取り方。深入りいししない方法。依存させない方法。

出来ないものは出来ない。貴方だけでない貴方にすれば皆さんにしなければならないと言って上手く逃げる（かわす）方法を見つけること。

②グループワークのできない人への対応。ふりかえりの中でグループ活動の良さを話す。グループ活動の基本的な理念を決める。等々の最善の方法を取った上で、最終的には自分で活動できる人だから仲間から卒業してもらう。

③ボランティアはお人好しが多い。受け入れられないものは受け入れられないと自分の意思を伝えることが必要だ。判断出来ないときはグループで判断する。

④取り込まないで社会資源につないでいく。これまで以上に社会資源につないでいく。

⑤相手の『怒り』を受け流すゆとりも大切である。持っていき場のない怒りをボランティアに向けられる。個人的に向けられているのではない。

・何かしているのではなく、活動は人と人との関わり。

・火の玉のように活動している人がいる（震災当時活動できなかった罪悪感を癒している）受け入れる度量の大きさをもちたいが、あまりのエネルギーにチームワークが乱れる。グループに持ち帰り徹底的な話し合いが必要。

各人の悩み、課題が共有できた。素晴らしい仲間にも恵まれている。批判しないで評価でき

る。

- 10/13 神戸市選挙管理委員会からふれあいセンターに届いている不在者投票の案内文を各戸に配布する。必要な情報がセンターに埋もれることがしばしばあり、気づいた時に配布するが……センター役員にお願いする行政にも責任がある。情報過剰で選択肢が多すぎる。役員も住民ボランティアであることを再認識してほしい。

T地区・役員交代があり運営費使途について住民の不信が募る。住民間の疑心暗鬼が心配。指導している社会福祉協議会が全面に出て説明すべきだ。こんな状態では交代のつど問題が生じる。お金が絡んでくると住民のコミュニティーが崩れてしまう。ガラス細工のように一気に壊れ残念だ。関われば関わるほど違った方向へ向く。静観することが今一番大切なことか？

仲間のご主人から『人の命も大切だが自分の命はそれ以上に大切だ』と活動に対する見直しを忠告される。バーンアウト寸前で失いかけていたものを取り直す。素晴らしい仲間に恵まれ感謝である。携帯電話を手放すことを重ねて忠告される。

- 10/15 新聞を見て大ショック！ 11日に画期的な判決が出たのに。仲間の期待を裏切り叉も無免許で逮捕される。執行猶予期間中で無免許であったと新聞記者から聞かされ初めて知る。衝撃的な事件で言葉にならない。あとは新聞報道を見てほしい。青天の霹靂。(資料参照)

『一言コメント』 警察から参考人調査を取られる。新聞各社からは取材攻撃もある。気持ちの整理が出来ないままに追いかけられパニック状態だ。

- 10/18 大同生命サラリーマン助成金贈呈式に出席

全国から助成団体、個人が集まり華やいだ雰囲気である。最高に嬉しい一時でした。活動が評価されての助成。社会的に認められると認められるほど責任が伴う。

- 10/20 危篤 センター役員の奥さんがとあぶないと連絡が入る。……神戸商船大学の避難所からの付き合いの方で、偶然にもT地区仮設で再会し、入居時の混乱期にコミュニティーを築き上げ、お店も開店され、これからという時に……。無理に無理を重ねセンターと生活再建に奔走された。医療費免除が切れ医者とも疎遠になっていた。掛ける言葉もない。……出会は別れの始まりというが……。悲しみに沈んでおれない、S地区で焼き肉パーティーの予定。明るく振る舞わなければならず、気持ちの整理が出来ない。当初自治会と折半で計画を進めていたが、一部役員のクレームで単独事業とする。ボランティアと住民の共同事業に意義がある。与えられるばかりで、作る楽しみを忘れている。休日でも参加者が少ない。個々の動きが活発になっている。

- 10/22 T地区・怪文書がポストに入る。差し出し人は署名入りで直ぐ確認が取れた(精神弱者)。近所の人には気味悪いと騒ぎ立てる。仮設内移動で入居者のいないところへ追いやろうとする。問題解決にはつながらない。まずは親族に連絡し病院を紹介することにする。またまた深入りをしてしまう。以前から叔父さんに関わりを持っている。連絡を取り善後策を考える。

子ども支援の会から届いたサツマイモを三ヶ所仮設の自治会に配布をお願いする。救援物資をこのような形で持ち込むのは初めて。手渡しふれあいを第一目的にしているのに……。

今後は自分たちの出来る範囲の活動が原則であり、ボランティアのボランティアは望まない。

『一言コメント』 社会資源には立ち入れない一線がある。それを補うのがボランティア？
深入りすると当てにされる。悪循環が生じている……考えさせられる。

10/27 岸和田『小さな友の会』主催の講演会 県外避難者の現状を聞き胸が痛む。県外避難者も大変だが、遼隔地仮設も同じ。

りんくう助け合いネットワークの案内でりんくう仮設を訪問する。以前から遼隔地仮設で活動する仲間として連携を取っていた。生活環境は厳しい。

10/28 T地区・精神弱者の問題を社会資源につなぎ病院の紹介を受ける。事前に神戸市内の仮設移動の了解をえる。これは本人の希望を聴かなければならない。

電話で親族に病院紹介と仮設間移動について連絡する。

M地区・リュウマチ患者が、冬の灯油の購入について悩んでいる。考えれば考えるほど落ち込むと言われる。心配しないで協力すると再度電話番号を知らず。思い詰める性格。リュウマチの症状を初めて知る。

生活保護者の引っ越しが具体的になり、引っ越し費用について相談を受ける。行政援助がありケースワーカーへの相談を進める。制度が分かっているにも具体的に説明しない。間違いが生じると迷惑を掛ける。行政は事前に教えるべきだ。弱者に対して半歩踏み出したサービスを願いたい。

午後7時頃、市役所職員が未収納になっている保健料を取り立てに来たが領収書を置いて行かなかったと訪問時に言われる。仮設で老人相手に詐欺事件が起きているとマスコミ報道もあり敏感になっている。交番に早速届ける。結末は嘱託職員が国民健康保険料の未収納者を訪問し集金していた。神戸ではこんな遅く集金はしない。身分証明書を見せなければならぬ。人騒がせな一件だった。

10/30 県民局の取材 こころ豊かな人作り運動情報誌掲載の取材である。協力は惜しまないが、掲載されるたびに辛い思いをする事もある。

11/2 上郡高校ボランティア T地区の現地案内をする。事前学習していたので、学生の緊張感は薄い。手作りの可愛いマスコットを媒体に戸別訪問とクリスマスの飾りつけ品の準備を住民と共同作業で仕上げていく。若さを武器に仮設内一杯にエネルギーをふりまく。

今日からセンターの当番制が廃止になる。何か寂しい様な……閑散としたセンターになる。人が居ないと入りやすいメリットはあるが……。

仮設間移動とか恒久住宅の引っ越しが始まるとやり切れない気持ちに陥る。新しい門出で喜んで見送りたいが、張り詰めた気持ちが切れていくようだ。何とも言えぬ気持ちだ。別れが寂しいのか、活動場所が無くなる寂しさなのか私には分からない。出合いは別れの始めと言うもの。別れ上手にならなければ……。

11/3 T地区・アルコール依存者に堪忍袋の尾が切れてタブーを言ってしまう。『飲むだけ飲み、お金が有るだけ飲み、行くところまで行けば後は救急車が迎えにくる。』と言ってしまう。一人暮らしで寂しがり屋でお人好しである。ただお酒と縁が切れない。孤独感の解消を願う関

わりを待って来た。下り坂をスピードを上げて落ちる。社会資源でアドバイスを受けながら支援するが……限界だ。

いやみの常習犯が、生活に困り泣きついてくる。住宅内でも浮いている。最終的にはボランティアを頼って来る。出来る事しか出来ないが、危機介入。

『一言コメント』 病院手配と医療費免除を社会資源につなぐ、ケースワーカーは『しらふ』で窓口に来いと言うが、ケースワーカーは、アルコール依存症の病状を理解しているのか？病人に病気を直してから来いということか……『飲んだくれ』としか思っていないのでは？

11/6 T地区-地域老人会と積極的に関わって来た人が、仮設間移動で西神中央へ引っ越しする。住宅内で仲間作りに励み、バランス感覚も優れリーダー的な役割をこなされた。地域老人会との交流も活発にされた。一日も早く神戸に帰りサークル仲間とハイキングをしたいと帰っていかれる。生きかたが前向きで、自立された人。ボランティアとすれば今しばらくいてほしいが、自分のことが一番大切な事だ。

11/8 市民ボランティア実践講座 大阪に出向く。今回からOHPで仮設の現状を説明する。仮設の状況は日々変化しているので的確に発信したい。特筆すべきことは、女子高校生が2名参加していたことだ。平日だがチラシを見て来ている。学校の授業より魅力があると真剣な眼差しで聴いていた。

11/9 『ボランティアの今の課題・展望』 神戸の集いで話し合う。

ボランティアが長期の関わりで疲れている。ボランティアが組織化される中で上下関係が生じる。ピラミッド型になればなるほど縦割りになる。行政との連携方法についても話し合う。どれ一つとして結論は出ない。各団体の抱えている問題をパノラマ的視野で見つめる事が出来れば何かが見えてくる？

鷹取教会内FMわいわいに出演 スタジオに入るのは初めてである。緊張感は余り感じない。お喋りしている間に一時間が過ぎた。いい経験をさせてもらった。出演料として仮の子台仮設住宅へ案内してくれた。事例研修会の仲間の活動場所。姫路仮設の不便さをいわれるが、比較にならないほど交通の便は悪い。自然環境も厳しい。山の頂上を削り取った造成地で、里から吹き上げる風で、湯船の水も薄氷が張ると聞く。先日起きた火事現場も見るが、一棟(6棟)を一瞬に火の手が廻ったらしい。新建材と天井が低いので火の走りは想像以上だ。逃げるのがやっとなら火事の怖さを改めて知る。もし深夜であれば大惨事になっている。2年目の冬を向かえ今一度気を引き締めないといけない。何もかも無くなってしまう。二次災害は避けたい。

アルコール依存症が社会問題になっているのにミニコープの陳列にはアルコールが所狭しと陳列してある。これでも以前より縮小されたとか……啞然とする。

環境面の悪さも気になる。路地は未舗装で強風に耐えるようにアンカーが取られている。アンカーが相互に交差し真っ直ぐ歩くことができない。頭大の石もゴロゴロしている。これでは社会弱者は生活できにくい。この状況を見て姫路の方がずっと環境はいいと思った。

11/10 芋堀り T地区-住民と。急に取り止める人がいる。何時も同じ人。準備者の気持ちも

酌んで欲しい。次回からは誘いたくない。

初めての方が殆どで、備中を振り上げ掘り起こす。こんな大きいのが重なって掘れたとか、途中で切れてしまったとか、はしゃいでいる姿は幼稚園児の芋掘り遠足のよう。今回もお土産一杯いただき参加できなかった人にも配付する。

T地区-Yさん、人相が変わり、人が変わったような振る舞いである。話を聴くと電波が飛んでいる……教を信仰しろと深夜(1時~2時頃)に電波が飛んで来る。窓を開けて追い出す。話を聴いていても電波が飛んで来ると話す。聞こえないのかと言われる。重症。私達が関われる病気ではない。社会資源につなぐ。以前に日本刀を持っているとか、最近刺し身包丁を買ったという。病歴もあり大学病院へ通院している。一人暮らしで服薬が忘れがちだ。力の限界を知り専門家につなぐことにする。

知り合いの住民が、アルコールがないので買ってくれとせがんでくる。毅然とした態度で何を言っているのかと叱り飛ばす。住民の甘えが見え隠れする。継続活動のマイナス面をみせられた。

光熱費の滞納者(十数名)の多さに驚く。ボランティアが関わる問題ではないが、集金員のこころケアが必要である。有求必応では身体が持たない。神戸の恥を姫路でかかないで。

NHKの取材 遠隔地から何かを発信したいと熱心なアプローチにお答えしたい。

11/11 長野リンゴとお花 M地区-支援者よりの品を配付する。

S地区-医療費が払えず、持病を悪化させている人を救済するため、知り合いの医師を訪問する。国民健康保険は入っているが、切り詰めた中での医療費の2割負担はきつく病院へ行けない。頭を下げてア・ウンの呼吸で引き受けてくれる。赤ヒゲ先生に感謝感激だ。

『一言コメント』 それ以後、毎週通院している。持病は一進一退であるが、空気のよい姫路滞在中に少しでも体調を整えてほしい。『貴方との出会いがなければ今日の私はありません』と感謝の手紙を受けました。

11/12 観葉植物を配付 市内四ヶ所-ふれあいセンターに置く。閑散とした部屋が気になり一時でも花を見て、心を和んで下さい。花を愛することは明日につながる。花も咲き実も結ぶ。

県こころのケアセンターに姫路の現状を発信する。伝えることで肩の荷が下りる。何時か現地に赴いてほしい。何時も丁寧に時間をかけて傾聴していただく。

日さん昨日大学病院へ行き、注射と薬をもらい神戸で休養が出来たのか安定している。独り暮らしで薬をついつい忘れるようだ。あまり薬のことを言うと嫌がるし、関係が切れない程度に関わりを持つ。ヘルニヤを患って、働ける身体でないが、無理をして警備会社に行っている。生活保護を進めるが、恥ずかしくて受けないと答える。無理すると病気が出てくる悪循環である。

T地区-社会的弱者を仮設内移動させる動きが出ている。移動させることでは問題解決につながらない。人権を無視し侵害していることに腹立ちさを感じる。共生時代でありながら、することは残酷だ。臭いものには蓋をする。行政支援者が加担していることに怒りを感じる。

声なき声に耳を傾けて……。

11/16 T・S地区－ハイビスカス等の花をへ配布する。

……先生の紹介でユニバーサル財団のボランティア講座に行く。12回シリーズで殆どが大学教授。現場の専門家で発信する。対象者は仮設住宅で戸別訪問しているボランティア仲間。活動日数は月数回で継続活動出来る体制である。これからは無理しない地域福祉ボランティアが必要だと思う。

11/17 3週間休んでいた仲間が久しぶりに参加する。3週間来ないと気持ちがついて行けず疲れたと報告がある。一人で活動出来る人だが、今日は仲間と足ならしである。グループ中で存在感のある人。

T地区－住民間のトラブルが目につく。巻き込まれないように細心の注意が必要だ。

11/18 社会資源から連絡があり情報交換する。何もできなくて申し訳ないといわれる。要援護者問題で疲れるのではなく、住民間のトラブル、果てはボランティアに対する中傷、行政対応の不満等の活動外の外圧で気疲れされた。愚痴を言うのは疲れている証拠。

11/20 T地区－生活保護受給を嫌がっていた人が、生保支給日を月給日と周囲の人にいつて恥も外聞もなくしている。『お前のような飲んだくれ……』と仲間も離れていく。早く内臓疾患を直して仕事について、今の環境から立ち直ってほしい。下り坂の転がり加速を増すだけ、ケースワーカーにつないだ責任がある。

社会資源から団体としての冬対策を尋ねられる。去年は各団体が協力して対応したが、今年は予定がない。建物の傾き、隙間風は昨年以上であるが住民の自立対応をお願いし、どうしても出来ない人には個別に対応する。

11/23 S地区－久しぶりに入る、センター内はひっそりしている。各人の活動が始まることは、自立の芽生え。それにしてもヒソソリしている。

通院を勧めた患者が、一度は診察を受けたが、気が引けて通院出来ないと言われる。『身体がどうなってもいいのか、遠慮しなくいい、話が出来ているから』と伝えやつのことで通院すると言ってくれた。遠慮して辞退される気持ちは痛いほど分かるが、今は甘える事が一番と伝える。

Eさん恒久住宅の追加募集に当選したが率直に喜べない。自治会役員が来年9月には殆ど出て行く。出た後の『ふれあい喫茶』運営と自治会運営が心配である。一人暮らしのお年寄りが楽しみにされているふれあい喫茶を一人で切り盛りされる、献身的な関わりである。引越は先の事それまで頑張って頂きたいが、自己犠牲で無理されているところもある。

11/24 T地区－自治会主催のビンゴゲームと合同でバザーをする。バザー用品は、野菜・米・コーヒー・花等々でアッという間に売りきれ。値段をつけると買いやすいと言われる。それでも必要以上に買いだめされる。

ビンゴゲーム。終了後、住民が集まり、センター運営について協議される。自主運営が見えてきたが、参加者の偏りが心配だ。

神戸の仮設へ転居した人から連絡が入り、神戸に帰れて嬉しい、空気も匂いも懐かしい。一度立ち寄ってと誘いを受ける。元気な声を聞きつつ長話になる。

11/25 神戸事例研修会 ボランティア像について話し合う。

個性ある活動が大切であり、支援者はしてあげるとか、させてもらっているのではなく、人間として対等の思いで友達として距離感を持って活動することである。距離感にしても各人の力量の違いもあり、取り方のスタンスも違う。支援のキーワードは、「活動を継続し、無理なく、生活の一コマとして」。活動に対して問いなおす事は、大切に素晴らしいことだと思った。

T・S地区－県花の野路菊をへ持ち込む。

M地区－北海道の男爵を配付する。秋の収穫物が支援者から届く。有り難い。

T地区－アルコール依存症者が、自転車で転び肋骨を折り病院に緊急入院する。禁断症状がでなければよいが……。

ボランティアと公務員の関わりをどの様に思っている？との電話が入る。公務員の前に市民であり、国民である。自然な成り行きで自然体で活動している。問い合わせ先を確認出来ず残念。

11/27～11/29 奥尻島へ復興状況を現地調査

朝一の新幹線に乗り、居眠りしている間に関空に着く。平日で閑散時と重なり飛行機は空いている。函館からの離島便は、18人乗りの小型機、見ただけで足が竦んでしまう。激しい揺れで気分が悪くなる。揺れるたびに何かに縋りたくなる。両手で何かに縋ろうとするが縋るものはない。同じことを無意識で何回も繰り返している。一時間程すると奥尻に着く。事前に役場に連絡していたので出迎えがある。空港近くで最後の仮設住宅撤去が始まっている。阪神間でも一日も早い仮設撤去を望むが、何時になるか見当もつかない。撤去住宅を横目に見ながらジープに乗り込む。滞在中被災ヶ所と復興住宅を案内して頂く。結果的には島を一周する。

阪神淡路大震災の風化とか、温度差を感じると言われるが、私達が北海道南西部沖地震にどれだけ関わりを持てたかと問いかけると、恥ずかしい思いだ。関心のなさや遠くの出来事としか思われなかった。今その地に立って何が自分に課せられているのか、何が出来るのか考えさせられる。地震・津波その後の火災（青苗地区）映像をオーバーラップさせるが重複する所がない程復興が進んでいる。地形だけが原型を止めている。基盤整備の出来た街の上に北米風の住宅が建っている。人の行き交いのない商店街を見て今後の課題を見つける。高齢化社会と過疎地の復興を見て将来を思いやられる。真の復興は基盤作りが出来た時がスタート点かも知れない。

復興状況を見て思った事を箇条書きにする。

- ①今月末で仮設住宅が解消される。解体現場を見て壁材には断熱材が入り、それなりの寒さ対策がされていた。短期間に自宅再建が出来たが、阪神間では20～30年経っても仮設は残ると思う。改めて被害規模の違いを知らされる。
- ②被災前は、家の窓を開けると海が見えていたが、津波対策で防潮堤（6～12M）が万里の長城のように出来ている。自然環境の大きな変容で、年寄りや環境に馴染むことが出来るだろうか……。
- ③復旧・復興の土音が日常生活の中で確認でき、生きる活力が生まれた。
- ④避難所から仮設住宅への移動は、社会的弱者と子ども世帯を優先した。仮設住宅内は知り

合い同志で被災前のコミュニティーの延長であった。

(あの人の隣には行きたくない・条件付きで土地を売却した人もいる。保守的で連帯感のある集落が故に難題もある……何処も人間関係は難しい)

- ⑤ 20数Mの津波現場を見る。津波の怖さは現場を見たり聴いたりしてもイメージが湧かない。しかし、あの場所まで津波が押し寄せたと高台を指されて足がすくんでしまう。恐怖は体験者のみしか語れない。

青苗地区の町内会長のお話。

※地震中に津波が押し寄せあっと言う間の出来事だった。10年前の(青森地震)津波を体験していたので怖さは体験済みだ。逃げ残れる人。避難していたが忘れ物と違って家に取りに帰ったまま飲み込まれた方、犬を逃がさなければと帰ったままの人、子どもを背負って避難したが、背負いこから子どもをずり落としていた人(喧嘩のことでシッカリとおんぶしていなかった)家族7人が行方不明の家族、子ども主人を亡くした人、犠牲者の痛まじさに心が痛む。

避難所から仮設住宅、仮設住宅から復興住宅へと住む場所が変わっているが、住民への関わりは今もこまめにしておられる。会長という立場以上の支援が見える。町内の関わりはボランティアでは出来ない活動がある。悩み事・生活再建・街づくり・多種多様な支援。阪神でも住民間の支援があるにはあるが、嘆かわしい事件が多く、相互扶助が見えにくい。幻滅期に入り住民間の中傷が気になる)行政が多様な有給支援者を作るのも結構だが、所詮人。仮設住宅内で活動する役員に、住民ボランティアとして助成金が出せないものか……。

義援金の格差を問題にされるが、それ以前に土地柄・文化・環境等々の違いがある。一概に同一化したり画一的に考える所に問題がある。

『感想』……………

- ・奥尻は被災者と行政職員の顔の見える関係があり、深刻な問題は出ていない。事前に情報収集が出来る体制。
- ・連帯感があるが、それなりに問題もあり、個人のプライバシーが守れない。
- ・家の再建・漁船の購入等々の生活基盤が整ったが、借入金の返済が重くのしかかる。
- ・『人の温かさが自然に滲み出て初めて支援ができる』よそよそしい思いでは何もできない。相手に迷惑。自然体で支える事を知る。そして支えるとは、空気のようなもので、存在感がなくてもなくてはならない物である。
- ・表層部の調査に終わったが、今後の活動に生かしていきたい。

- 12/1 T地区―戸別訪問で数カ月間ノックだけに終わっていたが、今日は窓越しで反応がある。やっと水面下から頭を持ち上げてくれた。定期訪問の意義を感じ喜びを噛みしめる。

他グループリーダーの相談 Cさんが寄るだけで心臓が大きな音を立てて血圧が上昇する。何を言われるかとオロオロしてしまう。依存させた代償で仕方ない。一気に切ろうとするとところに無理が生じる。自然に顔色も変わってしまう。時間をかけて無理せず離れていくこととわかっていても……思うようにいかない。出来ない。一人で援助しているのではないグループで援助している。代替者のいることを自然に知らせ、ガチガチの関係から離脱していく。孤独と孤立に追い込まず薄い関係であるが『見捨ててない』ことを知らせながら距離感

を置きたい。

長期の関わりでグループ内の人間関係が浮き彫りになる。要援護者の関わりの深さが気になり、本人も気づき活動を休止している。ベテランがこれだけの問題でリタイアする内容でない。何かそれ以外の問題が含まれている。現地リーダーが抜け出ず、統率力等の力量が問われている。活動熱心な人ほどグループワークからはみ出しやすい。はみ出しても力量の範囲であればそれでよい。束縛しないが基本線を守ることが必要だ。感情的な問題もあり実態は分からない。グループ内で話し合う事。

- 12/4 T地区-ふれあいセンター役員が改選されたが、4日と持たない。新体制に住民クレームがつく。自我と自我の衝突。住民女性の声につぶされる。センター運営が思いやられる。ボランティアには直接関係しないことであるが、巻き込もうとするから巻き込まれない姿勢が大切。

- 12/7 餅つき大会 S地区-実績があり手慣れたものである。住民も仲良く参加し、大根おろしもち・餡こ餅・きなこ餅が飛ぶように胃袋に入っていく。昨年と比べると少ないが、50人も参加。出てこれない人にはつきたてのお餅を戸別訪問しながら配付する。

被災者復興支援会議フォーラムに出席 特に復興住宅の当選率の低さを訴える。5%では話にならない。90歳の一人暮らし老人も落選である。元居た所へ帰りたい人が、調査の結果89%。住民も現実を捉え『無理だなあー』と気持ちの整理は出来つつある。そんな中で定員割れの県営住宅の再募集が始まっている。働けのような早急な斡旋はしてほしくない。住民は自分の力で再生しようとしている。行政支援者がその気持ちをつぶすような事はしないで欲しい。空き家に入居された方の悲鳴も届いている。情報を沢山出してもらいたい。強引なアドバイスは問題を先送りすると発信する。それにしても当選率が低い。

- 12/8 神戸のボランティアリーダー訪問感想

S地区-ふれあいセンターに入るなり、ホームこたつ、丸机、長机があり温かみが伝わって、生活の匂いがする。ふれあい喫茶も活気があるし、家庭的な雰囲気。

T地区-事務所のような冷たさで、生活の匂いがしない。両極端のセンターを見学し率直な気持ちを伝えられる。

仲間内で円卓を囲み忘年会をする。仲間に拍手、自分に拍手、ご苦労さんでした。時間を忘れ楽しい一時を過ごす。

T地区-役員改選があり、……さんは住民の総スカンにあい女性が当選する。(参加者47名)の結果である。

- 12/10 T地区-Iさんから電話が入る。ふれあいセンターに入るなり新役員が、何時引っ越しするのかと尋ねられ、『まだハッキリしていない』と答えると『ゆっくりしている』と厭味を言われカチンときた。何も言わなかったが、こんな所なら早く出て行きたい。役員を辞めたらこんな仕打ちにあい、嫌になったと早速引っ越しの準備に取りかかる。手伝って欲しいと依頼される。それにしても住民間のふれあいが見えない。会長職から降りた途端にこの様な仕打ち、気の毒で仕方ない。入居後の混乱期を身体を張ってコミュニティを築き上げた人に感謝の気持ちがない。最近身体の不調を訴え入院される人が多くなる。その度に団体として見舞いに行く。長期の仮設生活で体調を崩される人と辛抱して我慢できなくなり入院する

ケースがある。今日もお見舞いに行くが、遅かった。この人も最後まで仮設にいた人である。ウーン……。

- 12/14 **引っ越し手伝い** 部屋に入るなり、ショック！あれほど自分で片づけ整理しておくように言っていたのに、生活しているままで布団の温もりがある。ボランティアを何と思っていると大声を出し引き上げたい気持ちである。住民の手伝いは期待されず、車持参のボランティアと無気力者のように片付けに入る。荷物も並以上あり、あっけに取られ物も言えない。依存心もここまで来るとご立派の一言。

今日ほど嫌々ながらボランティア精神で？手伝ったことはない。住民は誰一人として手を貸さない。救援物資が山のようにある。役得でなく避難所時の品物。周囲の住民には『よくやるねえ』と厭味を浴びながら、最後までやり遂げる。追い打ちを掛けるように、あの人に弱みを掴まれているのか？との一言を背中に受けもう嫌！二度と片付け付きの引っ越しなどしないぞ……。

- 12/15 **NHK取材ー温かいイベント歓迎** T地区ー大河内町と上郡高校のボランティアと共同で餅つき（一俵）・野菜販売・シチュー150食を作る。してくれる。多数（50名）のボランティア参加で主役と脇役が逆転しないように細心の注意を払う。参加住民は70名でこの時期にしては大成功。住民の人数も減少し一時ほどの活気はない。季節イベントとして実施するが毎回イベントを間いなおしながら計画している。学生はシチューを台車に乗せ戸別訪問する。大河内町差し入れの野菜即売をするが毎行儀の悪い人がいて心痛む。

カメラが廻ると住民・仲間も気疲れする。今回はイベント取材でなく私達の戸別訪問を捉え全国に発信する事で協力した。

『一言コメント』 テレビ取材について、事前了解を得ていたが、役員交代後この事について色々と厭味を言われる。センターを一時独占したとか・いい恰好してとか一部役員に繰り返し言われ落ち込むことがシバシバあった。後始末に苦労した。

- 12/17 **プレゼント** 防災フォーラム準備で本来の活動が手薄になる。今日もワークショップリーダー依頼のため事前打ち合わせする。現場から随分離れられているので情報提供をする。
〔話のーコマ〕

震災後のボランティア活動をふりかえり『際にいる貴重な人材である。際にいる人は、社会を変える人であり、温かい風も吹く時もあるが、往々にして冷たい風が吹く場合がある。この時に正面から立ち向かわなければならないので、辛い思いが常につきまとう。前向きに活動し前に進めである。変人・奇人・変わり者と色々いわれるだろう。気になるだろうが気にしないことだ。尾根を歩く人で、ボランティア団体には男性が少なく貴重な人材だ。男性がいる団体では女性同志の接着剤になるし、トラブルが少ない』クリスマスが近づき最大のプレゼントを頂く。

S地区ーお年寄り対象にクリスマスプレゼントとカードを配付する。メッセージを添えて手渡しする事で喜びが共有できた。

T地区ー新聞記者と戸別訪問する。震災後マスコミによって市民権を得、今はボランティア

を育ててくれる。活動後居酒屋で一時ボランティア活動と被災者支援で一花さかす。グループが成長し続ける要素は、常に新しい事にチャレンジし、前向きに取り組むことだと思う。

- 12/21 クリスマス会 T地区-昨年と同じプログラムだが、大きな変化があった。昨年は人形劇を遠巻きに見ていた子どもが、今年は我を忘れて人形劇の人形に挑発する。日頃のうっぷんを晴らしている。あまりの滑稽さに大人も引き込まれる。最高の盛り上がりで年忘れが出来た。

今年は仮設から引っ越した子どもを10人招待する。

引っ越した幼児(4歳女)が電車音で何回も目を覚ます現象が起きている。街内では重機音で足が突っ張り硬直し歩くことができない。ゆっくり時間をかけて「物」作業をアドバイスする。別に変わったことではない、回復していくから時間を掛けて子どもの気持ちに添っていくように話す。

- 12/23 S地区-息子にいい病院を紹介してと言われ紹介するが、子どもより本人が心配だ。病院に行けないのは国民健康保健の3割負担が負担になる。無理していると取り返しのつかないことになる。子どもの事が片づけば、お母さんへの関わりが必要だ。

- 12/25 小規模団地-ジャガイモと冬対策用にロールフェルト(30M)を持ち込む。小規模団地は関わりが薄くなり申し訳ない。川沿いの団地で体感温度は低く、トイレはくみ取り。市内四ヶ所の住宅で一番環境が悪い所だ。

神戸のボランティアから電話が入り、住民が何時まで甘えているのかと言われる時期に来ている。私たちも頑張っているから行政も頑張ると相互に感謝の気持ちを形で表す運動提案がある。全面的に協力する事を伝える。住民の感謝の気持ちが形として表れていない。一般市民にも見放され、温度差とか風化の速度を進めている。

- 12/26 T地区-女性役員が自分の思いが通じない。祭り立てられ利用されている。自分は何だろう。何も思うようにさせてくれない……自分は飾り物か……事後に言うだけだ。外部のボランティアにこんな事を話したくない。しかし、誰も話を聴いてくれないと涙ながらに訴える。女性特有の繊細さと豪快さでセンター運営が出来ると思っていたのに？残念……辞任するのは時間の問題だ。

- 12/28 『こころのサポート市民の会』 東京ボランティアグループの仲間(3名)が年末まで南駅前住宅を拠点に活動が始まる。足らしとして情報誌配付をする。重いケースはいけない。温かく迎えてくれる家を訪問する。遠来のボランティアに辛い土産はいらない。

S地区で自治会主催の忘年会に参加する。一夜の宿もセンターにお願いする。殆どが出席するので、仮設内の雰囲気は掴めた思う。住民も東京のボランティアと大歓迎で楽しい忘年会が出来た。

- 12/29 遠来のボランティア用にイベントを計画する。T地区で一足早い年越しそばをする。150食用意する。仲間に調理師がいたので思いの外、少人数で美味しくできた。年末の活動ご苦労さんでした。

- 12/31 一年を振り返り事務整理 夕方6時ごろ『ふれあい姫路』の名古屋植田南小学校の新居教師から電話が入る。姫路に来ていると言われ、少しでよいからお会いしたいと言われ駅前に行く。28日からNGO連絡会のボランティアとして活動していたが、若者ばかりで……。

明日は子どもたちが文通している相手に会いに行くと姫路に来られる。先生も一年を振り返り、自分のクラスだけの関わりで、学校内、父兄間で勝手なことをしていると冷たい風が吹いているようだ。職場のあつれきは私も感じることで共通点があり深層部まで突っ込んで話し合う。私自身も整理ができ有意義な一時だった。年末年始の活動に敬服する。

平成9年

1/4 年賀の挨拶 T地区-Eさんの所へ行く。来年の正月は神戸で迎えたい。何時までも居りたくない。3回もここで正月はできない。問題も煮詰まってきて深刻さが増してくる。スラム化にならないように気をつけたいと住民側から思いが出てくる。

S地区-ふれあいセンターは年末年始24時間開放で利用者も多かったと聴く。今日も楽しそうにマージャンをしたりホーム炬燵に入りミカンをほうばっている。アットホームで自然に溶け込むことができる。今年も温かみのあるセンター運営を願う。

1/6 震災2年目でこころの変化を調査する。市内四ヶ所と雇用促進事業団の住民対象。時間経過と共に回復傾向であればよいが、回復速度は緩やか。恒久住宅への転居が進む中で、調査は今回限りとする。調査することで無理が生まれる。神経のすり減りもある。不特定多数の関わりが原則であるが、網の目からこぼしていくことも、この時期には必要だと思う。

1/8 NGO連絡会 定刻になっても会議が始まらない。遅くなる人は常習。ボランティアの資に関わることだ。会議内容は以前と変化がなく硬直しきっている。イベント結果とか事務連絡に終始してしまう。活動しているボランティアの思い・悩み・住民の思い等々についてフリートークする場でありたいと常々思っているが……。魅力に欠ける会になっている。本音が出ないから、終了後酒を酌み交わし気の合った仲間で本心で話し合える場所を求める。この事が悪いのではない。会議の中で出るべきことが出てこない雰囲気が悪い。全体会の発足当時の意義を今一度振り替えるべきだ。団体間の情報交換・調整・行政との連携等々が本来の目的と思う。参加するリーダーが今一度立ち止まり魅力ある会に再構築したい。正念場だ。

1/9 T地区-役員交代があり以前の雰囲気では活動が出来なくなる。腹一杯厭味を言われ活動すべきかこころが揺れ動く。個人的な活動であれば、直ぐにも引き上げる。20数名の仲間を思うと短気を起こせない。混乱期に自治会支援した事がこんな形で表れるとは、逆恨みされ、侮辱され何の為の活動だったのか…。

勝手に動くな、全部自分を通せ、活動結果を全て報告せよ。プライバシーに関することでも次から次へと平気な顔で話す・生活保護者は役員させない・生活保護所帯はどこか・受けようとする世帯は何処だとか機関銃の様に聴いてくる。活動後の個人情報の提供を求められるが、キッパリ断る。いやみで神経がすり減る。

1/10 昨日の出来事を心配して、H役員が休憩時間に来られる。団体の思いを話す。個人活動であれば何時でも引き上げる。団体に活動し、住民の皆さんが待っているかぎり活動する。なじられ、いいたい放題言われてもよく辛抱してくれたと慰めての言葉をもらう。気を取り直して活動するか……。

1/11 S地区-ふれあいセンターに入るなり、余りの変わりように唖然とする。何が起きたのか、閉

散として寒々しい。役員に聴くと先日酒癖の悪い人が、センター内で暴れガラスを壊し、植木鉢を絨毯の上に投げ込みセンター内が戦場になる。片づける気も湧かずガラス破片が散乱しているので土足のままでセンター内に出入りする。築き上げたものが一瞬の内に壊れ崩れてしまう。呆気ないもので、これまでの苦労が水の泡。ふれあい喫茶も閉店。事件が起きると住民同志の中傷が始まり、ボランティアがいる前でいやみの言い合いをする。『自慢の種』だったのに残念だ。Mは何日間か拘留されるが、出所後と事件の裏に隠されている……の問題が心配である。危機介入に備え専門家のアドバイスも受けたい。

T地区住民の方が、一部役員のいやみは、馬耳東風で聞き流し、言われることは有名税と思いこれまで以上に頑張るとと激励をうける『蚤にならずダニになって尻を隠すことだ』自己防衛を教えられる。

- 1/12 戸別訪問 S地区-ふれあい喫茶が閉店から閉鎖に追い込まれる。毎日朝食を取っていた人の落胆ぶりに心傷める。嘆きの声が大きいが、木っ端みじんに壊れたコミュニティーを現状維持するだけで精一杯だ。センター内を土足で出入りする事が忍びがたい。コミュニティーを踏みつけているようで辛抱出来ない。空き家の畳を持ち出し和室にしたい。これは早急に実現しよう。

空き家募集で公団に入居された方が、センターに遊びにきて開口一番寂しい。入居者と溶け込めない。今ごろ空き家に入居する人は、仮設の人と差別的に見られる、耐えがたい。恒久住宅入居は、絶対復興住宅に入りたいといわれる。空き家入居者からSOSを受信することがしばしばある。エネルギーがあり積極的に住民の輪の中に入っていける人は問題ない。行政支援者は選択肢を沢山提供すべきだ。拘留期限切れが近づくにつれ、Hさんは身の安全を考え、2〜3ヶ所の民間住宅を探すが、希望に合う場所がない。復興住宅が当たっているので、出来る限り辛抱すると言っているが……。一寸した物音でも目を覚ます。憔悴しきっておられる。一時的に知り合いの家に緊急避難する。事の重大さを理解しながら心揺さぶられる。ふれあい喫茶の責任者で緊張の糸が切れ、糸の切れた風だ。

住民・ボランティアの期待に答えようと無理された所もある。転移されていたことに気づかなかった。

- 1/15 雇用促進住宅へ救援物資と調査依頼をする。40世帯入居されているが、ボランティアの活動はない。機会を見つけて訪問したい。

- 1/16 M地区-家庭内暴力にあい、怖くて殺されると悲痛なSOS。以前から生活支援しているが、話しの辻褄が合わない。冷静に対応したい。

S地区-危機介入に対するボランティアの対応。

- ①不用意な言葉は慎む。
- ②自分を責める必要はないと繰り返し話す。
- ③被害者は全て悪くない。
- ④周囲の励ましも傷になる。
- ⑤周囲との疎外感が生じる。
- ⑥側が想像する以上に怖い状態である。

⑦報われなかった・惨めさの2段階がある。等の症状が出てくるから被害者の気持ちに添った
関わりをする。必要時には、スーパーバイザーの助言を受ける。(事件後2回受ける)

周囲の住民には、被害者の安全は住民で確保する。こころの吐き出しを受け入れる環境作
りをする。震災2年目を迎え「記念日現象」が出てくるので細心の注意が必要。

1/17 マスコミ取材 前日からパニック状態。震災2年目の「おもい」『イベント』等々の取
材。被災者に微かな光と一日も早い恒久住宅への転居を望む事と当日は、活動を検証し次の
展開を考える日にする。活動を支える家族に感謝を伝える。

1/19 『防災フォーラム』 T・S地区一住民対象に大型バス2台で、神戸ポートアイランドのに
招待する。天候も快晴で寒さもしのげる気温である。住民は自由行動。私たちのグループは、
事例研修会の仲間と共同で『仮設訪問・どこまでやるのボランティア・V』でワークショップ
をする。参加者は(40名)で関心度が高い。2部制で一部はボランティアの思い・悩み・活
動上の問題等々についてフリートーク形式で発信する。2部は2グループに分け問題を掘り下
げて行くが何一つとして問題解決につながるものはない。問題が社会構造上の問題で煮詰ま
り状態だ。活動は壁にぶち当たっている。こころに突き刺さった言葉は『ボランティア活動
そのものが負荷になっている』重みのある言葉。ボランティア活動は脇役であるが、今日は
主役。参加したボランティアの新たな出会いで事例研修会仲間が増えれば今日の意義がある。

1/22 T地区から転居した人から電話がある。店にテレビ取材が入るので、嵩上げに来てと誘われ
友達と行く。県会議員のグループと隣り合わせになる。これが仮設内で問題になるとは想像
もつかず収録に協力する。大雪で公共交通は完全ストップだ。

『一言コメント』 数日後戸別訪問に入るとボランティアがテレビ放送を企画した。何が自立だ…
…といやみをたらふく言われ挙げ句の果ては議員まで参加させた。ボランティアに何ができる。
一部の役員まで攻撃する。依頼され軽い気持ちで行ったことが、こんな結果になるとは……明る
い話題も共有できない。住民に苛立ちを感じる。

1/26 T地区一情報誌配付と戸別訪問をする。先日防災フォーラムに参加した障害者が久しぶりに
神戸の街を見て感動したと感謝の気持ちを伝えられる。足が不自由でこんな機会でないとは神
戸に行くことが出来ない。自分の目で復興状況を確認できよかった。

支援者と生活保護者の生活困窮と身体の不調を訴える人等の戸別訪問をする。支援者の目
にどの様に写ったか、ふりかえりで感想を求める。問題の大きさにただ驚く、何時もご苦労
さんとねぎらいの言葉を仲間一同受ける。

1/27 県民ネットの企画委員会 活動内容がいま一つ理解出来ないのと会議が事務局主導で内
容がない。グループの責任者が出席しているが、仮設住宅とか復興住宅で起きている事柄を
どれだけ分かっているのか……と言いたくなる。住民ニーズに答えられ、変化していく運動
でなければ空回りになってしまう。

県こころのケアセンターを訪問する。姫路の近況報告とアドバイスを受ける。

こころの支援は、最後尾の関わりで、仮設内で起きていることは、社会構造上の問題で煮
詰まって来ている。被災者支援は、援助者として沢山の情報を提供し選択肢を与えなければ

ならない。心が弱っている時は、一つの事しか考えられず視野が狭くなる。だから情報を収集し情報を発信する必要が有る。

立ち寄り話を聴いて頂く事で、こころの癒しとふりかえりが出来る。

1/28 T地区ー役員から、今直ぐセンターに来てくれと電話が入る。パブリックな仕事をしていると、仕事とボランティアの区別がつかない住民がいてほどほど嫌になる。これまでなかったことだ。以前からパブリックな仕事と地域社会でボランティア活動をどの様にすり合わせて行くか課題にしていた。プラスとマイナス面の両面が表れ、こころ痛む事がしばしば起きる。呼び出し用件を確認すると、個人情報が漏れ住民のクレームが役員に向けられSOSを発信していた。立場上知り得たプライバシーを流すことで自分の立場を作り上げた人に、何も言う言葉はない。ただ仕事とボランティアは区別して下さいと強く抗議する。

1/30 SOS S地区ーアルコール依存症の奥さんから受ける。量が増え手に負えない状態だ。一日でも平凡な生活を送れたら……ただそれだけである。と言いながらシッカリ支えている。本人が依存症としての認識がない（否認の病気）。家族が動かなければならないが動かない。行くところまで行ってしまいそうだ。

T地区で多額の借金の申し込みがある。あの人に借金しているので頭が上がらない。だから貸してと言ってくる。断るが、必要以上に食い下がられ根負けしてしまう。仲間にしてはならない事と言っていたのに、自分自身が貸してしまった。機会を見つけ仲間に報告しなければならない。

2/1 復興住宅見学会 県民ネットの助成事業土地勘がないので神戸のボランティアに道案内をお願いする。まず三宮のフェニックスプラザ館に立ち寄る。昼食後東灘区から順次住宅場所を見学しながら帰路に向かう。事前に室内の見学できる場所と思っていたが、残念ながら出来なかった。神戸の臭いを腹一杯すい命の選択が出来た。街の復興が見えた。望郷の念だ。申し込む場所を決めた。旧市街地へのUターンは無理だ。各人各様の思い出を乗せて帰路につく。

参加者の口コミで恒久住宅への関心が高まればこの上ない喜びである。前回は半数以下の申し込みで低調だった。今回は大きなうねりを期待したい。

2/2 T地区で戸別訪問と2月末から始まる復興住宅の応募一覧表を各戸に配付する。他の仮設住宅にも近々に配付したい。こころの癒しは恒久住宅への転居から始まる。今の活動目的は、納得した上での応募。行政支援者に迷わされることなく……。

2/4 事例研修会 先日シンポジウムに参加したボランティアも参加し新鮮さを感じる。マンネリ化している中で新風を吹き込んでくれる。

りんくう助け合いネットワークの仲間から遠隔地仮設をマスコミが取り上げ、主役と脇役が逆転しそうだ。取材が入る度に、本来の目的外活動になる。自立の妨げにもなりかねない。『勇気ある撤退……』とは、ボランティアの永遠の課題について相談を受ける。『継続した関わりは住民の支えである』と言いたいが、主役と脇役が逆転すれば引き上げを考慮する時期に来ている。時間をかけて引き際のミーティングを進める。何れ各団体とも訪れる問題で避けて通るわけには行かない。

T地区ー女性が男性を連れ込み酒を飲ませ泥酔状態にさせる。自宅の鍵も開けることが出来

ず、深夜に窓ガラスを壊し周囲住民を恐怖に陥れる。壊したガラスで手も血まみれになる。正気に戻り誰が壊したか……。情報を聞き関係機関に連絡する。事件が起きるたびに思うことは、プライバシーの確保がなく井戸端会議にになってしまうことだ。事件の裏に隠れている事に、焦点を当てた問題解決を望みたい。仮設住宅も法治国家の中にある。(収容所でない)。

- 2/6 仮設内引っ越し S地区－センター前から安心できる場所に移動する。センターに関わった辛い思いを断ち切り、身の危険も少し緩和される。本人も『ふれあいセンターから離れられる』『これでゆっくり寝ることが出来る』と一言話される。センターの関わりがこれほど負担になっていたとは……。自治会も彼女に全面的に頼りきっていた一面がある。自己犠牲の活動で無理が出てきた結果である。これに気付かなかった私たちも責任が有る。

『一言コメント』 すたーと長田の情報誌投稿『仮設住宅内で住民同志の中傷が気になる。皆で力を合わせたあの時の事を忘れないで』の記事を大切に保管していると住民から最大限の感謝を聴く。

- 2/7 神戸の事例研修会・連絡会・他グループから公的支援者の活動に疑問が生じているので社会資源に実情を訴える。(制度が出来ても最終的には人)

- ①職務上知り得たプライバシーは他言しない。
- ②職務以外の活動は関わりを持たない。(一線を引く)
- ③知りえた情報を住民と共有しない。
- ④自治会運営に関わらない。
- ⑤ボランティアから情報を取るな。(自分の足で収集)
- ⑥光熱費の滞納まで関わるな。
- ⑦話に傾聴すること。噂を流さない。
- ⑧ボランティア活動に関与しない。(独自性の良さ)
- ⑨住民意向を大切に……。早急な復興住宅への斡旋はしない。

各仮設住宅で起きている事例を出しながら支援者の質の向上をお願いする。

行政とボランティアの連携は、個人情報交換でなく仲良く活動することである。

T地区で自動車の自損事故で商売道具がなくなるとSOS。貸し付け制度等のアナウンスをする。深いかわりは禁物(自立を妨ぐ)

- 2/9 講演 姫路市内の民生・児童委員の研修会(70名)で『こころのケア』についてお話しする。相互扶助と仮設住宅で起きている事は、地域でも起きていることだと発信する。

T・S地区－バレンタインチョコにメッセージを添えて戸別訪問する。思っても見なかったと大変な喜びである。メッセージも手書きで真心が通じ久しぶりに楽しい活動になる。

仲間のボランティア(高校2年生女性)の自己成長の著しさに感激する。ボランティアの成長が何者にも変えがたい嬉しさである。母親も娘の成長が見え、『明るくなった』『笑っ張っていた娘が、活動の話をしてくれる』と伝えてくれる。

初参加者の感想。暗い所と思っていたが、明るく生活されていた。……仮設住宅のイメージがあまりにも暗すぎる。

T地区－役員が、生活保護者の飲んだくれは保護費を打ち切るとか、公的支援者が『おい・何している』『何で食っている』と人を食ったような・見下げた言い方をすると多数の弱者が涙ながらに訴える。辛くて『減入ってしまう』と泣き崩れる、活動限界を知らながら、気持ちに添った支援をお願いしたい。

2/10 突然FAX 青森の『みちのく銀行』から。先日NHKの放送を見て、貴方の団体に活動資金を援助したいとの申し出。これほどの感激はない。この喜びを仲間と共に共有し次のステップにしたい。地道な活動が遊来者に認められ光栄である。積極的に活動資金の調達はないが、地域での援助は皆無なのはさびしい。

2/11 事前了解をえて新入生の子どもに勉強机と自転車を持ち込む。昨年あるグループが頭ごなしに物品を持ち込み相手を傷つけた事がある。支援者も要支援者も同じ立場、上から覗き込む支援者は失格である。

2/12 酒害教室 S地区でを開く準備にかかる。当然保健所の所管と思ひ話を持ちかけるが、予算がないと取り合ってくれない。これほど社会問題になって震災地では行政が積極的に関わっているのに。遠隔地では冷たい。ボランティアが動くしかないか。

2/14 活動展開のアドバイス

スーパーバイズを受ける。パレンティンダーでスーパーバイザーからチョコを頂く。心優しさに心が癒される。

①今の活動は、震災ボランティアから福祉ボランティアへ移行している。当初活動の整理をする。長期の関わりが大切に活動濃度を薄くする。

②一度これまでの活動を評価・整理し今後の取り組みについて仲間と話し合う。

③スーパーバイズを定期的に受けたい。受けないと心の支えがない。

④活動資金の問題もあるが、長期展望を立てたい。

⑤調査については、行政補完的要素もあり無理をしない。

⑥距離感が取れるようになったが、気持ちが冷たくなった。冷たくなれる人ではない。

⑦院生の健康度調査で無理が生じていた。全住民に網をかけ嫌われないように緊張の連続であった。ストレスが蓄積した。今後は出来る人に出来る事だけ取り組めばよいと思うと気持ちが随分楽になった。

⑧パブリックな立場で辛いことがあるが、長期に関わってほしいからポチポチやって……。問題が煮詰まってくるからボランティアも気をつけること。

助言を受けながら活動評価と激励を受ける。時間を取って仲間と協議したい。

2/15 社会弱者仮設内移動 T地区－本人の了解を取ったと言うが、判断出来ないのに何が了解か。親権者に確認を取ると事前了解は取っていない。共生の時代といいながら邪魔者を追いやろうとすることに怒りを覚える。これは人権問題だ。

行政支援者が生活費・医療費がないと聴けば、職権で連絡先を探し、長年音信不通の親族に連絡を取り現金を送らせる。何を思っ……。本人は寝耳に水。個人プライバシーに入りすぎる公的支援者の拭き掃除をしばしばボランティアがする。頭がパニックになりそうだ。

2/16 T地区－復興住宅特集号の広報誌を各戸配付しながら、応募を促進する。『住めば都』か、以前のように元居た所へ帰りたいの声が小さくなっている。現実をとらえあきらめの境地？ 姫

路も環境がいいから姫路にするか？……こころの揺れが見え隠れする。自分の気持ちを大切にして最終判断をしてほしい。

〔旧役員の声〕今の役員は何をしているのか？エネルギーのある人がセンター運営に関わっているから何も言わないことをいいことに、ワンマン運営している。救援物資も関わる者が上手く配分している。声を出せない人が、毎日のように私の家に来て苦情を言っている。どなたがなってもやっかみがあり大変な地域社会が生まれている。

S地区-Eさん恒久住宅問題で自分の行く末を思うと眠れぬ日々が続く。不安定で先が見えずどうなるのか不安の連続である。床につくたびにこのまま目が覚めなければ幸せなのと思う毎日である。高齢者、障害者に一日も早い生活基盤の復興を願いたい。

T地区-戸別訪問で『..さん、母親の自立を妨げるような事はしないで』と玄関に張り紙がある。何故・何故あれだけ信頼してコミュニケーションが出来上がっていたのに……。何が起きたのか、何か失礼な事があったのか、思い当たる節がない。張り紙した息子さんに真意を確かめたいが、今日は不在である。衝撃的な張り紙である。

(母親は、震災後脳溢血に倒れ、下半身がマヒし寝たきりである。息子とは同じ仮設で別々の部屋で生活している)

〔張り紙の一部〕

仮設から出ていった後、ホローが出来ない人に親切にしてほしくない(5月に公営住宅転居予定)

ふりかえりで次の事を話し合う。

①ボランティアの気ままな関わりと、子どもと比較され厭味を言われた。

②もっと関わってのSOSだ？

③気ままに関わるのではなく、毎週日曜日には必ず来ることをハッキリしてほしい。

以上の事を話し合った。

確認後の息子さんの言葉。本心が伝わらなくて申し訳ない。お世話になって感謝している。気儘なことを母親が言っているので、ボランティアに迷惑を掛けていないか心配してあの様な言葉になった。母親も楽しみにしているので行ってやって……と話された。やはりSOSの発信だ。

①看病疲れでどうにでもなれと言う気持ちになる。

②死んでほしい。殺してしまいたい。自分の生活がない。5月に帰った後が心配だ。

③ライターをヘルパーさんからもらい、私を威嚇したことがある。火をつけるのであれば中途半端では、死ねないと言うと横を向く。

④今日から手足をロープでベットにくくりつける。本人も了解している。

⑤おしっこ・うんこが出た時にじっとしてくれたら処理しやすいのに、おむつに手をやり手の届くところに手当たり次第つけまわす。本人は分かっているが無意識になってしまう。

⑥うまく死んでほしい。

⑦神戸に帰る時、途中で落として帰りたい。

⑧自分の人生はない。

⑨仮設住民は口だけで誰も助けてくれない。

- ⑩最後は自分である。自分が頼りである。これでは共倒れである。
- ⑪死に方を教えてくれ。
- ⑫嫁と離婚していてよかった。
- ⑬妹夫婦には関わりを余り持ってほしくない。妹の主人に申し訳ない。家族にひびを入れたくない。いくら理解がある人でも……。
- ⑭一週間に一度は看護婦の訪問と月一回は区署が来る。
- ⑮ヘルパーにも言っているが、ボランティアさんにも伝えたくて張り紙をした。見た後ははぐってくれると思った。(張られたものは勝手に取れないよ)
- 活動に感謝している。訪問を楽しみにしている。先日のバレンタインデーのチョコレートとメッセージは嬉しかった。
- 最初はやらなければと思っていたが、今はそんな気持ちも何もない。早く死んでほしいそれだけである。看病疲れで殺人事件を起こす人の気持ちはよく分かる。
- 死にたい死にたいと言うので、洗面器に水を入れて顔をつけると横をむく、薬も飲むし生きようとしている。
- 施設に入れるにも順番があってままだらない。
- 話される一言ひとことに重みがある。社会構造上の問題として片づけられない問題が山積している。
- 限界を知りつつ、空気のような支援をしたい。

『一言コメント』お年寄りの言葉、「ボランティアも住民の数が少なくなればこない。」

『いいえ、最後まで来るよ』

『ホント？……一人になっても来てねえ？安心した』

2/18 アルコール依存症 T地区-患者の方ととばったり会う。近寄ると酒の臭いがプンプンしている。入院中なのだと思う気持ちと、一時帰宅しても一人暮らしで誰の出向かえもない孤独感・孤立感を思うと自然にアルコールに手が行ってしまう。病気であることを理解したい。『呆れたり・衰れであったり・これほどまで思っているのに裏切られる気持ちのやり場のない気持ちに落ち込んだり・可哀相・治らない病気』と揺れ動く。光熱費の滞納で明かりを取ることも出来ない。寒さを凌ぎながら一人で何を思うのか、兄弟からも見捨てられ孤立のどん底。家族・親族の温かい支援が必要なのに支援する人がいない。治らない病気なのか、治る病気なのか、アルコールに自然に溺れてしまうのか、手が行ってしまうのか、退院後は断酒会に入るだろうか、ボランティアの関わりを考えさせられる。

『恒久住宅のメドが立った……この嬉しさを一番に報告したかった』と弾んだ声が受話器から飛び出てくる。主人が職人で年収も結構あるので復興住宅の減免は受けられず落ち込んだ。公団住宅が明石にあり急に入居が決まった。楽しい電話は嬉しくエネルギーをもらえる。

2/22～23 『ふれあい姫路』 名古屋市立植田南小学校の一年越しの事業がやっと形になって現実の物になる。企画は楽しさもあり苦しさもある。今回は特に遊来の子どもを一泊で受け入れるのでそれなりの緊張感と責任がある。受け入れ先も気持ちよく引き受けてくれるセン

ターとそうでないセンターとがあり神経をすり減らす思いだ。

センター前に歓迎垂れ幕で温かく迎える。食事の準備は大人の役目で子どもは2～3人組で戸別訪問に入る。今回は時間制限がなく、心行くまでふれあいが持てる。夕食は住民と共にセンター内で楽しくカレーを食べる。今日のカレーはことのほか美味しいと、お代わりする人もいる。皆で食べる食事がこんなに美味しいとは……。食事後はスライドを利用して震災当時の事を住民とともに見る。パニックになる人も出ず、住民の説明を取り入れながら悲惨な当時を話し合う。センター内の雑魚寝も楽しい思い出になるだろう。気苦労もあったが、無事に『ふれあい姫路』が終了した事に仲間と共に喜びたい。言いたい人は何をしてもクレームはつけてくる。

『ふれあい姫路』の感想文は……に掲載する。

2/24 復興住宅入居者 SOS (60才男性一人暮らし)

- ・誰とも話さない、出来ない、出来るような雰囲気でない、仮設が良かった。
- ・仮設に立ち寄ると、出ていった者が何故来るとセンター役員に厭味を言われる。
- ・仮設内の女性宅に立ち寄ると、出来ているのかと中傷される。
- ・心配な人もいるから訪問している。
- ・一人なので孤独死が心配である。倒れたときが心配だ。倒れても信号が出せない。
(仮設なら声を掛け合っていた……嫌な人でも)
- ・隣人に非常時の為に鍵を預けると言っても預かってくれない。
- ・誰を頼りに生活してよいのか……。

ボランティアとして、いやみを言われながら仮設で戸別訪問するよりも、復興住宅へ活動拠点を移すべきか悩んでしまう。ボランティアが希薄な場所に移ることで新たな展開が見えてくる？……。

2/25 M地区-高齢者(91才)風邪と精神的なイライラで睡眠薬を飲み過ぎ、・晩中板の間で倒れていた。発見され事なきを得たが、それ以後体調がすぐれず気落ちされている。前回の復興住宅応募時は、気力が充実していたが、今回の事で自分一人では生活できない。いつ倒れるか分からない。復興住宅には入居出来ない。入居しても生活できない。仮設のように周囲の人が関わってくれない。このまま仮設に居たい。家内の3周忌(4月)まで元気で過ごしたい。話される言葉に張りがなく前向きな話が出てこない。高齢者に一日も早い復興住宅を願う。

T地区-女性。昨日夢を見た。玄関口で人が倒れ死んでいた。毎日睡眠薬を飲まないで眠れない。住民の中傷で、洗濯物も外に干せない。カーテンも締め切ったままだ。朝、目を覚ました後、一時間程何をするわけもなく一点を見つめている。皆が心配してビール・お酒を持って来る。依存が強くなり依存症が心配。光熱費も節約され、日没までに食事を済ませる(大根の煮つけ物が段々色濃くなる・室内が暗くなって行く現象)テレビは見ない、ラジオで辛抱している。センターから疎外され鬱状態に陥る。

2/27 『人権問題とプライバシー保護』について取材を受ける。仮設内で起きている事実を発信する。弱者が物を言えないことをいいことにはないがしろにしている事実を話す。

……財団の依頼で『ボランティアのフォローアップ』について実践の中から学びとったこと

を話す。

2/28 『酒害教室』 S地区－兵庫県精神健康福祉センターの麻生先生（精神科医）を招き住民対象の勉強会をする。

社会問題になっているので関心度が高いのか、仮設内で対象者が多いのか参加者の多さに驚きを感じる。

- ・依存症には、アルコール、ギャンブル、浪費、薬物、過食などがある。
- ・し癖行動のひとつで、『はまる』ことで一つの行動を反復することをやめられない。
- ・自分への自己評価が下がったとき、自己拡大感を得るためにし癖行動をする。これらの人に共通するのは、『自閉性』である。他人との交わりで自己拡大できない。自閉と依存は関係している。
- ・アルコール依存症は『否認』の病気である。けして病気であることを認めない。
- ・アルコールで損したこと、得をした事を冷静に考えてみる。
- ・『ちょっとぐらいなら飲んでも構わない』との言動は厳に慎むこと。少しでも駄目である。
- ・節酒ではなく辞めること。一度手にすると元に戻る。
- ・依存症の治る薬はない。
- ・断酒会に入り仲間がいる事を知る。夫婦で参加する。

【講演後の質疑応答内容】

- ①アルコール依存症ではない。何時でも辞められる。（いつも同じ繰り返し）
- ②一人暮らしで寂しいから飲む。ペットを飼っている。
- ③入院歴がある。人間の入る所でない。自由がきかない。
- ④本人の了解なしに入院させ退院後後悔みをされ毎日が地獄だ。（家族）
- ⑤晩酌で量が多いが依存症にならないか。
- ⑥娘婿が心配だ。
- ⑦断酒会の所在は？
- ⑧アルコール依存症は病気か？
- ⑨治る病気？

関心度が高いので、次回はアルコール依存症から立ち直った断酒会の人を招いて勉強会をする。

3/2 復興住宅見学会 県民ネット助成事業で今回もフェニックスプラザに立ち寄り写真とスライドで復興状況を見る。昼食後、東から順次建築現場を見学する。参加者の中には91歳の高齢者も含まれている。つつい欲を出し前回以上の場所を見学し強行軍になる。応募期間中なので見学者の眼差しも真剣そのものである。ここに決めた、あそこにと迷っていた人の判断材料を提供できそれなりに意義があった。

『一言コメント』昼食時ビールは個人負担で500円とする。一人一本と言ったのに飲み放題。持って帰ってもよいのかといやみを言う。感謝の気持ちが伝わってこない。

3/3 T地区－毎週月曜日に『お茶の会』をしていたボランティアが撤退する事を聞く。ご苦労さ

んでしたと直接責任者に電話し労いの言葉とデフリンゲの必要性を話す。初期の目的を達成され勇気ある引き上げである。タイミングがよく、羨ましい。先越されたと思った。

地域に根づく福祉ボランティアとして期待したい。

- 3/7 震災記録案作成の『復興住宅応募手引き書』を各仮設住宅へ配付する。少し遅いようだがまだまだ決めかねている人もいたので参考にしてほしい。

弱視者の復興住宅申し込みの代筆をする。公的支援者には言いたくないと言われる。

一部損壊者(2世帯)が、応募出来ないイライラをボランティアに向けられる。次回までに行政に実情を訴えて行きたい。

『悩みながらのボランティア活動』記事を見て『住民が感謝の気持ちを持たなければならない』と励ましの言葉をもらう。『貧乏しているが、ここまで貧乏したくないと嘆いておられた』

- 3/16 ボランティア感謝祭 T地区-住民主催。今日は主役と脇役が逆転である。ボランティア数の多さに驚く。住民の本心から出たものなら本音で喜べるが、ボランティアの仕掛け人がいると聞き本心から喜べない。援助について今一度考え直す必要がある。

援助の究極の目的は『共に生きる』ことか。

援助者の存在感が強すぎではならない。支えるとは空気のようなもので『灯台効果』である。直接足元を照らして方向性を示すものではない。援助者がいることを知らせることで、緊急時には助けてもらえる事を知っていることで人は救われる。社会資源やボランティア団体は援助の用意を知らせることで援助の50%は達成できる。

60才の男性がもう限界だ。『上手く死ぬる方法を教えてくれ』と訴えて来る。限界というより生きる望みがない。将来が見えない。復興住宅に当たっても家賃が払える状態ではない。仕事がなく、働くところがない、普段無口な方が、切実に訴える。自分に対する今一番の支援は『死ぬ方法を教えてくれることだ』……正雨から事実と向き合う事が大切。

- 3/17 活動記録集作成の助成申請に対して朝日新聞文化厚生事業団担当者のヒヤリングを受ける。

活動資料と内容を伝える。遠隔地仮設で活動したボランティアが記録を残すことは責務と思う。しかしこれ以上仕事量は増やしたくない。迷う気持ちを伝える。

- 3/19 『活動撤退』 りんくう助け合いネットワークの講演。

組織を立ち上げるエネルギーよりも引き上げ時のエネルギーが数倍必要。住民が少なくなり社会資源の網に掛かるようになれば引き上げ時期。いずれ姫路でも訪れる撤退時をオーバーラップさせながら、勉強させていただく。同じ遠隔地団体として情報交換した仲間が組織をたたむとなれば感慨無量だ。

引き上げを分析すると次のようになる。

当初は、遠隔地仮設でボランティアの関わりがなく、友愛訪問を主目的に組織を組み立てる。マスメディアが、県外遠隔地にスポットを当てだし問題が生じてくる。主役が逆転しボランティアが自然の内に自分達を見失って行く。『やらせ』『相談なしに手をだす』『プライバシー侵害』『センター内での酒盛り』等々があったと聞く。各団体で起こりうる問題で問題提起を受け反省材料になる。

- 3/21~23 『花見の会』 東京ボランティア『こころのサポート市民の会』と小規模団地(M

地区)で一足早くする。小規模団地ではボランティアの関わりがなく91才のお年寄りの参加もあり盛り上がる。『人に感謝・物に感謝』『人は人に寄って支えられる』一言ひとこと重みのある言葉が出てくる。前向きな話のなかにも明日への不安が滲み出ている。

ポートアイランド仮設を案内する。生活環境の悪さにほどほどあきれる。市民は日常生活に戻り温度差が出ている。当地を訪問する都度その思いが強くなる。遊園地での楽しい家族連れ、歓声を聞きながら仮設住宅内の思いを考えると感無量になる。

午後からフェニックスプラザで『生きがい・うるおい』のフォーラムに出席する。いどばた会議の活動内容等を理解し、東京で生かしてほしい。

T地区ーこころと身体の体操(ぼかぼか体操)をセンター前広場でする。空き部屋の畳を敷き並べ新鮮な空気をお腹一杯吸いながら身体とこころをほぐして行く。後は車座になっておはぎを食べながらお話をする。今日も天候に恵まれ35名も参加してくれる。次はS地区で計画したい。

3/24 東灘区で被災され姫路に永住すると自立再建された奥さんが個展を開かれる。児童委員として子どもとの関わりが縁で知り合いになる。活動資金調達もあり全面的に協力する。マスコミも大きく取り上げ、前評判も上々である。出来る限り手伝いする事にする。

3/26 年度末が近づくと活動支援者に報告事務があり追われる日々。

社会資源が関われない問題があり、一度訪問して確認を取ってほしいと依頼があり引き受ける。起きていることは事実だった。時間をかけて関わりの中から問題解決したい。

3/29 ワークショップ ハートネットワークセンターから講師を招いて。

【課題と問題点】

①行政の補完的役割をしているが、これで良いのか悪いのか迷いがある。

当てにされて動く、動くから当てにされる。これの繰り返しだ。当てにされると心地はよいが……。

②住民間のいじめがある。いじめることで安定している人がいる。ボランティアの対応は……。

③一部役員と関係が険悪である。役員の為に活動していないと分かっている辛い一面がある。

④高校生(女性)

仲間のように人間関係(住民間)が上手く行かない。……。

活動意義について考えさせられる事がある。……。

・貴方には若さと言う武器がある。無理しないで自分の出来る範囲で活動すること。

相性等があって誰だってオールマイティーではない。

・話を聴くことしか出来ないが……。

話を聴くことは、話すことより難しいことで、エネルギーがいる。聴くことは素晴らしいこと。

・住民と一部役員の関係が気になるが……。

無理をしないこと。人間は癒されることで生きていける。閉じこもりがちな人に関わりを持つ。

⑤主婦（55才）

- ・退去される喜びと別れる辛さが交差する。
仮設から出ていかれることが自立であり、寂しい一面があるが快く送ってあげよう。
活動は仮設だけでない。地域ボランティアへ……。
- ・一人暮らしの老人（女性）との関わりで一年ぶりに部屋に上げてもらった。
被害妄想があるが……（盗難がある。隣人が亡くなった。）
被害感があり、老人性の精神障害がある＝関わっていいのか……。
気持ちに寄り添うだけで物事を強調しない。
老人は過去の良き時代で支えられている。評価してあげる。
古き良き時代を聴いてあげたり、良き時代を共有する事で、安定できる。
進行を少しでも遅らせるため、良き時代を思い出させる。
相談は一時間が限度で相手が終結しない場合は、こちらから伝える。
- ・最初訪問を拒否されていたが、今はボランティアを当てにされている。
息子と母親の両者を一人で支援するのは大変だ。仲間と分担することも考慮すべきだ。
支援することで息子が母親を柔らかく見られるようになった。
息子と母親が互いに思いやりの気持ちが出てきたようだ。
老人の最後を見取することは辛いことである。
残り少ない時間を良き時間にするためにハートの部分を良くする。
- ・女の人には安定しているが、男性は不安定だ。

⑥女性（40才看護婦）

- ・ボランティアの活動とは……。
こころの支援は最後尾を走るボランティアで無理しない範囲で自分の出来ることだけ関わる。
- ・分裂病との関わりは……。
専門家に任す。ボランティアは孤独、孤立しない関わりでよい。

⑦男性（45才自由業）

- ・一年ぶりに話を聴くと状況・問題が深刻化している。
- ・もし姫路市民が仮設に入ったらと思うと背筋が寒くなる。
- ・男はプライドが高く理詰めで物事を考えるので話が聞き取りにくい。

⑧男性（18才高校生）

- ・住宅内で苛めがあり心配だ。
苛める人も苛められる人も問題がありそうだ。
弱いところを見せまいとしている。優越感を持っている。
- ・印象的な人は、入居後インスタント食だけの人がいる（精神弱者）

⑨女性（50才介護士）

- ・ボランティアと住民との関わり方は……永遠の課題である。
- ・今一步話が聴けない。相対する人（悪口を言い合っている人）の話を聴いた時の対応の仕方。

距離をおく。その時その時で話を聴く。正面から聴かないで斜めで聴く。

・話を聴いて辛くなる事がある。自分にすり替えてしまうことがある。

真正面から見ないで斜めから構える（相手に失礼ではない）

話を切り換えすと、相手は分かってたまるかとは言わないが敏感に受け取っている。

ただ聴いてあげるだけでよい。

⑩1月から参加している人が、活動後のふりかえりを評価される。皆でふりかえり共有できる事ができ素晴らしい団体であると最後の締めがある。

今後も無理せず『自分たちの出来る範囲で、出来ることだけ』の活動方針を再確認する。

3/30 T地区ーアルコール依存患者が退院するなり、医者が少しなら飲んでもいいと退院早々飲んでいる。近所の女性が酒を差し入れてくれたと喜んで飲んでいる。どうすることもできない。3ヶ月入院してこのありさまだ。本人はもとより理解ない人が退院祝いに差し入れするとは…

私たちの関われる問題ではない。もう限界だ……。

4/1 一年前に空き家募集で復興住宅へ転居された男性（70才）からの電話。

開口一番『寂しい』。空き家に入るのを被災者と周囲の住民は冷やかな目で見る。見られている。周囲の人と関わりが持てない。子どもでもいたら子どもを媒体に近所付き合いができるが。男の一人暮らしでは何も出来ない。同じ階の人と挨拶を交わす程度だ。県からの情報も入らず、テレビ・新聞でしか得ることが出来ない。慌てすぎて損をした。ゆっくりすればよかった。団地内に6所帯入居しているが、確認できない。自分で捜し出すエネルギーはない。分かればグループを作り互いに分かち合うことが出来る。近所に娘さんがおられるが、日常的な関わりなのさを話される。

4/5 大覚寺の説法と龍門寺のお茶会 S地区ーアサヒオークのご好意で住民と参加する。姫路での思い出の一コマになれば幸いだ。

『明日の希望が持てない』と口癖に言っている人が居る。今日の説法で少しでも『人間とは』『生きるとは』を自分自身の問題として一時でも考える場所が与えられた。

活動エネルギーの出し惜しみをしないでドンドン使っていきたい。榊さんが、チャンと空から見ていて袋に一杯詰めてくれる。使い果たせば補給がある。

4/7 S地区ーLさん昨年の7月から隣人と恋愛関係になる。一人者同志が一緒になれば食事もし美味しく食べられる。しかし彼女は常備薬？を何時も飲んでいて。妊娠が心配で薬を飲まない。飲まないから精神的に安定しない。今日も涙を流しながら彼が私のことを分かってくれない。近所の人でも理解してくれないと縋るように話す。一ヵ月に一度感情の起伏があり居たたまれなくなる。薬を飲むと安定するが、妊娠を心配して飲めない。聴くだけで気持ちが落ちつく。

4/9 警備会社から電話が掛かる。何かと受話器を取るとT地区のEさんが面接に来ている。お酒の臭いがする。面接の中で貴方の事が話に出たので連絡した。この状態では採用出来ないが、どう思われると下駄を預けられる。話す事は何もない、只困っているから使ってとお願いする。就職先の責任までは持てない。（アルコール依存患者）

長期の仮設生活で栄養バランスを崩す人、蓄えが底つき生活が困窮している人、中高年で仕事につけない人のイライラ、医療負担が出来ず病院へ行けない人、恒久住宅の見通しの立

たない人等の問題が山積している。煮詰まった問題を慎重に社会資源につないでいくことが大切な時期だ。

4/11 S地区-Jさん。お金がないので2~3日何も食べていない。このままソッとしておいてと言われるが、見逃すわけには行かない。生活費をそっと置いて立ち去る。口癖で依存が強くなっている。

4/13 温かくなり参加者も多く今日は活気がある。仲間のマッサージも3回目で住民の受けもよい。マッサージしながら身体とところをほぐし、スッキリしたと帰って行かれる。媒体が変われば変化が生じる。

4/17 転移現象 S地区-女性が、今日から仕事に行かれる。行くことを誰にも言いたくないが、ボランティアさんには言っておきたいとわざわざ電話をくれる。以前から仕事に行きたいと4~5ヵ所で面接を受けるが、仮設の人は駄目と断られたり、時間給が極端に安かったりで、適当な仕事が見つからなかった。最後と思って行ったら快く引き受け明日から行くことになった。弾んだ声で嬉しい連絡を受ける。仮設の住民は仕事もせんとブラブラしていると言われるが、現実には厳しい。

4/20 定例戸別訪問 T地区-お年寄りが必要な方を対象に訪問する。元気印の女性から私たちの所も来てよといわれる。少なくなったといっても100所帯を回りきることは出来ず重点的に訪問していると、こんな言葉を聞く。無視された、空元気だとSOSを発する。限られた人数では限度がある。

またまた、役員が毎回活動後逐次報告してくれと強引に言われる。プライバシーに関わることは言えないと突っぱねる。段々と活動がしにくくなって来る。県保健センターの医師が見えてこれから関わりを持ちたいと言われたから、『貴方たちの活動は不必要になる。何をしているのか分からず活動後苦情が耐えない』と感情的にいわれる。何を言わんかである。県の保健センターも一度か二度の関わりなのに継続的な関わりを持ってくれると考え違いしている。説明不足か？何故か分からないが、行政支援者も説明上手になって頂きたい。とばかりを受けるのはボランティアだ。厭味と言われることでストレスがピークに達する。

4/22 T地区-役員からボランティアの名簿が欲しいと連絡が入るが断る。断っているのに社会福祉協議会ボランティアセンターに出向き個人情報を受け取る。出す側も出す側だ。団体登録用に提出しているのに、目的外に個人情報を提供するとは……。ボラセンに抗議するが、考え方に相違があり話にならない。怒りがこみ上げてくる。

5/2 T地区-温厚なお年寄り(男性75才)。仮設内で嫌なことがあり、早く神戸に帰りたい。自然環境の良い姫路に永住したいと常々言っていたのに何が起こったのか？。無言電話が深夜に何回も掛かってくる。住民同士の中傷合戦があり心痛む事が多くある。入居当時のことを忘れず思いやりの気持ちで退去まで過ごしたい。人の噂と悪口は聴きたくない。仮設間移動を考えたい。居るのが嫌になった。

5/3 『仕事塾』パンフレット 市内4ヶ所-前回住民から案内文が届かなかったとクレームが付き、今回は直接書類が届いたので手渡しする。

『子どもの日』行事で子どもたちにプレゼント(金太郎菓子)する。手渡ししながら、戸別訪問する。S地区-自治会と共同で柏餅を配付する。

Eさんが初給料をもらったので職場で作った『いかなごのくぎ煮』を頂く。何ものにも変えがたい心温まるプレゼントをもらいボランティア冥利に尽きる。

復興住宅当選者に通知が届く、結果的には今回も1割弱の当選率で以前と同じである。この状態では仮設住宅の解消は何時になるか分からない。高齢者優先で91歳の男性がシルバーハウジングに当選したことが特筆である。当選したら当選したで張り詰めた気持ちが切れると先行きを心配する。高齢者の一日は若者の一年に匹敵する。一日も早く恒久住宅に入居してほしい。

5/4 T地区ー復興住宅一元化募集時の入居者は117世帯でその内応募者は64所帯である。この数字は何を物語っているのか？仮設が仮設でなくなって行く中でボランティアの関わり方は？考えさせられる。

5/5 活動記録集作成のため、蓄積した活動記録の整理に取りかかる。整理しながら改めて住民の思い、悩みをふりかえり、見逃していることを再度思い出したり、住民ニーズの変化や積み残し案件を整理しながら、ふりかえりの必要性を今更ながら噛みしめている。

5/7 住宅当選者と入居者実態調査をする。随分退去が進んでいるが、何処へ引っ越ししたのか分からない世帯もある。余裕があれば追跡調査してみたい。

S地区ー戸別訪問で生活が苦しいとSOSを発信する人が増えている。蓄えが底つき何も食べてないとか、明日の希望が持てないと投げやりな人が目立つ。今日も何日も何も食べていない。冷蔵庫も何も入れるものがないと電源を切って肯カビが生えていると扉を開けて見せる。社会資源に連絡すると、『何時までも仮設、仮設と言って特別扱いしない』と冷たい返事が返り、怒り心頭。自治会役員・担当民生委員と連携しながら、対応しないと問題が生じる。発見が早くて事なきを得たが、冷たい対応で手を差し伸べないと餓死する人が出るかもしれない。問題が起きないと拘予定規な対応から脱皮できないのか！

アルコール依存症のDさん今日も朝から根を下ろしウイスキーをストレートで何杯も飲んで奥さんに暴力を振るったり、ペットに当たり犬が脅えている。訪問中も奥さんにグラスの水を頭から被せる。以前はなかったことである。こんな状態で奥さんも良く辛抱しておられるなぁと感心する。しっかり支えて共依存の典型だが、支えることが……に変わっている。抜き差しならぬ所まで来ている。近所の人・ボランティアが関わりを持つことが依存させる結果につながる。冷たいが、行くところまで行って緊急入院するか、早く入院させるか二つに一つである。当事者能力に任すしかない。

5/9 緊急入院 S地区ー戸別訪問で救急車を呼ぶ。以前から食事は殆ど取らず、痩せ衰えていたので心配していたが、入院の結果末期ガンである。もっと早くと思う気持ちと、立ち入れない所もあり、ボランティアの限界が出る。家族、親族の関わりを今一度考えてみたい。問題が起きたあと近い所に兄弟が居たとか子どもが居たと聞くことがある。一週間いや一月でもよいから家族が訪問したり、電話コールでもよいから関わってほしい。親族しか関われない問題もある。核家族化が進み家族の関わりも希薄になっている現実もある。高齢化社会を迎えるに当たり深刻な問題が仮設で起きていることを捉え、一度家族関係とか家族の絆について考えて見たい。

5/14 市内の復興住宅入居者が、ボランティアさん何とかしてと連絡が入る。

新旧住民の交流が取れない。地獄を味わっている。扉一つで監獄だ。旧住民は無関心を装って無視している。こんな状態なので活動してほしいと頼まれる。火中の栗をひらいに行くような事は今のエネルギーではない。被災者の甘えが出ているように受け取れる。慎重にリサーチしたい。

5/15 神戸に情報収集のためよく出向くが、3日続くと流石に疲れる。

事例研修会であるボランティアの活動引き上げ時の問題提起がある。閉じこもりがちな高齢者（女性）が『もうこれ以上の別れはしたくない、気が狂いそうだ』と話された。対応方法の相談を受ける。被災後一度も神戸（長田）に帰らず望郷の念で長田に帰りたいの一端である。背の面影を追いかけ現実が理解ができない。ボランティアが選択肢を出すことで、気持ちの整理ができる。全員が引き上げするのではなく、地域ボランティアが今後も個人として友愛訪問を続けることをハッキリ知らすことで問題解決につながる。

活動から引き上げる事は罪悪感とか敗北感を持たない。言葉で理解できても後ろ髪を引かれる。引き上げ際の難しさを深く感じる。

5/18 市内4ヵ所－仮設住宅へ県民ネット引っ越しボランティアの案内情報を配付する。引っ越し時のネックは引っ越し費用の捻出である。遠隔地は神戸まで距離が有るので割高になる。私たちが土・日曜日は今後も協力していきたい。

T地区～役員間のトラブルでパトカーが出動する。権力の座につくなり前後が分からなくなる人がいる。大事件にならず事なきを得るが、何が起きても不思議でない状態である。

退去が進む中で空き家が増える。虫食い状態だ。今日も人けのない所で枯れ草が燃えていた。原因がハッキリしないが大事故につながる。

又々ふれあいセンターでいやみを言われる。何が原因で矢面に立たないといけないのか？毎回毎回同じことの繰り返しで、壊れた蓄音機だ。そこまで言われて活動する自分たちは何なのか、強いのか、馬鹿なのか、人間が出来ているのか分からない。一部の人に振り回されるグループは何なのか……。社会資源と連携を取れば取るほど溝が深くなる。震災後ボランティアもマスメディアによって市民権を得たそんな中で、辛抱する事はないと言う人もいる。個人的人権に関わることは断固として向かわなければならないと他団体のリーダーから温かい支援が届く。ことを起こすために活動していない。辛抱が先行する。

『一言コメント』被災者復興支援会議のフォーラムに出席した留守中に、女性ボランティアに机を叩きながら長時間いやみを言う。仲間が涙ながらに連絡してくる。言っている本人にいま一番支援が必要か？

県幹部に事の事実を話しながら、新聞紙にボランティア活動許可書と書いて下さいと冗談とも本気とも取られる話をする。仲間の心労が心配だ。

後日他の役員が、申し訳ない、謝りたいと丁寧な言葉をもらうが、言葉の裏に隠れているものがあり何処まで何を信用してよいか迷う。仲間の結束が強固なので救われる。

5/20 グループ交流会 姫路で被災者復興支援会議の小西座長と山口委員と事務局員3名に遠隔地の姫路まで来ていただき感謝する。平素の活動で知りえたものを発信し、今後の課題等に

ついて話し合う。出てきた事項を整理する。

- ①アルコール依存症患者の対応に苦慮している。一人暮らしの寂しさから手を出している。
- ②覚えがなくなり生活が困窮している。行政支援者の温かい対応をお願いしたい。
- ③問題が煮詰まり、これからが大変だ。
- ④ボランティアの力量以上の問題が山積する。活動後のふりかえりで仲間と問題を共有しているが、重い荷物が多くストレスが溜まる。専門家のスーパーバイズを受けたい。
- ⑤辛い中から自分の成長が見える。支え支えられている中から何かが見えている。
- ⑥長期の関わりで、ボランティアと住民が共依存に陥っていないか、自立を妨げていないか、ふりかえりふりかえりであるが評価できない。
- ⑦自治会（一部役員）とシツクリいかない。これで神経がすり減ってしまう。『活動場所を与えている』『させてやっている』。何を持って来たのか。何しにきたのかと毎回の様に厭味を言われながらの活動である。その人自身にケアが必要と思うが、こちらも人間だ。

〔引っ越し後のケア〕

- ①電話番号を聴いた人には連絡を取っている。空き家入居者は、寂しく切ない思いを伝えてくる。
- ②姫路にも復興住宅があるので次の展開を模索している。
- ③引っ越し時に受け入れ先のボランティアには情報を伝えない。プライバシーがある。必要なのは保健所及び関係機関に伝えている。

〔ボランティア活動で思っていること〕

- ①私たちのボランティア活動は、試行錯誤しながらも最後尾を走るボランティアと言い聞かせている。しかし、燃え尽きつつある。
- ②行政も辛いところに手が届く支援を……。
- ③仮設住民は神戸市民だ。以前は神戸市に対して不平不満があったが、今は定期的な訪問で色々と相談されている。不満の声は聴かない。住民票も殆どの方は移動されていないが、不利益を受けるようなことはないようだ。
- ④一部役員は名刺の肩書で判断される。冗談であるが支援会議認定のボランティアと言いたいぐらいあつれきがある。自由の中でも責任を持って活動している。
- ⑤職場では白い目で見られる。未だに仮設に関わっているのか。変わり者、変人、物好きと見られる。ボランティアに対する理解が希薄である。会社員・公務員である前に市民であり被災地の県民でありたい。
- ⑥仕事は遠隔地と言うことで機会が少ない。仮設と言われ差別を受ける。雇用促進助成期間が過ぎれば解雇される。助成金目当、パート賃金も差をつけている。

〔子どもについて〕

- ①人数も少なく小学校に行っている子どもは11人中3人。自然環境の中で伸び伸びと今は遊んでいる。
- ②子ども対象のイベントも実施している。
- 思いを伝えることで、肩の荷が軽くなる。今日は脇役から主役になる。

5/23 S地区一所持金が400円の人と会う。顔色は悪く、目眩がすると言われ血圧も高いようだ。

仕事をしている時は、ボランティアなんかいない。何しにきたと拒否していたが、生活が緊迫するとSOSを発信する。冷蔵庫は開きばなしで何も入っていない。米びつも底付きぬかもない。先入観で元気な人とそこは飛ばして訪問していた。丁寧に訪問すべきだと反省しながら、週明けにケースワーカーにつなぐことにする。杓子定規に返してくるので伝えるのが辛い。そっと当座の生活費を置いて帰る。

5/25 子ども対象イベント T地区-マイクロバスを貸し切り、赤穂高山牧場と遊園地のある海浜公園に行く。初めての外出で、家族と共に参加。バーベキューまで思い思いに広場で遊んだり、画用紙で写生したり、凧作りをする。写生ではボランティアの似顔絵を書いて『…さん元気で』とボランティアに感謝の気持ちを伝えてくる。瀬戸内海が一望できる小高い山でバーベキューでワイワイガヤガヤはしゃぎながら食べる食事がこんなに美味しいとは…。子どもとの関わりがこんなに楽しいものか。神経をすり減らしながら活動する日々が嘘のようだ。子どもたち以上にボランティアが日頃の苦勞を癒したようだ。

5/26 ケースワーカーに連絡するが、風当たりがきつい。病弱で窓口に出向けないから訪問活動のついでに寄ってと頼むが、窓口にはこない駄目だ。『仮設と言って特別扱いしない』とビシヤリ、何も特別扱いしてくれと言っていない、血圧が高く動ける状態でないと言っても『何の病気だ？仕事に行く気があるのか？』と次々と問いかける。仕方なく担当の民生委員さんにご足労していただき、自家用車で送迎してもらう。仕事の厳しさは理解できるが、半歩踏み出す気持ちで対応してほしい。

5/30 『震災ボランティアから学ぶこと』 カウンセリング研究会総会で、講演する。仲間の前では緊張する。『日々の活動から学ぶことは、学問に勝るものである』。学習のために学習している人もいる。実践は大切。仲間は、自分の課題を求めている人、職場で生かす人、ライフワークとして生かしたい人様々だが、限られた枠組みから一歩踏み出したとき、見えなかったものが見えて来る。現場実践で学ぶことの多さを分かってもらえば、今日の成果はあった。

6/1 『熱心と強引は紙一重』 第三次の一元化募集で定員割れ住宅の再募集が始まる。各戸に募集要綱を配付する。

遠隔地仮設優先であるが、定員割れはそれなりの理由がある。行政支援者が熱心に進めているが強引さも目につく。苦情を投げかける人もいる。元いた所へ帰れない現実は分かっている。

6/2 仮設支援ボランティア会議に出席する。T地区の夏祭りについて過去2年しているから今年もする事になる。本心はしたくない。住民数が減少する中でこころの動き・コミュニティの崩壊等について把握しているのか疑問である。仮設はT地区だけでなく他に3ヵ所ある。これだけのエネルギーをついやするのであれば各グループ単独で計画するほうが真の支援につながる。参加住民数とボランティア数が大幅に逆転し、ボランティアが盛り上がっている様子を想像するだけでゾッとする。ボランティア間の盛り上がりは他所のイベントを利用すればよい。主役と脇役が逆転したくない。参加しなければ色々の中傷する人もいて仕方なく参加する。グループとしては四ヵ所の仮設住宅とバランスよく関わりたい。

6/6 事件 S地区-ふれあいセンターで起きる。行政支援者の手持ち配置図(名簿入り)にア

アルコール依存症と書いた原稿を置き忘れ、名指しされた人がそれを見て朝から一升五合程飲んで、『俺はアル中だ・アル中だ』と言って住宅内を自転車で走り回る。その挙げ句、うっぶん晴らしにふれあいセーター内の備品を散らかす。一寸したミスがこんな結果になる。アルコール依存症ではない。強いて言えば酒癖が悪いだけである。権力者が弱者を苛め追い詰めていくことに苛立ちを感じる。

T地区－仮設入居後、食事をまともに取らない中年男性が内蔵疾患で入院する。近隣の仲間が数日前から異変に気づき入院を進めるが一向にらちがあかない。部屋の中から施錠して開けない。入院すれば当分の間出る事が出来ないと知っているのか、問い掛けても応答せずかたくなに閉じこもる。最後の手段を行使するかと思った時に、やっと鍵を開け緊急入院させる。栄養バランスの崩れとお酒で肝臓が弱っている。体調を崩す人が目につく。料理教室まで開くことが出来ず、活動の限界を知る。

- 6/12 S地区－戸別訪問。ボランティアの顔を見て『元気がない』。と心配してくれる。一寸待ちと言って冷蔵庫から冷たいビールを持ってくる。『これで元気つけ』退去まで元気で面倒見てもらわんといけんからと労ってもらう。ボランティアのボランティアをしてもらう。

アルコール依存症の家族と本人に入院か、救急車を呼ぶまで待つか二つに一つと伝える。気の重い話であった。

- 6/15 T地区－戸別訪問。4月からボランティア準備室で集合し活動していたが、住民から何故センターを利用しないのかと言われるが、別に理由があるわけでもない。ただ、一部役員にいやみばかり言われ入りにくくなっていた。逃げている分けでもない。今日からセンターを利用する。

ふりかえりで住宅内の雑草が気になるという意見が出てくる。時間経過と共に環境整備ぐらいは自分たちでという意見といやまだまだそんな気持ちになれないの両論が出る。草抜きをした住民に花まで抜いたとクレームをつけた人がいた。草抜きは、結論が出ないまま持ち越しにする。自立支援とは難しいことだ。

- 6/17 B地区－最高歳者。復興住宅のシルバーハウジングに当選している。入居審査が7月始めから始まるが待てない。早く審査してほしいと市に頼んでと言われ連絡すると快く変更してくれる。今日一緒に神戸に入居審査に行く。お年寄りの一日一日の大切さを実感する。入居が決まってから張り詰めた気持ちがなくなっているのが心配だ。

県こころのケアセンターに立ち寄り近況報告する。煮詰まった問題が山積するなかで、センター職員の訪問を依頼するが、訪問は出来ないみたい。姫路の仮設だけ何故訪問がないのか疑問。仲間の勉強会なら何時でも協力すると力強いお言葉をもらう。長時間聴いていただきスッキリする。

こころの整理もついた。

- ① 先ず自分自身のケアが先決。
 - ② 幻滅期で沈みがちな場所から引き上げ、次の場所を開拓する事も必要。
 - ③ 痛まない範囲で活動する。引き上げても仮設住宅は回っていく。
 - ④ 出来ることと出来ないことをわきまえる。
- 常にふりかえり・ふりかえりの活動だ。仲間に伝え共有したい。

- 6/20 次の活動場所を求めて調査を開始する。市内の復興住宅自治会長宅を訪問する。74軒中32軒が被災者である。70歳以上が19名もいる。自治会行事とか会費徴収に非協力的とか……自治会運営に難儀されている様子だ。新旧住民の交流がないのでボランティアで企画したい。会長も快く引き受けてくれる。しかし、活動するまでに解決しなければならない諸問題が山積している。
- 6/29 『フラッシュひょうご』収録 S地区—県広報課依頼。団体紹介と遠隔地仮設の状況を放送する内容だ。主な活動は戸別訪問だが、絵柄にならないので『ぼかぼか体操』（身体とこころのリフレッシュをはかる）とお茶会をする。久しぶりのイベントで楽しい一時であった。収録となれば色々と気遣いし疲れる。

〔ボランティア活動記録から抜粋〕

姫路こころのケアネットワーク代表
岸 岡 孝 昭

